

独学宣言

～もう学校はいらない～

馬場 祐平

「学校で僕らが学ぶもっとも重要なことは、

『もっとも重要なことは学校では学べない』という真理である」

村上春樹『走ることについて語るときに僕の語ること』

まえがき

「もう学校はいらない」という副題は挑発的に聞こえるかもしれないが、すべての学校が不要だと言いたいわけではない。むしろ、社会のシステムとしての学校は必要不可欠だと思う。では、なぜそのような副題をつけたのか。

幸か不幸か、僕は学校からドロップアウトしたことによって、どのように生きるべきかを否が応にも考えざるをえなかった。独りで考え、試行錯誤を重ね、たくさんの失敗をした。でも、そのおかげで「もう学校はいらない」と言い切れるようになった。

「もう学校はいらない」と言い切れるのは、この時代を生き延びていくための能力と自信が身についた、と感じられた時だ。そのような能力と自信があれば、多少の荒波がやってきても乗り越えてサバイバルしていける。

学校とは、何かを学び、そして出て行くところだ。だとすれば、いつまでも学校を必要としている方が異常であり、学校で達成すべきゴールのひとつは「もう学校はいらない」と言えるようになることではないだろうか。

卒業式に皆で記念写真を撮るのはいい。でも、その写真に収まった人のいったい何割が、明るい未来を心のうちに描いて卒業していくのだろうか。

卒業式なんて出なくてもいいから「もう学校はいらない」と言い切れる若者が増えてほしい、と僕は思っている。それは学校で優秀な成績を取るよりも、おそらく難しい。でも、その難しさを乗り越えなければ、この時代をまっとうに生き延びることは困難であるように思える。

この時代を生き延びるために必要なことを、学校がすべて教えてくれるわけではない。家庭をはじめ、周囲のサポートがあればいいが、これだけ様々な問題を抱えた社会の中で、誰もがそれを十分に受けられるとは考えがたい。

それは社会が厳しくなったということであり、悲しむべきことなのかもしれない。ただし、その一方で現代は、ある種の能力とタフさを身につければ、荒波を乗り越え、自由に生きていける時代でもある。そこには、希望らしきものがあるように思える。

「独学」は、そうした希望を心のうちに取り戻すための鍵だと思う。

独学とは「孤独な学び」だ。それを、苦しくて嫌なことだ、と思う人もいるだろう。

でも、考えてみてほしいのだけれど、孤独というのはすべての人が生まれ持って抱えているものだ。孤独じゃない人なんていない。だとすれば、大切なのは、孤独であることを認識した上で行動を起こすことではないだろうか。

孤独から目を逸らしては、何も起きやしない。孤独に生きざるをえないことを受け入れた上で、他者や世界とつながるために自ら主体的に行う「学び」。そのようなイメージを「独学」という言葉に託したい。

本書で書かれていることのほとんどは、学校では教えてくれないものだ。学校では、きちんと椅子に座って、出席して、宿題をやって、先生の言うことを黙って聞ける子どもが良しとされる。そこには「独学する」ことの意味や必要性を学ぶ契機はほとんどない。

そのような学校のスタイルを否定するつもりはない。ただ、僕はそうした決まり事に素直に従える子どもではなかった。そのせいで随分と遠回りをした。でも、遠回りをしたおかげで本書を書くことができる。そして、そのようにして書かれた本書を必要としている若者は、僕の経験上、少なからずいるだろう。

自分の道を自分の手で切り拓く決意をして、そのために独学する力を身につけ、「もう学校はいらない」と言えるようになりたい。

本書のタイトルは、そうした想いを胸に秘めた人に届いてほしいと願ってつけた。誤解されても非難されても仕方がないが、届くべき人には届いてほしいから、そのことを最初に説明した。

本書の内容は大きく二つに分けられる。「もう学校はいらない」と言えるようになるまでの僕のたどってきた「道のり」と、それを経て僕が得た「ハウツー」だ。

「道のり」は自伝的な一章「僕はこんな冒険をしてきた」と、人生観をまとめた四章「『ゲーム』と『物語』」に、「ハウツー」は学習法としての二章「ウェブ時代の読書術」と、行動術としての三章「踏み出せば、その一足が道となる」に、それぞれまとめた。この四つの章に「序章」と「終章」とをあわせて本書は構成されている。

以上、前置きはこのくらいに留めるが、本文に入る前に、最後にひとつだけ。

本書には、目新しいことは一切書かれていない。そうしたことを期待して読んでも、おそらくほとんど何も得られない。でも、ゆっくり味わうようにして読んでもらえれば、何かを心で感じ取ってもらえるのではないかと思う。

僕は、そのような無数の本との出会いによって今まで生き延びてきた。あるいは、そのような味わいをさせてくれた人たちとの出会いによって。そうした人や本には、いくら感謝してもしきれないほどだ。そのようにして僕が学んだことを詰め込んだ本書が、あなたにとっても生き延びるための糧となる一冊になればと願っている。

独学宣言

～もう学校はいらない～

目次

まえがき

序章 受験はゲームにすぎない

一章 僕はこんな冒険をしてきた

二章 ウェブ時代の読書術

三章 踏み出せば、その一足が道となる

四章 「ゲーム」と「物語」

終章 自由を引き受け、個として生きる

あとがき

本書に登場した書籍・作品一覧

序章 受験はゲームに過ぎない

断崖絶壁に立たされた18歳

2002年1月。そのとき僕は18歳になったばかりだった。

たいていの18歳の男子と同じく、当時の僕は「自分の人生にはなにかどでかいことが待ち受けているのではないか」と夢想していた。その一方で「自分はなにも起こさず何者にもならないまま、ゆっくりと死んでいくのではないか」という不安を抱えてもいた。

より正確に言うならば、それは不安というより恐怖に近い感情だった。というのも、僕はどこにでもいる18歳の男子ではあったけれど、一年ほど前に高校を中退したという事実によって他の18歳とはかなり違った状況に立たされていたからだ。

それまでは目をそらしてきた現実、高校をやめてしばらくはゲームセンターとネットゲームに熱中することで目をそらしていたのだけれど、18歳という年齢が僕にその事実を突きつけた。

よもや自分がレールから外れるなどと想像する若者はいない。そして、そうなってみてはじめて知る。この国ではレールからドロップアウトした若者の選択肢は限られていて、非常に生きづらい。ゲームセンターとネットゲーム以外の世界を知らない高校中退の18歳を受け入れてくれる場所はほとんどなかった。

恐るおそる周りを見渡して、そして愕然とした。同じ世代の若者はセンター試験を既に受け終わって、大学に進もうとしている。それに比べて僕は……。

僕は、何者でもなかった。そして誰からも期待されていなかった。学校の先生からは見放され、家族や親戚からも諦めかけられていた。恋人なんてもちろんいなかった。携帯電話のない時代、友人とも疎遠になっていた。

今の僕からすれば18歳の若者は無限の可能性にあふれている。それはどんな絶望的な状況に置かれた18歳であっても変わらない。1、2年くらい他の人から遅れたとしても、人生80年のスパンで見れば大した問題ではない。むしろ、その遅れが意味を持つことだって大いにありうる。

でも、そんなことを知る由もない18歳の男子にとって、その状況は断崖絶壁に追い詰められたのと同じだった。

そんな時、作り話の中では、どこからともなく救いの手が差し伸べられる。

だが現実にはそんなものは登場しない。そのまま断崖絶壁から海の底へと落とされてジ・エンド。それが物語ではない現実の人生の厳しさなのだ。実際、そうなる自分が頭をよぎったりもした。

追い詰められて自暴自棄になったり、思考停止に陥ったりする若者が少なからずいるのを、僕はそれから10年の間で知ることになる。でも、幸いにも当時の僕は、受け入れがたい現実を前にして、なんとか歯を食いしばって立ち向かおうとした。僕の人生には、まだまだ面白いことが待ち構えていると信じて。

そうやってあがいているうちに、インターネットを通じて大検（現在の高卒認定）を経て大学受験というルートがあるのを見つけた。そして、大学に入れば高校中退という負の経歴が打ち消されることを知った時、この道に賭けることに決めた。

そう決心してから一週間後、「2ちゃんねる」の掲示板に「高校中退の落ちこぼれだが、ゼロからはじめて1年後に志望校に受かる」という書き込みをした。

強気で書いたけれど、自分にとっては残された最後の道だと感じていたから必死だった。追い詰められたネズミが、渾身の力を振り絞って書き付けた言葉だった。

受験を終えて

それから受験までの1年間、僕は最初の半年間をインターネットと本を通じて「合格する方法」の研究にあて、残りの半年間を机に向かって独学する時間に費やした。

そして1年後、僕は志望していた大学に合格した。

こう語ると僕に勉強への特別な才能があったように思われることが多い。でも、僕はそれまで取り立てて成績が良かったなどということは一度もない。田舎の公立の中学校でも中の上くらいで、そこで入学した公立高校ではずっと最下位争いをしていた。

ただ、僕には受験勉強への適性はあった。それは、ひとつは「ゲームにのめり込んでいた」という経験に由来する。そして、もうひとつはインターネットというツールがあったことに。

僕はゲームセンターの格闘ゲームにおいても、ネットゲームでの多人数の対戦においてもかなり没頭していた。それも当時はまだ未熟だったインターネットを使って情報収集を徹底して行なってもいた。

結果として、地元のゲームセンターにおいても、高校をやめるほど熱中していたネットゲームにおいても、僕はかなりの強さを誇っていた。それくらい、僕はゲームをやりこんでいた。

それは僕なりのゲームに対する「努力」だった。でも、当たり前だけれど、そんなことは家族も学校の先生もまったく取り扱ってくれない。そうして僕は学校の中で落ちこぼれていき、周りからまったく認めてもらえない状況になった。

そのことが当時の僕には不満だった。ゲームの中でこれだけ努力しているのにもかかわらず、なぜ誰もそれをわかってくれないのだろうか、と。

高校の同級生は必死で勉強していた。朝までネットゲームをして、授業中はすべて寝ている僕を尻目に、休み時間も必死で数学の問題を解いている人が少なくなかった。

そんな同級生を僕は内心ではくだらないと思っていたけれど、彼らは学校の先生にも褒められ、おそらくは家でもそれなりの待遇を受けて、きっと世の中をうまく渡っていくのだろうということは理解できた。

それに比べて僕は、意味のないゲームに熱中しているどうしようもない奴なのだろうか。そんなことが頭によぎっても、もはや一度落ちこぼれた勉強を取り戻せるわけもなく、逃げるようにゲームへ没頭する日々が続いた。

そうして僕は高校をやめるに至るわけだけれど、結果としては、それくらいゲームにのめり込んでいたことは後になって活きた。受験をしようとして情報を集めはじめた時、受験はこれまで僕が没頭してきたゲームと同じ構造なのだということに気がついた。

受験という勝負の仕組みはシンプルだった。出題範囲も限られている。後は、それをいかに効率的に覚えていくかに過ぎないゲームだった。そして、ゲームに上達するコツがあるように、受験勉強でも成績を上げるコツが存在することに気がついた。

そこまで気がつけば、あとは受験というゲームの仕組みを研究し、その攻略法に沿って徹底的にやりこめばいいだけだった。それが理解できた瞬間に視界は開けて、僕はそれまで熱中してきたゲームにのめり込むように受験勉強へ没頭したのであった。

受験勉強と「学習の高速道路」

僕がこうした受験勉強をすることができた理由を知ったのは、それから何年も経ってからのことだった。そして、それは塾を開いた最初の一年目に、とある塾生に教えられたべ

ストセラー『ウェブ進化論』（梅田望夫／ちくま新書）に書いてあった。そこには将棋の羽生善治が語ったこんな言葉がひかれていた。

「IT とネットの進化によって将棋の世界に起きた最大の変化は、将棋が強くなるための高速道路が一気に敷かれたということです。でも高速道路を走り抜けた先では大渋滞が起きています」

将棋の世界においては、強くなるための情報がインターネットにあふれているという。そして、強い相手と戦うための環境も、インターネットを通じて24時間整備されている。だからこそ、将棋に没頭することができる人にとっては、以前と比べ物にならないほど短期間で一気に強くなることができる。

これは、まさしく僕がゲームや受験勉強を通じて経験したことだった。たとえば地元のゲームセンターでは、当時まだ一般に普及していなかったインターネットの情報を僕だけが得ていたから負けることはなかった。

将棋の世界においては「その先の大渋滞」が起きていると羽生は言う。僕はそれをネットゲームを通じて経験していた。情報を集めることで短期間に強くなることはできる。でも日本中から、あるいは世界中からプレイヤーの集まるネットゲームにおいては、どれだけ没頭しても1位を目指すことは限りなく難しい。

僕は高校を中退するほどゲームに没頭していたし、一時はプロのゲーマーとして食えないかという道を探したくらいだったが、世界中を探せば僕より上手いプレイヤーはいくらでもいた。そして、すこし冷静になって考えれば、僕は一生をネットゲームに捧げるほどの覚悟はなかった。だから、僕はその道を降りて受験勉強に向かった。

そうして向かった受験勉強という道にも「学習の高速道路」は存在した。しかも、ネットゲームとは違い「その先の大渋滞」はそこにはなかった。なぜなら明確な1位を競うネットゲームと、かなりの合格者が出る受験勉強は根本的に違うものだったからだ。

受験勉強のプレイヤーは毎年変わり続けるし、1位を取らなくても合格できる。日本でいちばん難しいとされる東京大学だけでも三千人が、僕の母校の早稲田大学なら一万人が合格する。

大方の受験生にとって、受験勉強というゲームは数十年前と大して変わることなく、旧態依然とした方法で争われていた。僕は当時インターネット上にあったすべての受験情報を集め、関連する書籍も片っ端から読み、勉強の方法を突き詰めていった。

どんな進学校で学ぶ受験生であれ、数十年前と大して変わることない仕組みの中で勉強するのと比べれば、僕がインターネットを通じて見つけた「学習の高速道路」を走るスピードは圧倒的だったのだろう。

僕が他の受験生と違うところがあるとすれば、僕はそれまでに没頭してきたゲームの経験を通じて、受験勉強を「ゲーム化」する力に長けていた点だけだ。そしてその受験勉強というゲームの内実はいえ、受験勉強など結局のところ暗記ゲームに過ぎず、どんなやり方をするのが効率的なのか、というだけの話だった。

「受験はゲーム」である理由①

僕が前著『受験はゲーム』を出版した理由のひとつは、受験はゲームのようにクリアできるということを伝えたかったからだ。

とはいえ、それまで勉強が苦手だった若者が、がむしゃらに勉強して成績を伸ばすというのは案外むずかしい。なぜなら、勉強が苦手であるということは、それまでのやり方が悪かったことの証であり、やり方を変えないかぎり状況は変わらない可能性が高い。

前に進むことのできないゲームほどつまらないものはない。受験勉強を志す前の僕も含めて、多くの方はこうした状況に陥っている。

でも、ゲームのルールを知り、その上達法である「学び方」を身につけ、それに従って机に向かっていけば、勉強は努力した分だけ成果に結びつく。

「頑張れば結果が出る」という感覚は重要だと自分の過去を振り返って思う。そうした経験がなければ、何かを努力しようというモチベーションは生まれない。

受験以外の場所でそうした経験を積んでいけばいるほど、受験においても頑張ることができる。対象が何であれ、「頑張れば結果は出る」という感覚は人に自信を持たせ、努力する根拠になる。たとえば僕がゲームセンターやネットゲームで経験していたように。

世の中にはたくさんのゲームがある。コンピューターゲーム限らず、将棋のようなボードゲームもすべてゲームだ。また、スポーツは基本的にすべてゲームといえる。

僕のように高校をやめるほどネットゲームに没頭していなくても、多くの若者は何らかのゲームにのめり込んだ経験があると思う。そこでのめり込んだ分だけ、自分のスキルや能力、ゲームの腕前は上達したはずだ。

そうした経験を思い返せば、これまで勉強したことのない人でも怯えずに受験勉強に立ち向かえるのではないだろうか。それが実行できれば自然と結果はついてくる。成長を実

感できれば、勉強は本物のゲームのように没頭し、楽しめるものへと変わる。結果として嫌々勉強していた頃と比べて圧倒的な成果を出せる。

受験ほどルールとゴールが明確で、しかも一人の人間の生涯に影響を与えるゲームは少ない。一般入試に限っていえば、点数以外の要素は基本的に関係ない。だからこそ、それまでどのように生きてきたとしても、受験というゲームにおいてはフェアな勝負をすることができる。

そのゲームにのめり込めれば自然と結果はついてきて、生きていく上で有用な「切符」を手にすることができる。それは10年前の僕のような状況であったり、それまで苦しい立場で生きてきた人にとっては、人生を変えるチャンスであると僕は思う。

それが『受験はゲーム』を通じて伝えたかったことのひとつだ。ただ、僕がいちばん伝えたかったのは、もうひとつの「受験はゲーム」という意味だった。

「受験はゲーム」である理由②

「受験はゲーム」の二つ目の意味は、受験というゲームの勝ち負けによって人生が決まるわけではない、という自明のことだ。

振り返ってみれば、僕は受験というゲームが得意だった。与えられた時間内で、僕より効率的にこのゲームをクリアした受験生はほとんどいないと思う。受験というゲームへの適性が高かった僕は、結果としてそれを自分の仕事にすることになった。それは紛れも無い事実だ。

でも、だからこそ思う。受験というゲームには向き不向きがある。その適性だけで自分の人生の価値を判断するのはあまりにもったいない。そんな狭い価値観で人間の価値を判断する人間がいたら、それこそ最も軽蔑すべき存在ではないだろうか。

だが、現実にはそうした考え方が一般的ではないだろうか。僕は高校をやめた時にはじめてそれを痛感した。「受験で人生は決まらない」なんて口で言いながら、内心ではそれに大きな価値を置いている大人がどれほど多いことか。

家族も学校も塾も予備校も、そうした幻想を強化するために働いているように僕には思える。親は勉強しなさいというし、学校では成績のいい人間が優遇される。塾や予備校はそれをビジネスの種にしているのだから、それを壁一面に張り出して煽っている。

そうした現状に疑問を抱かせるべきマスメディアは、むしろ助長する役割を担っている。たとえば毎年春に高校別の東大合格者を掲載する雑誌のように。

そうした価値観の中で育った子どもたちが集まるインターネットでは、それが極まって「一流大学以外はクズ」とカジュアルに発言され、それを誰も否定しない空気が生じている。それがいまの若者を取り巻く環境の現実だ。

正直に言おう。

そうした環境で育ってきた僕自身、その価値観から抜け出すことはなかなかできなかった。受験で人生を変えることができたと感じていた分だけ、自ら勝ち取った成果を自分の抛り所に使っていた。そこから完全に脱するまで、十年近くかかった。

自明だと思われている事実が、僕らの心の奥底ではまったく違う形をとっていることはありうる。それは目に見えないからこそ、目に見える物事より変えるのが難しい。

「学歴で人を判断してはいけない」と語るのは簡単だ。でも、目の前に東大生と高校中退者がいて、東大生が人間的に優れていて、ルールから外れた高校中退者は劣っていると思わないのは、そのように語ることより遥かに難しい。

でも、その両者の間にある違いは、受験というゲームの得意不得意だけだと僕は思う。

受験によって得られるものは馬鹿にできない。でも、それで人生のすべてが決まるわけではない。むしろ「受験で人生が決まる」と思ってしまう考え方には大きな危険が潜んでいる。

いちばんの被害者は、そうした価値観に汚染されて育つ若者だ。悪気もなくインターネットに「一流大学以外はクズ」と書いてしまう若者は、工場から垂れ流された化学物質をその一身に引き受けて奇形になった魚のように僕には思える。そして、その奇形魚の吐いた言葉を受け取る若者もまた、汚染されていく。

そのことを伝えたくて、僕は『受験はゲーム』のあとがきにこう書いた。

「学歴が不要だとは言わない。でも、学歴は目的ではない。大切なのは、その先に何をするかということだ。子ども時代、ひとつのゲームを終えたらすぐ次のゲームに取りかかったように、自分が熱中できるゲームを遊び続けること。そこにこそ、人が生きる喜びがある」

たとえ受験で勝ったとしても

受験で勝てたからといって、そのまま生涯勝ち続けられるほど人生はシンプルにできていない。28年間しか生きていない僕にだって、それくらいのことは分かる。

だから「受験で人生が決まる」という考え方は幻想にすぎない。正しく機能しているうちは幻想も役に立つけれど、それが機能しなくなった時に僕らは幻想に裏切られることになる。そして、その幻想を信じていた分だけダメージを食らうことになる。

志望校への想いが強ければ強いほど落ちた時のショックは大きくなる。自分を否定されたように感じて立ち直れなくなる人もいる。その恐怖感が強くなりすぎて、何浪もした挙句、挫折して人生に絶望する若者を僕は少なからず見てきた。

また、受験生が偏差値の高い大学を目指すいちばん理由は、その出口である就職が保証されているからだろう。けれども、たとえば僕の母校を見渡しても必ずしも望みどおりの働き口を得られているわけではない。

おそらく、選ばなければ仕事を見つけることはできるのだろう。でも、自分は受験における勝者であるという思い込みが強ければ強いほど、その価値観の外に出ていけない。だから就職活動を受験と同じ価値観で勝負することになる。偏差値表の上にいけばいい、という考え方だ。

就職活動も一種のゲームだけれど、受験とはルールも違うしゴールも明確ではない。それに、受験とは違って基本的に応募者に対する合格者は圧倒的に少ない。数十倍、数百倍というのは当たり前だ。

そのゲームに受験と同じ価値観で立ち向かうことによって、どれだけの大学生の自尊心が失われているだろうか。そもそも、そうした価値観で立ち向かわざるをえない就職活動という仕組み自体が、どこかに歪みを抱えてはいないだろうか。

2012年は就職活動での苦にして自殺した若者が急増したと大きく報道された。でも、おそらく今後かなりの長期間にわたって、この国の雇用環境が持続的に良くなるということは考えにくい。

今や一人の子どもが教育を受けて、受験を通じて就職活動に至るまでは、もはやイス取りゲームのような状況だ。そして、これから時代が進むに連れてイスの数は減っていく可能性が高い。それに追い打ちをかけるように、たとえ一度イスに座れても、いきなり肩を叩かれて辞めさせられる若者の数は増える一方だ。

受験がうまくいけば、経済的にはそれなりの人生が約束される時代が確かにあったのだろう。でも、時代は変わった。そして若者の価値観も。親の世代はその価値観を変えることはできないのかもしれないが、既に幻想は崩壊しているのだ。

そうした中で、大半の若者は終わりなきイス取りゲームに参加するか、諦めて敗退するかのどちらかを選ばざるをえない状況になっている。それがこの国の若者を覆う息苦しさであるように思う。

僕が言いたいのは「学歴で人を判断するのはよくない」といった道徳的な問題ではない。はっきり言って、そんなことはどうでもいい。

僕が問題にしているのは、現実と噛み合っていない価値観を抱え、問題から目をそらしたまま時を重ねていると、結果的に取り返しのつかない結果を招くのではないか、という現実的な問題だ。

それを、僕らの社会を成り立たせていくという点から見れば、倫理的な問題と言うこともできる。倫理とは、道徳のような「善悪」の基準ではない。それは、その社会を作る人々が生き延びていくための現実的な方策だ。そのような倫理こそ、いま一人ひとりがよくよく考えるべきことだと僕は思っている。

「勉強」によって失われる「学び」

口には出さなくとも、多くの人はこのような現状を感じ取っている。子どもだって自分の生きている時代がどういう状況なのかということくらい薄々気がついている。でも、どうすればいいのかまでは分からない。だから遠くに見えるイス取りゲームに躍起にならざるをえない。

僕の通っていた高校の教師は「大学に行けばパラダイスだから、今は歯を食いしばって勉強するんだ」というような口調で生徒をモチベートしていた。

でも、日々の暮らしに困るような実感を持ちにくい現代の日本においては、歯を食いしばってイス取りゲームに参加するモチベーションを保てない子どもがいる。

そういう子どもを、僕より上の世代の人は「我慢が足りない」といった表現でネガティブに評価するのかもしれない。でも、我慢しても自分にとって見返りがあると感じられないのだとすれば、それは当然の考えというべきではないだろうか。

内田樹は『街場の大学論』の中で「いまどきの子どもたちは私たちの子ども時代と比べ物にならないくらい勉強『させられている』ように見える」と述べている。

その理由は「いやいややらされた勉強の反動」であるが、それは子どもたちの側の問題ではなく、むしろ「ほとんど子どもたちから学習意欲を組織的に奪い去るように『のみ』機能している家庭と学校の側の問題」であるとする。

僕はこの推論に全面的に同意する。

内田樹は続けてこのように述べる。こうした現状があるのは、教育の失敗ではなく「成功しすぎ」た結果であり、「これほど効率的に一つの規格化された人格を生み出すことに成功している教育システムはおそらく世界に類例を見ないと私は考えている」。

振り返れば僕はこの「規格化」にあらがっていたのだと思う。小さな頃から高校を辞めるまで、いつも学校という場所で問題を起こしていた。それが高校の中退という結果につながった。それが僕なりの「学びからの逃走」だった。

「いくら子どもを均質的にするシステムを作っても、必ずそこから脱落したり逃亡したりするものがある」という言葉に続けて、内田樹はこう述べる。「その少数の『はぐれもの』をある程度ゆるやかに包み込むことによって、システムのアウトプットはむしろ最大化する、というのが人類の経験が教えていることである」。

どんなシステムも老朽化していく。そして、その老朽化したシステムを作り変えるのは、そのシステムにすんなり従えた人ではなく、そのシステムからドロップアウトせざるをえなかった人や、違和感を抱いてしまう人たちだろう。それを内田樹は「はぐれもの」と表現した。

「しかるに日本の教育システムは、あまりに『うまくゆきすぎた』ために、システムからドロップアウトするものは網羅的に『排除』されて、病気になったり引きこもったり自殺したりして、文字通り『姿を消し』、彼らがシステムの活性化に関与する機会がなくなってしまった。それが今日の停滞の原因であると私は考えている」

僕も危うく「排除」されるどころだった。だが、システムからはドロップアウトしたものの、ギリギリのところで踏みとどまり、こうやって文章を書くところまで歩いてくることができた。これからどんな未来が待ち受けているかは分からないが、まずはここまで生き延びることができた幸運に感謝せずにはいられない。

椅子取りゲームに参加できない若者に「我慢が足りない」という大人は、底に穴が開いている船を漕げと言っているのと等しい。そんなことを言っているのに、能力のある人は船から逃げ出してしまう、そうでない人は船とともに海の底に沈むしかない。どっちにしても、船は沈没してしまう。

椅子取りゲームに参加するモチベーションを保てないのは、我慢ができないからではない。むしろ、そうした若者は危機を敏感に察知する嗅覚と、それを乗り越えようとする意志を持っている。そのような人こそ、船を生まれ変わらせる力を秘めている。

僕は、そうした若者が姿を消さずに生き延びられるようになることは、いつの日にか、この国に、その結果として世界にも、プラスの影響を与えるはずだと思っている。たとえそれが今すぐには理解されないとしても、僕はそう信じてやってきた。

「勉強」を超えて

高校をやめた時はほんとうに苦しかった。もう自分の人生は終わったのかもしれないという気持ちと必死で戦っていた。どれだけ強がっていても、18歳なんてそんなものだ。なにかが違っていれば、僕は人生を諦めていたと思う。

でも、振り返ってみると高校は出なければならぬものではなかった。高校をやめて有り余った時間を好きなように使えたことは、振り返ればむしろ大きな意味があった。

念のために言っておくと、だからといって僕は高校生に「学校を辞めた方がいい」と言いたいわけではない。そう言ったことは一度もない。

やめても生きていくことはできるけれど、辞めなくて済むならそれに越したことはない。「はぐれもの」はどれだけ引き止めても道を外れてしまうからこそ「はぐれもの」なのであり、それを進んで選択するのは間違いだと僕は思う。

高校という場所で学ぶことができるのは単純な受験勉強だけではない。生きる上でのかけがえのない経験、たとえば人間の関係性とは何かといったことを気が付かせてくれる。だから学校で勉強することや、過ごす時間を馬鹿にすることはできない。

大学受験も似たようなもので「たかが受験、されど受験」なのだと思う。実際、僕がこうやって塾を開いて仕事ができているのも大学に受かったからだ。そうでなければ、こうしたことを語っても見向きもされなかったろう。大学に受かることで、あるいは大学生活を通じて得られるものは、決して少なくない。

それでも、くどいようだけれど、受験で勝つことは「人生をやや有利」にする程度のものである。それを信じすぎることの危険性を考えれば、受験は18歳かそこらの時点で、どこで学ぶかを振り分けるだけのゲームだと考えた方が得策だと僕は思う。

受験は恐ろしいほど明確に勝者と敗者を振り分ける。でも、人生はそうした勝ち負けが起るゲームを連続的にプレイするものではないだろうか。そして、そうした勝負において一生勝ち続ける人なんて存在しない。

ゲームの勝ち負けには、それなりの味わいがある。でも、負けたことが後になって意味を持つということは往々にしてあることだ。たとえば僕が高校を辞めたことに、何年も経ってから意味を見出すことができたように。

僕自身、ゲームに勝ったり負けたりを繰り返してここまでやってきた。そうやって28歳までやってきたけれど、僕の人生はまだまだはじまったばかりだと思う。これからどうなるのかなんて、全然わからない。

ただ、ひとまず10年くらい前の自分のような「はぐれもの」に向けて、僕がゲームを勝ったり負けたりを繰り返しながらも、自分の人生という物語をここまで進めてきた道のりを書きたいと思う。

あらゆる物語で主人公が学びながら成長するように、僕もたくさんのことを学びながらここまでやってきた。それはゲームをプレイする中で得たものもあれば、どんなゲームを選ぼうかと悩んでいる時に得たものもある。

でも、ともかくも僕は時にあるゲームに没頭しては、それを終えたら勝敗に関係なく次のゲームを探してプレイする、ということを繰り返してここまでやってきた。

さまざまなゲームで訪れる試練をくぐり抜けながら経験を積み、時には失敗から教訓を、時には勝利から宝を得ながら、この世界でうまくやっていけるように自分を変化させていくこと。それが僕にとっての「学び」だった。

それは孤独な道りだったが、だからこそ、その道中で人と出会うことの喜びを感じることもできた。十代では想像すらできなかった人生のおもしろさを味わうことができた。

そのような「学び」を繰り返しながら、まだ見ぬ自分に出会うことは純粋な喜びだった。それは小さい頃から言われてきた「勉強」とは似ても似つかぬ楽しい経験だった。

ただ、どれかひとつのゲームの結果にこだわっていたら、きっと途中で潰れていた。それくらい僕はたくさん敗北を経験してきた。でも、敗北の悔しさを噛み締めて、次なるゲームを求めれば、必ず次なるゲームに出会うことができた。

そのようにして過ごしてきた10年間にまったく悔いはない。むしろ、10年前の自分に向かって「想像しているよりもずっと、人生は楽しいぜ」と声を出しにして言っていたくらいだ。

だから、まだ自分の遊ぶべきゲームを見つけていない人へ、そして、まだ自分の人生という物語がはじまっていないなと感じる人へ、まずは僕がどのようにしてゲームを見つけ、そして物語を展開させてきたのかを、10年間を振り返りながら語りたいと思う。

一章 僕はこんな冒険をしてきた

千円の冒険

僕はこれまで偉人との出会いに恵まれ、彼らとの対話によって多くを学んだ。古の知恵の結晶に触れたことも、現代の最先端の知を垣間見せてもらったこともある。

話を聞くたびにわくわくした。どんな偉人も始まりは平凡な若者に過ぎなかったことを知り、勇気づけられた。生涯忘れることのない宝石のような言葉も聞いた。そのような対話を繰り返すことで、僕の狭い世界はぐいぐい広がっていった。

僕が出会いたいと願わなければ、そうした対話の時間が訪れることはなかっただろう。でも彼らはいつだって僕の手の届くところにいてくれた。

実際、僕が彼らと対話をしたのは特別な場所ではなく、自分の部屋をはじめ、カフェや電車の中だった。その出会いは本屋や図書館という身近な場所で生まれた。

もう察しがついたと思うけれど、これは現実の対話ではない。読書を通じての一方的なコミュニケーションだ。これを対話と呼ぶことには違和感があるかもしれない。

でも僕にとって本とは著者そのものであり、読書とは著者と語り合うことだった。「著者に出会って対話した」というのは誇張ではなく、僕の実感そのままの表現なのだ。

大きな書店や図書館には古今東西の本がある。整然と並んだ書棚の背表紙だけ見ると、自分とはあまり関係のない、よそよそしいものに感じられることが多い。そんな時、僕はすこし立ち止まって想像する。

この本の著者たちはどのような人生を送ってきたのだろう。どんなことを学び、経験したのだろう。そして、その一冊にどのような想いを込め、何を伝えようとしたのだろう。

そんなことを考えながら目についた本を手に取りパラパラめくってみると、著者が伝えようとした「想い」を指先から感じることもある。その一冊に込められた「情熱」を感じ取れると、本の姿をまとった著者が自分に語りかけてくるように思える。

だが、本それ自体には生身の人間ほどのリアリティがない。そして、本を開いても無機質な文字ばかりが目に入る。だから一見しただけではその本の面白さは決してわからないし、「本を読むのは苦痛だ」と思い込んでいる人は少なくない。

でも、それは電源のついてないテレビを「ガラクタだ」と言っているのに等しい。

文章をたどって頭の中で著者の伝えようとしていることを再現できれば、いきいきとしたイメージが浮かんでくる。そのためには、本の世界を起動させなければならない。そして、本の世界を起動させるスイッチは、読み手の心の中にある。

スイッチを押してイメージを自分で作り出せるようになれば、映像を見ることで得られる受動的な観賞とは違い、「リアリティのある経験」として心身の奥深くに刻まれる。

本を読むことは、著者が長い時間をかけて通った経験と思索の跡を、短時間でたどり直して経験することなのだ。それは著者の築いた世界を冒険することでもある。

一冊の読書を終えるということは、こうした冒険をひとつ終えるということだ。しかもこの冒険は、いつでも、どこでも味わうことができる。それも、わりと手頃な値段で。

僕は一冊千円前後の読書という冒険を終えるたびに、日常の生活では決して得られない学びと経験を戦利品として携え、ワクワクした気持ちで現実の世界へと戻った。

リーディング・ワールドへようこそ

小説のような物語だけが読書における冒険なのではない。歴史も科学も哲学も、あらゆる本は冒険の舞台になりうる。だから読書とは、本を通じて人類の経験や叡智にアクセスし、それを「いま、ここ」に生きる自分の身をもって冒険することだと僕は思う。

読書と現実を切り離された別の世界だと考えている人は少なくない。でも読書と現実とは深く結びついた「ひとつの世界」になりうるし、事実そうなのだと僕は考えている。

現実世界（リアル・ワールド）を、読書世界（リーディング・ワールド）と結びつけた「ひとつの世界」として生きはじめてから、僕の中で、宇宙の歴史や人類の叡智と、自分が生きている「いま、ここ」が結ばれていった。そこで感じたのは、自分というちっぽけな存在が、無限の世界への冒険に一步を踏み出したような、ワクワクする気持ちだった。

この壮大な世界に踏み込むための鍵は、テレビの使い方よりもすこし難しい「読書の方法」を身につけることだった。「読書の方法」とは本の選び方や速読術といった狭い意味ではない。それは僕の考えでは「リーディング・ワールド」を冒険する方法であり、「ひとつの世界」を自在に冒険するための第一歩だった。

だから、それは僕にとっては「生き方」に通じる問題でもある。

高校を辞めてからの10年間、僕は読書世界での冒険を繰り返してきた。「リーディング・ワールド」の森は深く、谷は暗い。冒険の途中では手ごわい敵とも戦い、時には敗北して退却することもあった。

それでも諦めずに冒険を重ねることで僕の地図は少しずつ広まり、冒険のスキルも上達した。そうやってこなしリーディング・ワールドでの冒険から経験と戦利品を得ることで、リアル・ワールドを生き抜く力を得てもきた。

こうした「冒険」は「自分探し」と似ているかもしれない。でも「自分」はそこらへんに落ちているわけではないのだから、探したって見つかりはしない。むしろ冒険を積み重ねる中で、少しずつ築いていくのが「自分」ではないだろうか。

「自分探し」は青春につきもののように語られてきたけれど、僕の経験から言えば、ほんとうに必要なのは自分を作り上げていくための「冒険」だと思う。

実際、僕がどうにか道を切り拓いてこれたのは、絶え間ない「冒険」を通じて自分を鍛えてきたからだ。そうでなければ、あれほどどうしようもなかった僕が18歳からの10年という月日に押しつぶされず、ここまで歩んでこられたはずがない。

もちろん、10年経った今でも偉人たちを仰ぎ見る角度は昔とほとんど変わらず、相変わらず自分が比べようもないほど未熟者であることは痛感している。それでも、この10年の間、かろうじてでも自分の舵を手放さずに生きてこられたのはリーディング・ワールドでの冒険、すなわち読書のおかげだと思う。

だから、本章では僕がどのような本を読んできたのかを語りながら10年間の道のりを振り返ってみたい。

1冊目 「志」を立てる

高校を辞めて時間を持て余していた頃、面白そうな本を探してインターネットを眺めていた。

まだGoogleのようなロボット型の検索エンジンが出現する前の時代で、リンクをひたすらたどっているうちに「一番おもしろかった小説」について議論しているページを見つけた。

そこに挙げられた数百冊の小説のタイトルは、それまで聞いたことのないものばかりだった。その中から人気のある順に内容を調べ、面白そうだった本をメモして近所のブックオフに行くと、だいたい100円コーナーに置いてあった。

その中の一冊として見つけたのが『竜馬がゆく』だった。

幼い頃は出来の悪い子どもだった竜馬は、剣術を通して自信をつけ、故郷の土佐藩（高知県）を出て江戸へ剣術修行に赴く。

江戸の道場で竜馬が修業をはじめた頃、ペリー率いる黒船がやってくる。それを間近で見た竜馬は時代が大きく動くのを直観する。以降、激動の明治維新の中心人物として竜馬が活躍することになるのは、知っての通りだ。

竜馬が初めて江戸に出たのは、これをはじめて読んだ当時の僕と同じ17歳の時だった。自分と同じ年齢の男が、それからどのように成長していったのかを読み、自分もそうした人生を歩みたいと思った。

竜馬が江戸に出て様々な人と交わったように、東京に出て「熱い人たち」と出会うことを夢見た。そこに行ければ自分の人生も大きく変わるのではないかと思った。

また、成長した竜馬が「脱藩」することにも惹かれた。当時、「脱藩」は死罪だった。竜馬の脱藩を手助けした責任を取らされる形で、竜馬の実の姉は自害した。それだけの危険を覚悟して竜馬は脱藩し、だからこそあれだけの偉業を成し遂げることができた。

僕もそのような「脱藩」をしたかった。寂れた地方都市の暗く小さな部屋の中で、そのまま埋もれていくのは恐ろしかった。

僕が家から「脱藩」しても竜馬と違って誰にも迷惑は及ばない。そう思えば、僕がそれを目指さない理由はなかった。自分が今いる場所よりも、ずっと面白い場所がこの世界のどこかにはあると気づいたのだから。

「志」を立て、その実現のためには命も惜しまないという竜馬の生き様に僕は魅せられた。それは「いい大学・いい会社・いい人生」などという抽象的なイメージよりもずっと僕の胸に響いた。

あの「ワクワクする気持ち」がなければ、僕は受験へ向けての一步を踏み出せなかったかもしれない。もしそれができたとしても、本気で勉強することはできなかつたらう。

「人生は一場の芝居だと言うが、芝居と大きく違う点がある。芝居の役者の場合は、舞台は他人が作ってくれる。生の人生は、自分で、自分の柄に合う舞台をこつこつ作って、その上で芝居をするのだ。他人は舞台を作ってはくれぬ。」（『竜馬がゆく』第一巻）

この言葉を胸に僕は受験へと踏み出し、今に至るまでずっと「自分の柄に合う舞台をこつこつ作って」きたように思う。

かなり後になってこの本を読み返した時には、最初に読んだ頃とは違う読後感があった。当時の階級社会に対する竜馬の葛藤や、一介の剣客だった竜馬が短期間のうちに一人前の知識人へと成長していく姿が印象に残った。

晩成だった竜馬が剣術以外の学びを本格的にはじめたのは遅かった。竜馬の人生を大きく動かすことになる勝海舟との出会いも二十六歳の時だった。

それでも、三十一歳で暗殺されるまでの間に、竜馬は歴史的な「舞台」を自らの手でつくりあげた。

その原動力には階級制度をはじめとして、社会に対する「怒り」があった。

それは幼い頃から竜馬が自分の身をもって苦しんだ経験が生んだもので、そうした社会を変えたいという思いこそが彼の原動力だった。

17歳の頃にこの本に僕が心を打たれた理由は、単に竜馬が大きな舞台を作ったというだけでなく、その原動力となった彼の「苦しみ」に共感したのが大きかった。

2冊目 「自由」を知る

大学に合格し、東京で一人暮らしをするようになって、最初の数カ月は夢のなかにいるような心地だった。期待通りの様々な熱い人と出会い、これまで本の中でしか知ることのなかった世界を経験した。

でも、どんなものでも「慣れ」はやってくる。

特に大学の授業は期待を大きく裏切るものだった。教壇に立っている教授たちの学問に対する情熱は、すくなくとも僕には伝わってこなかった。ましてや竜馬にとっての勝海舟のような「師」になるとは思えなかった。

あれほど憧れた大学への興味も失っていき、友人には自宅で本を読んでいた方がずっとマシだと語るようになった。大学へ行くことは次第に減っていった。

竜馬に憧れ、受験生の頃は大学に入ったら政治を学ぼうと思っていた。それは受験勉強をする上での大きなモチベーションだった。そこで議員秘書の見習いのようなことでもしてみたが、いまいちピンとこなかった。

僕がそれまでメディアを通して考えていたのとは違って、現場で働く一人ひとりの政治家には素晴らしいと思える人も少なくなかった。よくこれほど頑張れるなど感じるほどに。だが、そのことは結果的に僕を政治から遠ざけることになった。

素晴らしいと感じた政治家は例外なく「他者のため」に生きる信念を持っているように思えた。だが、その一方で、僕はただ「自分のため」に政治と関わろうとしていた。ある時、そのことにはっと気がついた。その瞬間、僕の政治への熱は一気に冷めた。

政治にかかわる上で最も大切な覚悟すら持たぬまま、ただ面白そうだという理由で行動している自分に嫌気がさした。僕は目標を見失い、何をすべきなのか分からないまま、だらだらと日々を過ごしていた。

沢木耕太郎『深夜特急』と出会ったのはその頃だ。

『深夜特急』は作者の経験を元に書かれたノンフィクションだ。26歳の若者がバックパックとわずかな有り金を持って日本を出て、インドからイギリスまで乗り合いバスで旅をする。「バックパッカー」と呼ばれる旅人の中ではバイブル的な本だった。

竜馬が江戸へ行った後に日本全国を歩いて旅したように、大学に入ったら僕も旅をしたいと思っていた。

この本と出会ったのも「旅にでも出ようか」と考えてネットを巡っていた時だった。読み終えた後には、主人公が最初に立ち寄る街である香港・マカオへ、バックパックを担いで小旅行をしたりもした。

ただ、僕が物語の主人公のように長旅に出ることはなかった。

金銭的な問題はあったにせよ、本気で行こうと思えばいつでも行けた。大学にはほとんど行っておらず、時間はありあまっていたからだ。

だが、それが問題を根本的に解決してくれるわけではないことをこの本から学んでいた。

『深夜特急』は主人公がインドの安宿で目覚める場面から始まる。旅に出てしばらく経って観光にも飽きた主人公は、旅の目的を忘れ、できるだけ金をかけずに一日を過ごすことばかり考えるようになる。

それは、東京での暮らしでは飽きたらず「非日常」を求めて旅だったバックパッカーが、やがて旅という「日常」の中へ埋没していく印象的なシーンだった。

バックパックほどの「非日常」であっても「日常」になってしまう。それは僕の大学生活が「日常」になってしまっているのと似ていた。受験生の頃にあれほど夢見ていた大学生活も、今は平凡な一日の繰り返しに過ぎなかった。

もし僕が旅に出ても、今とたいして変わらない状況に至るだろう。旅の途中では面白いことも起こるだろうが、それが自分を根本から満足させるわけではない。

旅の意味合いは人それぞれ違うだろうが、その頃の僕には、自分が日本を出てバックパッカーになることは逃避でしかないように思えた。

一方で『深夜特急』は「自由」であることを教えてくれた。

その気になれば明日からバックパックを担いで地球一周の旅に出ることもできる。それほど自由を持っているのに、僕はそれをほとんど活かすことなく日々を過ごしている。

そう思った時、僕は主人公のように自分の世界に変化を起こそうと思った。そうして、当時の自分にとってはバックパックを担いで地球一周を目指すよりも、もっと広くて深い「世界を知る旅」に出ようと決めたのだった。

3冊目 「世界の仕組み」を知る

「世界を知りたい」という欲求は青年期に共通するものなのだろう。竜馬にせよ、沢木耕太郎にせよ、それぞれのやり方で世界を知ろうとした。当時の僕が世界を知る手段として選んだのは「哲学」という方法だった。

哲学とは言葉を通じて真理を探求する営みだ。はじめて哲学の世界に踏み込んだ時、その膨大な知の営みに圧倒された。

そこには「人生に意味はあるのか」「世界はどのような構造なのか」「死ぬとどうなるのか」といった、幼い頃から感じていた素朴な疑問に対する答えがあるように思えてワクワクした。

どこから手をつけるべきかが分からなかったので、まず数冊の「哲学史」の本を読んだ。それで分かったのは、哲学が数千年にわたる膨大な議論の積み重ねの上に成り立っていて、そのすべてを理解することは一生かかってもできそうにないということだった。

そこで僕は自分がピンと来る哲学者の名前や考え方を拾い上げ、それをインターネットで調べるといった方法をとった。これぞ、と思うものと出会ったら原典や解説書にあたった。そのように膨大な「哲学史」の中から自分に最もしっくりくる哲学者の考えを探した結果、何人かの興味深い哲学者と出会うことになった。

「いっさいの書かれたもののうち、わたしはただ、血をもって書かれたもののみを愛する。血をもって書け。そうすれば君は知るであろう、血が精神であることを」。そう語るニーチェの思想は迫力があつた。「語りえぬことについては、沈黙しなくてはならない」というウイトゲンシュタインの言葉にも痺れた。

そうした言葉は大学の教室の中では決して聞くことのできない激しさをもち、僕の心を揺さぶった。ただ、彼らの著作を読んだからといって「世界の仕組み」や「いかに生きるべきか」はまったく分からなかった。

僕は、過去の自分の経験から、世界が不条理に満ちていると感じていた。人間があまりに不完全であるとも思っていた。そうした世界や人間を、どのように捉えて生きていくべきなのだろうか。

僕が哲学に求めていたのは、そのような不安定な世界を生きるための指針となるような倫理や世界観だった。カミュというフランス人が書いた『異邦人』という小説には、その手がかりがあるように感じたが、なんとなく感じただけで、よく理解できなかった。

そうした中でスピノザという哲学者の言葉は、他の哲学者の言葉とは違う光を放っているように感じられた。実際にスピノザの著書『エチカ』を読み進めると、はじめに抱いた直感は確信へと変わった。

スピノザの態度は明確だった。世界が不条理に満ちていることを受け入れた上で、それでもこの世界は必然の上にあるべき形で成り立っていると説いていた。そのような必然性を認識することのほかには、人間が自由に、そして幸福に生きる道はないと語っていた。

「人生において何よりも有益なのは知性ないし理性をできるだけ完成することであり、そしてこの点にのみ人間の最高の幸福即ち至福は存する」。

一人ひとりの人生においては、とんでもなく不条理なことも起こりうる。でも、そうしたことも含めて、世界は成り立っているということを理解することができれば、その不条理も受け入れることができる。

『エチカ』は哲学に特有の言い回しが多い上に、全編が数学の証明のような形式で書かれている。そのためスピノザの哲学は難解だと言われることがある。

でも、スピノザに共鳴した後では、理解が難しいとは感じることはなかった。むしろ『エチカ』の一節を読み進めるたびに深く頷き、勇気をもたらした。

スピノザの言葉はニーチェの言う「血」を持って書かれていると同時に、ウィトゲンシュタインが指摘した「語りえぬもの」を語ろうとしているように思えた。『エチカ』をはじめて読み終えた時には「世界の仕組み」と「いかに生きるべきか」の答えが与えられたように感じた。

スピノザは『エチカ』の結論を述べた後、「それ以外に人間が幸福に生きる道はない」と語りながら、しかしそれは決して安易な道ではないと語っていた。

「もし幸福がすぐ手近かにあって大した苦勞なしに見つかるとしたら、それがほとんどすべての人から閑却されているということがどうしてありえよう」。

スピノザの背中を追いかけることで僕は「世界の仕組み」がどのようになっているのかを垣間見たように思った。険しい道だけれども、知性を磨き、世界をより明瞭に認識できるようになろう。それがスピノザから学んだことだった。

率直に言って、当時の僕のスピノザ理解は粗雑なものだった。それでも、その時点での僕には差し当たり十分な「世界の仕組み」の理解だった。「いかに生きるべきか」の方向

性が分かった気になり、とりあえず満足した僕は、ひとまず哲学に距離を置き、新たな進むべき道を模索しはじめた。

4冊目 人生を「自分だけの芸術作品」に

世界の仕組みを知っても、人間がどう生きるべきかを学んでも、そのことと、僕という生身の人間が具体的にどう生きるべきかとは別問題だ。スピノザが言うように「知性を磨き、世界をより明瞭に認識する」ことが「至福へ至る道」だと頭で理解できたとしても、やはり毎日のご飯を食べないといけないし、そのためには金を稼がなければならない。

ただ、当時の僕はまだ「進みたい未来」が見えていなかった。どんな仕事をするかなんて想像すらできなかった。だから、スピノザの哲学を実践した人々の生き方から何かのヒントを得ようとインターネットに向かった。

そうして分かったことは、スピノザが古くは文豪ゲーテから科学者アインシュタインといった様々な偉人に影響を与えていることだった。それを知るのは嬉しいことだったけれど、僕とあまりに距離のある彼らの生き方にいまいちピンと来なかったのも事実だった。

それでもスピノザというキーワードをヒントに、本やインターネットを巡っているうちに、サマセット・モームというイギリスの小説家に興味が湧いた。哲学に深い造詣がある一方、大衆小説家として著名であるという組み合わせにも面白さを感じた。

1915年に発表された小説『人間の絆 (Of Human Bondage)』は、『エチカ』第四章のタイトルをそのまま使った、モームの代表作かつ自伝的な物語だった。

ただ、海外の古典と言われる文学で、心から面白いと感じたものはほとんど出会ってなかった。その結果、古典文学なんてカッコつけるために無理して読むものなのだろう、と思うようになっていたので、『人間の絆』が上・中・下巻の三冊あると知った時には気が重くなった。

それでもタイトルと「英文学の傑作」という触れ込みに惹かれて『人間の絆』を読みはじめると、最初の百ページを過ぎた頃には、『竜馬がゆく』や『深夜特急』をはじめて読んだ時のように物語に没頭して、一気に読み終えた。

『人間の絆』は生まれつき足に障害を持った主人公フィリップが成長していく過程を描いた物語だ。

フィリップはいくつもの苦難を経て、物語の終盤で「ペルシャ絨毯の哲学」とも呼ばれる確信を抱く。それは、人生は不条理で無意味だが、だからこそ「人生を自分だけの芸術作品」と考えて生きるべきだ、というものだった。

「今後は、いかなる苛酷な試練に遭遇しようとも、すべては複雑な模様の完成に寄与するだけなのだ。人生の終わりに近づいたときに、模様の完成に満足するのみだ。一生は一個の芸術作品となり、その存在を知るのは自分のみで、しかも死と共に消滅するからといって、作品の美しさが減ずるわけではない。」（『人間の絆』下巻 P245）

僕は人生とは死ぬ瞬間に幸せを感じるための手段なのだと思っていた。でも「人生を自分だけの芸術作品」と捉えると、人生最後の一瞬にとりたてて意味があるわけではなくなった。むしろ、今の積み重ねこそが人生なのであり、だとすれば、死ぬ瞬間も、いま僕が生きているこの一瞬も、同じくらい価値のあるものだと思うようになった。

「死」とは、人の一生の終わり間際に訪れるものであって、大切なのは一瞬一瞬をいかに生きるかということだ。そのことをモームは僕に教えてくれた。すこしずつ、僕の生きるべき道が近づいている手応えはあった。だが、具体的にはまだ分からなかった。

この頃、僕はもう大学3年の終わりを迎えていた。周りは就職活動をはじめていたが、大学に行かずロクに単位も取れていなかった僕が卒業するのはまだ先になりそうだった。

周りには平気な顔をしていたものの、卒業できたとしても普通に就職するつもりもなかったから、心の内ではどうやって生きていくべきかに悩み続けていた。

5冊目 「危険な方」へ踏み出す

悩みながらも「こう生きたい」というイメージはあった。

「熱い人と交わりたい」という思いで大学に入学してから、僕は他者との「対話」を意識的に行なってきた。カフェで、飲み屋で、あるいは互いの自宅で。

そうした場所で相手の心の声に耳を澄ませてみると、悩みなんて何一つないように見える人でも、笑いあり涙ありの人生の物語があることを知った。

それは一篇の小説を読むようなものだった。相手の物語を聞かせてもらった上で、それに応じて僕のストーリーを返すという「対話」は、この上なく楽しい時間だった。

そのような「対話」を、文章を通じて多くの人と行える小説家という生き方に、僕は憧れを持っていた。

最初は漠然とした思いに過ぎなかったが、『人間の絆』のような小説と出会ううちに気持ちは強くなっていった。自分もそうした書き手の一人として、何かを伝えて生きていきたいと思うようになった。

とはいえ、小説家になるという夢は二十歳を過ぎた男が目指す職業としては現実味を欠いていた。大学の同級生たちが就職活動をしている中で、それを口にするだけの勇気もなかった。

『自分の中に毒を持って』を友人に紹介されたのはその頃だ。

戦後日本の著名な芸術家であり、大阪万博の「太陽の塔」の作者であることは知っていたが、それまでの僕は前衛的な芸術家に興味はなかった。本の表紙に大きく写っている岡本太郎の顔に違和感を覚えたまま読みはじめた。

だが、読んで一ページ目から引きこまれてしまった。岡本太郎の言葉は、自分が本当にやりたいことに踏み切れずにいた僕の心を激しく揺さぶった。

「危険だ、という道は必ず、自分の行きたい道なのだ。ほんとうはそっちに進みたいんだ。危険だから生きる意味があるんだ。」

岡本太郎は、自分の直感を信じて道を歩み、芸術作品を創造していた。そのせいで一見すると奇抜に見えるものが生まれたが、だからこそ多くの人々の心を打つことができた。

その生き様に、僕は打ちのめされた。

小説家という夢があるなら挑戦すべきだ。岡本太郎にそう言われた気がした。危険な道だけれども、そこに本気になるからこそ道が開かれるのだ、と。

『自分の中に毒を持って』を讀んでから、僕は「小説家になる」と公言するようになった。その道に進むと覚悟を決めて、後に引けないようにしたのだ。それは、受験生の時に「大学に合格する」とインターネットに書き付けた心境と似ていただろう。

だが、周囲にそのような大言壮語を吐く一方で、自分が書いた「小説らしきもの」に納得できることは一度もなかった。僕が憧れた偉大な小説家たちの作品に比べると、自分の文章は上滑りしていて、中身が何もないように思えたのだ。

いま振り返ればその理由も分かる。

当時の僕は、自分が本当に書きたいことを持っていなかった。「どう書くか」という形ばかりにこだわり、「なぜ、何を書くのか」ということと向き合っていなかった。

でも、そのことに気づいたのはずっと後になってからだった。

だから僕は前に進もうと試みては、そのたびに打ちのめされていた。自分の中に切実な想いがなければまっとうな小説など書けるはずがないのに、岡本太郎の言葉を支えにして、ひたすらにもがいていた。

6冊目 「ストーリー」を紡ぐ

そのような時期に『ほぼ日刊イトイ新聞の本』と近所の古本屋で出会った。

「ほぼ日刊イトイ新聞」、通称「ほぼ日」について知っていたのは、それが糸井重里の主宰するウェブサイトであることと、糸井重里がジブリ作品のキャッチコピーを作っている有名なコピーライターであることくらいだった。

ただ、何かを検索している時に「ほぼ日」のページが引っかかることがあり、「ほぼ日」から生まれた手帳を使っている友人もいた。それでなんとなく気になって、染みのついた本を手に取り、特にさしたる理由もなく買って帰った。

それまでは変わったタイトルとデザインのウェブサイトだなという以外の印象はなかった。「ほぼ日」だったが、この本を読み終えてそれが一変した。

「新聞」と名のつく通り、このウェブサイトは「毎日」更新される。でも、いわゆる既製の大手新聞とはまったく違っていた。

普通のメディアがいわゆる「情報」を扱うものだとなれば、「ほぼ日」は人の「想い」や「ストーリー」が中心的なコンテンツだと感じた。それを生まれたてのインターネットを活かして多くの人に届けていて、そのすべては主催者である糸井重里の「想い」から始まっている。

「ほぼ日」のウェブサイトは、一見するとごちゃごちゃと関係のないコンテンツが並べられただけに見える。

でも、よく読むとそこには多くの人の想いが込められているのが分かる。それは日々生成される物語が、寄り集まっている場所であるように思えた。

しかも、その雰囲気がギスギスしていなくて、とても楽しそうなのだ。「ほぼ日」とは直接関係のない僕でも、それを読んでいるだけでちょっと幸せな気分になれた。

小説とは「ストーリー」を通じて「想い」を表現するものだ、そう考えていた当時の僕にとって「ほぼ日」の存在は衝撃だった。その「ほぼ日」を、僕は「想いのメディア」と呼ぶことにした。

インターネットの時代において「想いのメディア」は新聞やテレビの代わりになる存在なのではないか。だとすれば新聞に全国紙があるように、「ほぼ日」の地方紙版が生まれてもいいはずだろう。

そう考えて、糸井重里がその力を活かして大きくやっていることを、自分の背丈に合わせてやってみようと思いついた。

「想い」や「ストーリー」は目に見えないだけで、僕が在籍する大学の中だけでも日々無数に生まれている。たとえば教室に、たとえばベンチに、あるいは行き交う学生の心の中に。

それを一つひとつ紡いで、誰もがインターネットで読めるようにすれば、この大学に通う人がもう少し楽しくなるのではないかと考えたのだ。

「大学生活が楽しくない」という悩みを抱えている人と数多く出会っていた。僕は大学にほとんど通っていなかったけれど、自分なりのやり方で充実した日々を送ってはいた。

大学生活の過ごし方が分からず鬱々としている友人の姿が、高校時代の自分と重なった。僕ならそうした問題を解決できるのではないかという思いが、「想いのメディア」をつくることに熱中させた。

数十ページにわたる企画書を徹夜で作った。この企画が好きそうな友人を説得して仲間に加わってもらった。仲間たちとどんなものを創るのかを何度も話し合った。インタビュー用の機材も数万円出して買い、実際に何本かの記事を書いてみた。

だが、計画は壮大な一方で、それを実現するための僕の力はあまりに非力だった。その結果、物事はうまく進まずに、声をかけたメンバーの熱も冷めていった。

夏に思いついてから数ヶ月、大学4年の暮れになる頃には、もうこれ以上は前に進めないことが明らかになっていた。そして、この企画を中断することを決めた。

それまでの数カ月の間、小説を書けない苦しさと、それゆえに生まれる未来への不安を「想いのメディア」づくりにぶつけていた。その企画が頓挫した時、精も根も尽き果てたように感じた。僕に、小説に挑戦し続ける気力は残っていなかった。

それまで自分が描いていた未来が急に馬鹿らしく見えるようになった。小説家も、想いのメディアも、どうせ叶わぬ夢なのだろう。そんな想いが渦巻いていた。

挫折の時期だった。僕は仲間にも連絡を取らなくなり、自宅から出ることが減った。

そんな僕を心配してくれる友人もいた。だが、傷を癒すためには時間がかかる。ひとつの挫折に区切りをつけるための「リセット」が、僕には必要だった。

それからもしばらく何も手につかない日が続いた。そのようにして年が明けて、大学4年も残りわずかになった。

7冊目 「道」を切り拓く

小説家になるという夢も、打ち込んでいた想いのメディアも失い現実に引き戻された時、何はともあれ自分が食べていくための仕事が必要だということに気がついた。大学にはほとんど行っていなかったから既にその頃には留年が確定していた。

奨学金とアルバイトと仕送りで生活していたが、「リセット」した時にアルバイトは辞めていて、留年をしての大学5年目からは奨学金も仕送りもなくなることになっていた。

だから「生活の糧」を得るために仕事をしようと思ったが、アルバイトは大学を通じていくつも経験していたので、違う働き方をしようと思った。

時間の切り売りではない仕事がしたかった。誰かの役に立てて、かつ自分だからこそできる働き方はないだろうか。そう考えているうちに、他の人が持っていない僕が持っているものがあることに気がついた。それは大学受験の勉強法だった。

受験期に自分が培った学習法は、当時、インターネットのどこにもなかった。それが僕の記憶から消え去る前にと、生活の落ち着いた大学1年の夏休みに「2ちゃんねる」に書き込んだ。「早稲田への道」と題した一連の文章は、少なからぬ受験生に読まれていた。

大学4年生の時は妹の受験と重なっていたので、最新の情報を集めて妹にアドバイスをしながら、久しぶりに「早稲田への道」に書き込んでいた。

自分の経験や妹への指導から、正しい勉強法を身につければ、塾や予備校に通わずとも、自力で、短期間のうちに成績を伸ばせると考えていた。ネットで質問をくれた受験生に対してメールや電話でアドバイスをすると、それが良い結果につながり、自分の勉強法に対する自信を深めていった。

また、大学進学を目指した塾や予備校は無数にあるが、一般の進学塾では解決できない悩みを抱えた受験生が僕のアドバイスを求めていることに気がついた。昔の僕のように落ちこぼれたり、学校からドロップアウトした人には、他に行き場所がなく、僕のところに集まってくるように感じていた。

勉強法を知ることで「どうせ自分はできない」というネガティブな思いを払拭することができる。努力が実る実感を得ることで、失っていた自信を取り戻し、未来に対して挑戦できるようになる。だから、どんなに落ちこぼれても、人生を変える道はある。

そのことを勉強法を通して伝えることで、昔の僕のように道を踏み外しかけている若者の人生が変わるきっかけを作れるのではないだろうか。

そう思い至った時、僕は「勉強法」を指導する塾を立ち上げようと決めた。

塾生の偏差値を上げることに自信はあったが、ただそれだけの塾にしたいはなかった。

良い大学に入ったからといって幸せが約束されるわけではない。それ以上の「何か」を伝えられる塾にしなければ意味がない。

そう考えてピンと来たのが、日本の伝統的な教育機関である「私塾」だった。

インターネットで調べてみると、いまでも続いている最大の私塾は慶應義塾だった。その創立者である福沢諭吉の本は、有名な『学問のすすめ』をはじめ、政治を学んでいた頃にいくつか読んでいた。

感動した覚えもないまま内容はほとんど忘れていたのだけれど、本棚からその中の一冊である『福翁自伝』を取り出して読んでみると、以前とはまるで違う印象を受けた。

中でも心に残ったのは、若き日の福沢諭吉が「適塾」という大坂にあった私塾で学んでいた頃のエピソードだ。

「時は何時でも構わぬ、殆ど昼夜の区別はない、日が暮れたからといって寝ようとも思わず、頻りに書を読んでいる。読書にくたびれ眠くなって来れば、机の上に突っ臥して眠るか、あるいは床の間の床側を枕にして眠るか、ついで本当に蒲団を敷いて夜具を掛けて枕をして寝るなどということは、ただの一度もしたことがない」

現在は一万円札の肖像画にもなり、近代日本の礎を築いたとさえ言える福沢諭吉自身も、私塾で激しく学んだ一人の塾生だったことを知った。しかも、それは福澤諭吉だけではなかった。

「その時に始めて自分で気が付いて『成程枕はない筈だ、これまで枕をして寝たことがなかったから』と始めて気が付きました。これでも大抵趣が分りませう。これは私一人が別段に勉強生でも何でも無い、同窓生は大抵皆そんなもので、凡そ勉強ということに就ては実に此上に為やうはないと云ふ程に勉強して居ました」

「適塾」をさらにネットで調べると『洪庵のたいまつ』という文章にたどりついた。

『洪庵のたいまつ』は、『竜馬がゆく』の作者である司馬遼太郎が小学校の教科書に載せるために書いた10ページ分ほどの短い文章だ。その中で司馬遼太郎は適塾の日本における意味合いをこう語っていた。

「日本のきんだいが大きなげき場とすれば、明治はそのはなやかなまく開けだった。その前の江戸末期は、はいゆうたちのけいこの期間だったといえる。適塾は、日本の近代のためのけいこ場の一つになったのである。」

緒方洪庵や福沢諭吉は、自ら塾を立ち上げ、塾生を育てることに力を尽くした。高校を辞めた後に読んだ『竜馬がゆく』に影響を受けて大学を志した頃のことを思い出した。そういえば、竜馬もまた江戸末期の私塾で学んだ若者だった。

時代を変える若者を育てる場である私塾。一人ひとりが自分の「道」を切り拓き、世をよくするために命がけで学ぶ塾にしたい。そんな塾でありたいという想いを込めて、立ち上げる塾の名前を「適塾」に似た「道塾」にした。

2007年3月31日、新宿区役所に個人事業の届出を出しに行った後、自分のパソコンからウェブ上に道塾をオープンした。そこに載せた「開塾にあたって」という文章の中で、僕の道塾に込める想いをこう書いた。

「今と昔では、塾という言葉の意味が違う。今は受験テクニックを教える場所が塾といわれる。でも、昔の塾は、もっと素敵な場所で、人生を切り拓き、世をよくするために、命がけで学ぶ場所だった。閉塞感が漂い、もはや落ちるだけに思える日本でも、21世紀の世界を担う人間の1人として俺は役立ちたい。そして、そんな想いと志とをもった塾生が、巣立ってほしいと願う。」

8冊目 「ウェブの可能性」を知る

道塾を立ち上げるにあたっては「志」がある一方で、「生きる糧」としての収入を得るためでもあった。どんなに高い志を抱いていても、その想いを形にしたものが世の中に受け入れられなければ、事業としては失敗だ。

考えた末に、塾の学費は月1万円の月謝制にした。

年間百万近くかかる大手の塾や予備校よりも成果を出す自信はあったから、もっと月謝を高くするという選択肢もあった。

だが「早稲田への道」を通じて参考書代にも事欠く受験生がいることを知っていたし、より多くの人に人生を変える道があることを伝えたかった。

1万円の月払いなら金に困っている高校生でも稼ぎながら続けられるし、1万円分の価値がないと判断すればすぐに辞められる。フェアなシステムにすることで道塾が世に受け入れられるか明確に分かるとも思った。

ウェブサイトから指導システムまで、開塾日に決めていた3月31日までに自力ですべて準備した。だが十分な塾生が入ってこなければ「生きる糧」としての収入はアルバイトで稼がなければならない。

相談した友人からは「ネットで勉強法を教わることに金を払う奴なんていない」と言われることが多かった。その時点で、僕の生活はカツカツだった。光熱費込みで2万5千円のシェアハウスに住んでいたが、それさえ支払うことが危うい状況だった。

受験生が道塾を知る唯一のルートは2ちゃんねる上の「早稲田への道」だけだった。だが、セコい宣伝はしたくなかったので、そこには「事業として塾を立ち上げた以上、ここには基本的に二度と戻ってこない」と書いていた。

できることは僕の言葉が届くことを信じて祈り、入塾を申し込んでくれる受験生が現れるのを待つだけだった。

ウェブサイトを公開した夜、もし入塾の申し込みがなければ、明日にはアルバイトを探しに行こうと思いながら眠りについた。

翌朝、パソコンからメールボックスを開くと、入塾申込のメールが表示されていた。本当に塾生が来たんだ、と思ったときは嬉しさよりも驚きの方が大きかった。それも一通ではなく、複数のメールが表示されていた。

おかげで家賃を払い、食いつなげるようになった。結局、それから1年の間に、30名近い塾生が入塾してくれた。

塾生は北海道から九州まで日本全国に散らばっていた。その中の一人、鹿児島県に住んでいた高校中退の塾生が、指導中に「梅田望夫という人の書いたベストセラー『ウェブ進化論』が面白い」と教えてくれた。

「馬場さんなら知ってると思ったんですけど」と彼は言ったが、僕にとってインターネットは身近すぎて興味の対象ではなかった。

すぐに買い求めた『ウェブ進化論』は、彼の言う通り、僕が読むべき本だった。

インターネットが大きな変化だということは感じていたが、この本を通じてそれが僕のような個人にどのように影響をあたえるのかを知った。

とりわけ、インターネットは「個人」として生きる人間にとって大きな「力」となるという考え方が胸に響いた。言われてみれば、道塾もインターネットがなければ生まれることのなかった事業だった。

インターネットで呼びかけるだけで30人近い塾生が集まり、僕が食べていけるだけの仕事へと結びつくのは、ウェブのある現代だからこそ起きた奇跡であることに、あらためて気がついた。

そう思っていた矢先に、ウェブ進化論の続編である『ウェブ時代をゆく』が出ると著者のブログを通して知り、発売されるとすぐに買い求めた。

『ウェブ時代をゆく』は、はじめから終わりまでずっと、僕の生き方を全面的に肯定してくれているように感じた。高校にも違和感を覚え、小説家を諦め、そして道塾を立ち上げて生きている自分の人生の在り方が、この時はじめて間違っていないんだと思うことができた。

「旧来からの社会の仕組みに順応でき、ルールががっちりした『古い職業』や『大きな組織』でも無理なくやっつけていける人たちは、いつの時代でも生きやすい。しかし、『時代の大きな変わり目』に生まれる『志向性の共同体』や『小さな組織』や『新しい職業』の増加は、日本社会のシステムにうまく合わずに苦しんでいる人たちにも、サバイバルの可能性を広げるものだ。ネットは個をエンパワーする。『もうひとつの地球』はこれからますます大きくなる。世界の難題の解決という難しい挑戦から、日々の仕事や知的生活の充実、趣味や楽しみの意外な発展にいたるまで、サバイバルした先にあるさまざまな未来の可能性をイメージしてみてほしい。そしてそれによって、一人でも多くの人の心の中にいまを生きるエネルギーが湧いてくれればと願うのだ。」

道塾を立ち上げてからも不安を抱えたまま生きていた僕は、こうしたオプティミズムに貫かれた文章を涙ながらに読んだ。そして、きっとこれからも数多く生まれる「日本社会のシステムにうまく合わずに苦しんでいる人たち」に対して、僕なりにできることをしていこうと心に決めた。

9冊目 「天職」を見つける

道塾での指導には自信があったし、塾生の成長も概ね考えていた通りだった。だが、このまま道塾を続けていくべきかどうかには悩んだ。小説家という夢は諦めたものの、思いがけない形で巡りあった「教育」という仕事に自分の人生を賭けるべきか決めかねていた。

道塾は順調な立ち上がりだったが、それまで起業したいなどと思ったことはなかったし、あくまで「生活の糧」を得るための一時的な仕事として始めたつもりだった。インターネットの可能性を知ったことで、他の生き方も可能なのではないかと考えていた。

そんな時に何気なく訪れた書店で、ジョン・ウッド『マイクロソフトでは出会えなかった天職』を手を取った。タイトルにある「天職」という言葉が目にとまった。

ジョン・ウッドはネパールを旅する途中で本のない学校を見つける。それをきっかけにマイクロソフトという大企業での地位を捨て、ネパールの学校へ本を寄贈するNPO「ルーム・トゥ・リード」を立ち上げる。

その後、自身の「想い」と「マイクロソフトで鍛えたビジネススキル」を駆使して事業を拡大し、1999年12月から8年足らずの間に140万冊の児童書、数百の学校や図書館、そして2000人を超える女子児童への長期奨学金を世界中に提供するまでに成長していた。

誰もが「不可能だ」と言ったことを成し遂げたジョン・ウッドの生き様に激しく共感した。僕も大学受験や起業をする際に、似たようなことを何度も言われてきたからだ。

ただ、発展途上国の子どもたちに本を送ることの素晴らしさは、頭では理解できても、ずっと日本で育ってきた僕にはあまり実感が持てなかった。

一方で、この国には昔の僕のように未来がないと感じている若者が多く存在していて、その問題は放置されているとも感じていた。

発展途上国と比べれば、日本は義務教育も図書館も十分過ぎるくらいに整っている。非常に豊かになったこの国に生まれることは恵まれているのかもしれない。

でも、この国で自分の可能性に気づかないまま未来を諦める若者は無数にいる。その姿が僕の目には、発展途上国に生まれて本を読めないまま育つ子どもと重なって見えた。

「わかっているくせに。きみがいなくてもマイクロソフトが困るのはせいぜい一ヶ月か二ヶ月のこと。すぐにだれかが穴を埋める。きみなど最初からいなかったみたいだね。でも、貧しい村に学校や図書館を建てる手助けをしようと思う人が、何千人もいると思うか？ この仕事はだれもやってない。きみが挑戦しなくてどうする」

道塾は「ルーム・トゥ・リード」に比べれば遥かに小さく、僕自身に大した能力もなかった。

ただ「想い」だけなら負けない自信があった。そしてジョン・ウッドにマーケティングのスキルがあったように、僕には勉強法や学習への意欲を湧かせる力があつた。

なによりインターネットを使った教育という方法は、ジョン・ウッドにもできない僕ならではの職業なのではないかと思った。

そうして道塾は、そして教育という仕事は、僕にとって「天職」なのではないかと思うようになった。

10冊目 「希望の国の創世記」を書く

最初はシェアハウスの一室ではじめた道塾だが、立ち上げて二年目にはオフィスを借りた。小さいながらも専用の指導スペースができたのは、事業としては大きな前進だった。

同時に、大学の友人やその年に合格した教え子に声をかけて仲間になってもらった。

ロコミやネットの検索を通じて少しずつ広まるとともに、興味を持った新聞記者の方が取り上げてくれたこともあって、二年目の塾生は70名近くにまで増えた。

その頃、僕の頭を巡っていたのは「希望」という言葉だった。

指導している中で、未来に対してあまりに悲観的な若者に出会った。未来への希望を持っていない若者は志望校へ向けて努力することが難しかった。

歯を食いしばって努力する子でも、例外なく苦しそうにしていた。希望がなければ生きていくことは難しい、と僕は考えるようになった。

『ウェブ時代をゆく』を読んで以来、インターネットに割く時間が以前よりも増えていた。登録した数百のウェブサイトを高速で巡回するようになり、一日に浴びる情報量は飛躍的に高まっていた。

そのような時期、ある時期のあるネットコミュニティにおいて、「希望」を論じることがブームのようになった。強い興味を抱いてその議論を追う中で、議論の中で頻繁に取り上げられる『希望の国のエクソダス』という小説に強く惹かれた。

作者の村上龍の小説は高校を辞めた頃からよく読んでいたのだが、この一冊は手を付けていなかった。本書の中で扱われている不登校やインターネットというテーマが、問題の渦中にいた僕にとって重すぎて、無意識的に目を逸らしていたのかもしれない。

この本が書かれた当時、僕はまだ13歳で、物語の中心となる少年たちが通っている学校に似た、横浜にある私立中学に通っていた。物語に登場するのは、僕がよく使っていた駅だった。

彼らは14歳になる年に日本から脱出する計画の最初の一步を踏み出す。

一方、僕は14歳になる年に通っていた私立中学を中退し、逃げるように母の実家へと引っ越した。そうした中で、言葉にできない幾つもの葛藤をやり過ごしていた。

その時から10年以上経って本書を読んだ時、中心人物である少年の語るこのセリフは、僕の胸の奥深くに響いた。

「学校を拒否して、いろいろやったけど、それほど楽しいっていうわけではなかった、というのが私たちの正直な気持ちです。学校がなくなって、勉強しなくていいという状況になって、好きなだけゲームやカラオケができればどんなにいいだろうと思っていたんですが、一週間経って、かなり退屈したというのが、私たちの本音です」

それから少年は「学校を変えましょう」と言い、自分たちでインターネットビジネスを起こして急成長する。それから物語は進み、彼は国会に招かれ、後に現実のインターネット上でも頻繁に引用されることになる有名なセリフを語る。

「この国には何でもある。本当にいろいろなものがあります。だが、希望だけがない」少年たちは「希望がないということだけが明確な国の内部で、希望が人間になくてはならないものかどうかを考えるのは無理だ」と言って、日本を脱出（エクソダス）して国家から独立した自分たちのコミュニティを作ろうとする。

中学二年生がこうした革命にも似た行動を起こすことは、現実的にはありえない。でも小説はフィクションであり未来予測とは違う。

小説家の役割がフィクションという「虚構」によって「真実」を伝えることだとすれば、大切なのはその物語がどれだけのリアリティとエネルギーを持つか、だ。

少年たちの置かれた状況は、僕の境遇と似過ぎているように思えた。フィクションだとわかっていても、それに運命的なものを感じずにはいられなかった。

それにこの国は、確かに小説の中で語られているのと変わらないくらい希望を失っているようにも思えた。

ただ、小説とは明確に違うことが二つあった。

ひとつは、僕はもう中学生の子どもではないということ。25歳の塾長であり、起業家だった。

もうひとつは、僕の心の内側には希望があるということだった。

日本に希望がないなら、自分で作ればいい。そう思って一歩踏み出す決心をした。

それまでは個人事業という形にしていた道塾を、法人として新たに登記して、これに人生を賭けることに決めた。それに共感し、一緒に賭けてくれる仲間もいた。

2009年3月2日、道塾は「合同会社道塾」という法人になった。

その翌日、僕は自分のブログにこう書いた。

「わずかでも、希望は今ここにある。だから、この国から脱出する話はもう要らない。これからは希望の国を創造する記録をつけていこう。そのひとつが、このblogであればいいと思う。希望がないように思えた国に、希望を創造していく軌跡を綴っていこう。そ

う、今書かれるべきは、『希望の国の創世記』。やがてその記録は、だれかの胸に希望の光を灯すだろう。だから、僕は歩き続ける。幸いにも見つけることのできた、自分の進むべき道を。」（希望なき国に生まれて）

その後

指導には自信があった。時代の変化の波に乗ってもいた。そして僕はまだ25歳と若く、人並み以上の野心もあった。日本に数多ある教育ベンチャーを見渡しても、自分たちより可能性のある会社はないという自負もあった。

この国の教育をよくするために、自分にはできることがある。それが与えられた使命なのだろう。そして、どんなに志が高くても、現実を変えられなければ意味が無い。そのような考えを抱いた僕は、迷うことなく塾の拡大を目指した。現実を変えるためには、力を持つことが一番だと信じて。

数ヶ月後、「エチカの鏡」というテレビ番組に取り上げられたのをきっかけに塾の規模は急速に拡大していった。新聞や雑誌にも日常的に取り上げられるようになり、日に日に仲間や指導にあたる大学生は増えていった。オフィスもそれにあわせて拡張していった。

好調の波に乗っている時が一番危ないのだと理解するのは、それから数年先のこと。すべての冒険物語にもつきものの「壁」にぶち当たることになるのだけれど、それはまた別の話。

成功譚が好きな人は多い。もちろん僕もその一人だ。失敗談よりも成功譚の方が聞いていてわくわくする。でも、思うのだけれど、波に乗った人の話はたいてい似ているのではないだろうか。様々なビジネスのサクセス・ストーリーを僕が読む限りにおいて、基本的な話の構造は変わらないように思える。

だから、大切なのは、そこに行くまでの過程なのだと思う。土の中にどのような種を植えるかによって、どのような花が咲き、どのような実をつけるのかがほとんど決まるように、サクセスしている間よりも、その前の部分にこそ光をあてるべき事があると思う。

でも、そうしたことは今の僕が語れることではない。成功の波が崩れた時に僕が得た教訓については、いつか語ることのできる日が来るだろう。

さて。

あらためて僕がこの塾の仕事を立ち上げ、のめり込むに辿った道のりを眺め返せば、よくもまあこれだけいろんな本を選んだものだという気持ちになる。でも、これらの本のどれか一冊が欠けていても、おそらく僕はこの道を選ばなかった。

本を読んでよかったと思うのは「世界は広い」と実感できたことだ。世の中にはまだまだ僕の知らない世界があって、それはいま自分が置かれている環境よりも、圧倒的に面白そうだと感じた。

でも、現実には自分はその世界にはいない。そのような未だ見ぬ世界への「憧れ」のような気持ちが僕を突き動かしてきた。それがなければ、たとえば受験をしようという覚悟も、塾を開こうというエネルギーも、生まれようがなかった。

自分はいろいろなことが分かっている、と思いがやすい。その方が安心できる。でも、それは自分を守るための鎧でしかない。自分が無知であるということを受け入れるのは勇気がある。でも、それを自覚するところからしか学ぶことははじまらない。

「自分はすべてを知っている」と考えて、外側の世界に好奇心を持たないまま一生を終えるのは嫌だった。インターネットにのめり込み、高校を中退したまま家に閉じこもっていた頃が分岐点だった。その時以来、僕は自分の直感を信じて、外部の世界を歩きまわること、いま述べてきたような冒険を重ねてきた。そして、その分だけ世界は広がった。

これらの本と出会い、それに突き動かされて現実と格闘することで、一冊ずつ自分の血肉と化してきた。だからこそ、とりたてて学校で何かを学んだわけでもない僕がここまで歩んでくることができた。大きな成功を成し遂げたわけじゃない。それでも、十年前の僕からすれば想像することもできなかった味わい深い日々を過ごせた。

それには運もあったと思う。でも、運だけに頼っていたら遠からず限界がやってくる。だから僕は受験勉強の時のように戦略的になり、学び方に工夫を凝らしてきた。

すべての学習法がそうであるように、そこに魔法のようなものは存在しない。ごく当たり前のことをコツコツとやるだけだ。でも、それが意外と難しい。実際、僕はそうした試行錯誤をかれこれ10年以上続けているが、まだこれで完璧だという状況には達していない。思うに、自分の成長に合わせて学び方も変わっていくのだろう。そう考えると、究極の学習法だというのは存在せず、状況にあわせて変化し続けるというのが正しいのかもしれない。

でも、たとえば受験勉強においても基本的な学習方法があるように、本の読み方というのも基本的な方法があるのだと思う。それも、インターネットが発達した二十一世紀だから

らこそその方法が。ただ、多くの若者を見ていると、そのような基礎的な方法すら意識していないせいで、本を読むことで得られるものをずいぶん取り逃がしているように思える。

だから、次章では、そうした僕なりの学習法のエッセンスを語ってみたい。それに進む前に念押ししたいのは、これから僕が語る「方法」、いわゆる「ハウツー」を読む時に大事なものは、「なるほど」と満足して終わらせないこと。

受験勉強において勉強法マニアのような受験生がいるが、それで自分が勉強した気になって、実際には何も上達していないというケースがとても多い。

ハウツーは実践しなければ何の役にも立たない。ハウツーはどこかに共通点があるから、実践していればどこかで必要なくなる。にもかかわらず町の本屋がハウツー本で溢れかえっているのは、本を読んでも学べていない人の多い証だろう。

読んでも実践しないのであれば、その時間は無駄だったことになる。できることなら、この本はそのように読んでほしくない。せっかく時間をかけて読んでいるのだから、身につけるべきものを見につけ、得るものを得て、再びリアル・ワールドへと帰ってほしい。

二章 ウェブ時代の読書術

「読書遍歴」と「座右の書」

僕が読書を通じて「いいな」と思った人は決まって膨大な量の読書をしていた。そして、必ずといっていいほどその人の核となる「座右の書」を持っていた。

でも、そうした人でも具体的な本の読み方について述べているわけではなかった。本を読むのが幼い頃からの習慣になっていたのかもしれないが、そうではない僕にとっては、受験勉強と同じく自分なりに読書術を身に付けるしかなかった。

僕が求めていたのは情報を集めたりスキルを磨くための読書術ではない。あえて言葉にするならば、自分の人生という固有な物語を立ち上げるための読書術だ。

情報を集めたりスキルを磨いたりする読書ならゲームのような感覚で裁くことができる。そうした読書術は本屋にたくさん並んでいる。それらにひと通り目を通して見たこともあるが、僕が求めていたような読書術とは違っていた。

だから僕は遠回りをしながらも、多くの先人の知恵や読書法を参考にしながら、そして読書法を大きく変化させたウェブ進化も取り入れながら、自分なりの読書法を身につけることになった。

前章で取り上げた十冊の本は、そのような試行錯誤を重ねる中で辿った僕の「読書遍歴」の一部であり、その時々に出会った「座右の書」だ。

ところで、どんな本を読んできたのかについて話をすると、真面目であればあるほどそのすべての本に順番に目を通そうとするタイプの人がいる。でも「読書遍歴」として他人がたどったルートを実似する必要はまったくない。もし僕の挙げた10冊を見てそのような考えが浮かんでいたら、やや危うい傾向にあると自覚したほうがいい。

この読書遍歴のルートは僕だけのものだ。一人ひとり歩むべき道は異なるのだから、同じルートをたどろうとする必要はまったくない。

大切なのは、今の自分がどんな情報を必要としていて、そのためにはどの本を選べばいいのか、それを問い続け、他者の意見を参考にしながらも、自分の直感を信じて選択すること。

なぜなら、その直感こそが自分というオリジナリティを形作っていくのだから。

自分が何にピンとくるかということに自覚的になろう。アンテナの感度をいつも全開にして、ピンとくるものと出会ったら逃さず深く掘ろう。そうすれば自然と自分だけの「読書遍歴」は築かれる。そして、その中からはいくつもの「座右の書」が生まれるはずだ。

「座右」という言葉の通り、先に挙げた十冊はいつでも自分の手の届く場所に置いておく時期があった。そのような本をしばらく経ってから読み返すと、その度に、過去には気づかなかった発見がある。

そのような書を携えて生きるのは、荒涼とした世界において進むべき道を指し示すコンパスを手にするようなものだ。必要とあらば未知のエリアの地図となる別の本を読めばいい。そうすれば、道を歩いている時に途中で迷うことがあっても、コンパスを頼りに、地図を埋めながら前に進んでいくことができる。

同じ景色でも、それがあつたのをないのとでは世界の見え方がまるで違ってくる。実際、だからこそ僕はここまで歩んでくることができたと思う。それが「自分という固有な物語を立ち上げるための読書」であり、「座右の書」を見つけるべき理由なのだ。

「座右の書」を探しに出る前に

ただし、座右の書を見つけるような読書をするためには、漫然と読んでいるだけでは難しい。ピンとくる本を見つけ、それを一冊ずつ血肉化しながら、より自分にピンとくる本を見つけるといったサイクルを回し続けることで、ようやく座右の書に出会える。

だが、多くの人がこの「血肉化する技術」を意識しないまま本を読んでいる。それは勉強法を意識しないで漫然と行なっている勉強と同じで、そうしたやり方では読書をしてほんの少しものもしか身につかない。そして身につかなければ、やがて楽しいと思えなくなってしまう。勉強と同じだ。

「とにかく本を読め」と勧めるのは、「とにかく勉強しろ」というのと同じで、結果としては悪影響を及ぼしかねない。それは何も持たずに「学びの荒野」へ冒険に行かせるようなものだからだ

そこで立ち上がれるタフな人はいいけれど、荒野で振り返りにあつて、読書が嫌になるようなことがあれば、取り返しのつかない事態になる。

だから最初は丸腰で行くのではなく、基本となる「カタ」を身につけるのがいいと思う。まだ自分なりの読書法を身に着けていない人が、一度それを活かした読書の楽しさを感じられれば、そのまま「学習の好循環」のサイクルに入ることができる。

その意味で「カタ」を身につけられるかどうかは、文字通り生死を分けるほど重要なことだと僕は思う。

ところで、武道の「カタ」には「守破離」と呼ばれるステップがある。

まずは最初に学んだカタを「守」り、次に身につけたカタを「破」り、最後にカタから「離」れることで、自分なりの方法や技術を手に入れるというものだ。

僕の読書法における「カタ」は大きく分ければ二つしかない。

ひとつは、これまで述べてきた「直感を磨く方法」。そしてもう一つは「血肉化する技術」だ。この二つの「カタ」は密接に絡み合っていて、どちらか一方だけだと偏った読書になってしまう。

だからそれが本章の主なテーマになるけれども、それについて述べる前に、僕がどのような試行錯誤を経てそこまでたどりついたのかを語ることにしよう。それを伝えることで、僕と同じ過ちをしなくて済むだろうから。

「気晴らし」から「宝探し」へ

読書法を意識したのは大学生になってからだった。

その頃、それまでは手に取らなかったような難しい内容の本に挑戦していた。でも、いま思えば背伸びするようにして読んでいたので、本を読んでも何かが得られたり、身についたりしている実感が持てなかった。どれだけ読んでも数週間もすると内容をすっかり忘れてしまっていた。

その本が難しければ難しいほど、読んだことに満足してしまい、内容はロクに覚えていなかった。読めば読むほど忘れる量も増えるという状況が続いて、次第に僕は「読書疲れ」のような状態に陥った。

僕が読書の方法を探し始めたのは、こうした状況を打開するためだった。その元になったのは、大学受験の経験だった。

勉強法を身につけ、主体的に学ぶスタイルを築いたことで僕は大学受験を乗り越えた。スタート時点での実力に多少の差があったとしても、「方法」を工夫すれば道は切り拓けると、受験の経験を通じて気がついてきた。

同じようなことが、読書法を工夫することで可能になると思ったのだ。

実際、受験と同じことが読書にも起きた。

読書法を意識してから自分の読書体験が豊かになっていくのを感じられた。ただ知識が増えるだけではなく、そこで学んだことが現実の生活とよりつながるようになった。

学びが加速している実感を得られたことで、読んだ内容が身につくだけでなく、読書がこれまでにない楽しいものと感じられるようになった。「楽しさ」が僕をさらなる読書へと駆り立てる原動力となった。

受験を通じて経験したのと同じ「学習の好循環」が起きていた。そうできたのは、僕が受験を通じて身につけた「独学」のスタイルが、読書という一人で学び続ける営みと似ていたからだと思う。

この時期から僕の読書観は変化していった。「趣味の読書」や「気晴らしのための読書」はありえなくなった。肩肘を張って、自分にあわない難しい本を読んで挫折するようなこともなくなった。

読書は真剣だけれど楽しくもあり、学びと成長を感じられるもの変わった。読書は「宝探し」へと向かう冒険のように感じられるようになったのだ。

「直感のアンテナ」を信じる

「宝探し」のように本を読むようになってから「読書用のペン」が欠かせなくなった。それまでの読書は読み進めることで精一杯だった。せっかくリーディング・ワールドの中で「宝物」のような一節と出会っても、読み終えた後になると、それは夢の記憶のようにあやふやだった。だから一冊を読み終えて現実世界に戻った時、手元に残るのはおぼろげな冒険の感覚だけ。

でも読んで気になった部分にペンで目印をつけておくと、読書中に見つけた「宝物」をリアル・ワールドに持ち帰ることができた。それによってリーディング・ワールドで得たものを現実の世界で活かすことができるようになった。

リーディング・ワールドの冒険における「宝物」は「自分がピンときた箇所」だ。それは「直感のアンテナ」に引っかかったということ。そのシグナルを見逃さずにキャッチして捕まえるためにペンを使うのだ。

ペンの役割は昆虫採集に行く時の「虫取りの網」に似ている。茂みの中に踏み入れて、きれいな蝶を見つけた時にさっと網をかぶせて捕まえるように、読書中にピンと来た箇所に片っ端から線を引きしていく。

そのようにして、読み進めながらピンときた箇所のすべてにペンで線を引く。そうやって一冊の本を読み終えると、新品のまっさらだった本は、ピンと来た箇所だけに印がついた本へと変わる。それは宝石のような蝶を集めて作った標本のようなものだ。

そうやって印をつけた箇所だけを拾い読みするのに、大した時間はかからない。その際、重複した言葉やいまいちピンと来なくなった箇所を取り除きながら、印をつける箇所をペンでさらに絞り込んでいく。

この「絞り込み」の過程で「自分にとって本当に大切な言葉」が自然と選択され、そうでないものは消えていく。こうした幾度かの読み返しに耐えて、最終的に残った言葉こそ、その一冊の中から得るべき「宝物」になる。

そうした言葉や文章には、ページの端を折ったり付箋をはったりして、忘れないように目印をつけておく。そうすれば読み返したいと思った時にすぐ見つけることができるし、その言葉を拾い読みするだけで本の内容を思い出すことができるからだ。

このようにして集めた言葉は、気持ちをワクワクさせる源であり、新しいアイデアの種になった。と同時に、進むべき道に悩んだ時のコンパスのような役目を果たし、蓄えておいた宝物のような言葉が次なる冒険の舞台へと導いてくれた。

インターネット＝光速で移動できる魔法

ピンと来て印をつけた言葉やアイデア、あるいは人名や出来事を Google のような検索サイトで調べる。そこにリストアップされた上位 10 個の項目の中から、めぼしいものをざっと拾い読みする。めぼしいものが表示されなければ、フレーズを追加して組み合わせ検索をして、よりピンと来るウェブサイトを探してみる。

これくらいのことは誰でもやったことがあると思う。でも、実は一昔前まではこれは決して当たり前のことではなかった。僕が大学に入ったのはほんの十年前のことだが、当時は Google のようなサーチエンジンの存在を知らない同級生の方が多かった。

インターネットは「リンク」という機能によって、その情報に関連したページへと一瞬で移動することができる。しかも「リンク」の方法や種類は、まさに日進月歩の勢いで進化している。

たとえば検索サイトは、その情報に関連したページを無限にも等しい情報の中から瞬時に表示する機能を作り出した。ウィキペディアを使えば、その著者に関する情報をひと通

り調べることもできる。アマゾンのようなネット書店は「その本を買った人はこの本も買っています」と教えてくれる。

当たり前すぎて忘れてしまいやすいが、インターネットのなかった頃には、これは人類の誰も手にすることのできなかつた読書の方法なのだ。

インターネット以前の読書においては、一冊の本はそれで完結した存在だった。ある本から次の本をその本から次の読むべき本を探すのは、通常、その著者の別の本を本屋で立ち読みしたり、図書館の本をあたって調べてみるという方法しかなかった。カンを頼りに購入してみても、思ったほど面白くないということが当たり前だった。

それは時間的にも金銭的にも大きなコストだった。だからインターネット以前は、読書をする上での障壁はいまとは比べ物にならないほど大きかった。

でも、インターネットの出現によってあらゆる「情報」がつながった。「情報」の塊である書籍も、当然そこに含まれている。

インターネットが画期的なのは「ある情報から次の情報への移動速度」が飛躍的に速くなったこと。情報と情報の間を、これまでの物理的な制約を超えて、文字通りの「光速」で移動できるようになった。

これまで、あるダンジョンから次のダンジョンに移動するためには「途中の街」や「意味のない草原」を歩きまわって、ヒントを探さなければならなかった。

それがインターネットが出現したことで、あるダンジョンから次のダンジョンへ、一瞬で移動できる魔法を手にしたようなものなのだ。

印をつけておいた「宝物」たるキーワードを手がかりにすれば、無限にも等しい情報から「光速」で「次の宝物がありそうな場所」を探ることができる。本屋や図書館に出向く必要もない。携帯があれば自宅でも電車の中でも片手でできる。

電車や自動車や飛行機の出現が、現実の世界を時間的にも空間的にも小さくした。その理由は人間の「身体の移動速度」が速くなったからだ。けれども、本と本の間を行き来するといった「情報の移動速度」はさほど変わらなかった。

でも、インターネットは「情報の移動速度」を光速にした。インターネットの中では情報の距離は限りなくゼロに縮まっている。それはインターネット以前の人々からしたら、本当に魔法のような技術だと思う。

その方法を身につけることができれば、過去の時代にはありえなかつたスピードで学び続けることができる。逆に、それを持たないと大きなハンディキャップを背負う時代と言わなければならないのかもしれない。

でも、別にそれは決して難しいことではない。その気になれば、誰だって身につけることができる。だから、そんなに悲観的になる必要はないと僕は思う。

インターネットの出現は、それまでの人類が誰もできなかった学び方を可能にした。しかも、こうした変化は、歳を取ってからネットに出会った大人よりも、ネットに囲まれて育った若者に圧倒的なアドバテージをもたらす。これを活かさない手はない。

そんなワクワク感を抱きながら、僕は「ピン」と来たものをヒントに自分が学ぶべき数多くの本と巡り合い、多くの宝物を手に入れてきた。

直感のアンテナを磨く

こうした「宝探し」のプロセスの根底で働き続けているのは、ピンと来るか否かという「自分の直感」だ。つまり、この方法で読書をする、自分の直感を信じて「宝物」や「自分にとって大切なこと」を自然と探し求めることになる。

そうやって「自分にとって大切なこと」を手がかりに、あたらしい「自分にとって大切なこと」を探していると、次第に「どこに大切なものがありそうなのか」という感覚も鋭くなってくる。

このようにして、僕は読書という冒険を通じて「宝物」を得ながら「直感のアンテナ」を磨き続けてきた。

アンテナの感度が高まれば、自分がピンとくることに反応しやすくなる。僕は「直感のアンテナ」を磨けば磨くほど、より素晴らしい「宝物」と出会えるようになったと感じている。

たとえば、本の選び方がうまくなった。ハズレを選ぶことは昔に比べればだいぶ減った。印の付け方も、最初の頃よりずっとうまくなった。経験を重ねるにつれて、世界は広がりながら、直感も研ぎ澄まされていった。

もちろん、直感なんて最初からアテになるものではないし、最初から自分の直感を信じられるわけもない。

たとえば「これはいい本だ」と誰かが言っていることがあるとする。だが、それは「その人にとってのいい本」であるということに過ぎなくて、自分にとって名著のかどうかとは直結しない。

それでも、最初はそういう言葉にも反応してしまうものだ。僕もそうだった。人の意見にピンと来るのも直感なんじゃないか？と思ったりもした。

でも、経験をつむことでその情報が「自分にとって大切か、そうでないのか」を、自然と判断できるようになった。

それが「直感を磨く」ということだ。自分がピンと来た箇所こそ、自分にとっての真実なのだ。そう思えるようになった頃には、自分の周りが「宝物」であふれているだろう。

だから大切なのはピンとくる感覚を大事にして、アンテナを磨き続けること。そして信じるに足る直感を作り上げることだ。

本を読んでもピンとくるものがないのなら、そもそも選び方が間違っている。自分のアンテナに引っかからないものは血肉にならないのだから、誰かが「名著だ」と言っているも無理して読む必要はない。

また、自分がピンと来なければ、著者がどれだけ強調していても時間が経てば忘れてしまう。でも自分がピンと来た本や言葉は、たとえピンと来た理由がわからなくても、自分にとって大事な何かを示唆している。

例えて言うなら、そは人を好きになることと似ている。誰もがいいと言う人よりも、自分がいいと思う人を、人は好きになる。そして、自分がなぜその人に惹かれたのか、好きになったのかは、ずっと後になってみないと分からない。

人を好きになる理由なんて言葉で説明できるものではない。それと同じように、ピンと来る理由をその時にすべてわからなくていい。そのような「偶然」や「分からなさ」にこそ、生きていく上で解決すべき問題が隠されていると僕は思う。

だから、ピンと来る本や言葉と出会ったら、理由がわからなくても大切にすること。それがあとで振り返った時に、運命の出会いとを感じるものなのかもしれないのだから。

復習こそ、学習の基本

直感を信じて本を選んでも、読み終えてすぐ内容を忘れてしまうようだと、時間を無駄にしたように思えて、本を読むモチベーションを下げることになる。

反対に、読んだものが血肉化され、活かすことができていると感じられれば、もっと読書をしたいという気持ちは高まっていく。

だから、読み終えた本の内容を血肉化することは、一冊の本から学ぶためだけでなく、読書を継続的に楽しみ、習慣化するためにも欠かせない。

こうした血肉化のために最も大切なことは、それを繰り返し読むこと。すなわち「復習」だ。

「復習」と聞くだけで、げんなりする人がいるのを僕はよく知っている。

たしかに復習は面倒だし、「一冊の本を読み終えた」という達成感を減らしてしまってもする。一冊を読み終えたら、早く次の一冊にとりかかりたい、というのが本音だろう。

でも、そこで立ち止まって復習できるかどうか「学ぶための読書」の成否を決める。僕は勉強法を指導しているが、その軸となるのもやはり復習だ。

多くの受験生は復習を面倒くさがってしないが、学んだことが身につかないのはそれが原因なのだ。復習の効果を自分で実感すれば、それをせずにはいられなくなる。

同じように、読書においても復習の素晴らしさを実感できれば、やみつきになる。

ただし、復習するといっても一冊を通して読みなおすのは時間がかかりすぎる。それに、どこが重要か分からないままだと、メリハリがなくダラダラとしてしまいやすい。

だからこそ「ピン」ときた読み返したい箇所を、一回目の通読の際に印をつけておくのが重要になるのだ。

復習の際には、そうやって印をつけた箇所だけを読み返す。これは逆に言えば、自分が「ピン」と来ない部分は読み返さなくていいし、忘れてしまってもいい、ということでもある。

印をつけた箇所を読み直すだけで、本の全体像をつかむことができる。

そうやって短時間で読み返すと、メリハリがないままダラダラ読むだけの読書に比べて、本の構成はつかみやすくなるし、内容も記憶に残りやすくなる。

こうするだけで、読んだ本の印象が深まり、実際の生活に活かすことがしやすくなる。誰かに内容を話せるようになるし、そこに自分の意見を加えて語るといったことも自然とできるようになるのだ。

世界への「フック」を増やす

こうして「ピン」ときたものに印をつけておくことで、それを手がかりにしてインターネットという無限の世界と向き合える。そうすれば、自分の気になるキーワードを出発点として、自分が興味を持てる世界を広げていくことができるようになる。

このように、印をつけることでウェブをより活用できるようになることは先に述べたけれども、印をつけた箇所を復習することで、それがウェブだけでなく、現実世界においてもぐっと活用しやすくなる。

印をつけて復習しておく、頭の片隅にそのキーワードが長く留まるようになる。すると日常的には思い出されないが、ふとした偶然でそのキーワードと関係する何かと出会った時、頭の片隅にあったキーワードが熱を帯びる。

いつものように読書をしている時、街を歩いている時、友人と会話している時、学校の授業を受けている時、働いている時。そうした何気ない日々の生活の中で「ピン」と来たものが無意識のうちに反応するようになる。

読書を通じて「ピン」と来たものを頭の片隅に残しておけば、日常の中で「ピン」と来るものに出会う機会が増える。それは世界への「フック」を増やすようなものだ。「フック」が増えれば増えるほど、自分が生きていて「ピン」と来るものが増える。

僕らは膨大な情報に囲まれた世界に生きている。だから、どれが自分にとって意味のある情報なのかを見分けるのは難しい。その結果、自分にとって大切な情報を手に入れようとするのを怠るようになる。

それは情報の洪水の中で泳ぐのに疲れ、溺れてしまうようなものだ。そして、この高度に情報化した社会において、「情報を手に入れる」すなわち「学び」を怠けてしまうのは、自分の可能性を押しつぶすのに等しい。

逆に、情報の海を自在に航海する術を身につけることで、無限の情報の中から、自分に意味のある情報を、半ば自動的に選び取り続けることができる。そのような「学び」を生活の一部とすることで、情報に満ちた世界を生き抜くことができるようになる。

だから、こうした術を身につけられるか否かは、現実的に死活的な問題なのだ。しかも、この術を身につけることで、この航海を楽しむことができるようになる。

日常の「ピン」とくる経験と、記憶に留めておいたキーワードとが混じり合うことによって、あたらしい学びやひらめきが生まれる。そうした学びやひらめきは新たな「フック」となって、次なる「ピン」とくる経験の下地になる。

世界の情報は膨大だが、こうしたスタイルを身につけておけば、現実と、読書と、インターネットの3つの世界を横断し、そのすべてを自由に行き来しながら、自分にとってピンと来る情報に出会い続けられる。

自分が「ピン」と来るものだから学ぶのも面白い。だから学ぶ意欲は高まり続ける。そのスピードはピンと来るものが増えれば増えるほど加速度的に上がっていく。振り返れば、僕はそうした「光速の学習」によってその時々を生き延びる力を身につけてきた。

高校を辞めた頃の僕はいつも「退屈だ」とこぼしていた。でも、今は生きていて毎日が楽しい。それほどに変化した理由は日々「ピン」と来るものと出会えるようになったからだ。

これは今まで人類が経験することのなかった学び方だが、これは僕だけができる特別な技術ではない。その気になれば、誰だって今日からでも始められる。

こうやって生きはじめると、世界の姿はそれまでとまるで違って見える。つまらなく感じていた日常が、急に明るくなって見える。リアル世界とインターネットが繋がった非日常の世界で、自分だけの宝物を探し続ける冒険のように感じられるのだ。

「メイン・サブ・サブサブ理論」

「光速の学習」としての「フック」は、一見地味な復習の積み重ねによって作られる。そして、復習の「カタ」の中心となるのが、復習のステップを三段階に分ける「メイン・サブ・サブサブ理論」だ。

たいていの人は本を一回だけ通読しただけで「読み終えた」と考える。

だが、それでは「メイン・サブ・サブサブ」においては、第一ステップの「メイン」すら終えたことにならない。

最初の通読を終えた段階は「復習のはじまり」に過ぎない。大切なのは、ここからどう読み返すか、だ。

まず「メイン」のステップでは、線を引きながら通読した「直後」に、最初のページからパラパラとページをめくって、線を引いた箇所だけを読み返す。

この読み返しをすると、はじめに「ピン」と来て印をつけた部分の多くが「実はさほど重要ではなかった」ことに気がつく。

そのためのポイントは、読み返しを通読の「直後」に行うことと、別の色のペンで「絞り込み」を行うことだ。

「直後」に行うのは、本の内容が頭に残っているうちに読み返すためだ。

もし、ここで時間を空けてしまうと線を引いた理由を忘れてしまう。すると、線を引いた箇所だけ読んでも内容がつかめず、その前後まで読み返さなければならなくなる。

本の理解度が下がり、さらに時間もそのぶんだけかかってしまうので、「直後」に読み返すのは欠かせない。

「絞り込み」をする理由は、初回の通読時に線を多く引きすぎるためだ。重複している部分や、読み返すといまいちピンとこなくなつた箇所を省くことで、より重要な箇所だけを残し、サブ以降にかかる読み返しの時間を減らすこともできる。

線の引き方に関しては、まず最初は赤ペンと青ペンの2色を準備して、最初の時は赤で、読み返しの時は赤線の横に青で波線を引いていくと後で区別しやすい。

このやり方で線を引くのに慣れてきたら、カギカッコや複数行にまたがる横線を使ったり、行間や本の上下の余白に目印となる記号をつけたりすれば、より効果的に印をつけられるようになるだろう。

さらに多くの本を読むようになったら、その本の難しさや、読む目的に応じて印のつけ方を自分なりに工夫していけばいいが、ともかく、まずは赤線を引きながら読むことと、そうやって印をつけた箇所を読み返すことだけを守れば十分だ。

慣れていない人は、線を引くことが目的になってしまい、それを終えただけで満足してしまいやすい。だが、肝心の読み返しを行わなければ、線を引いた意味はほとんどない。

読み返すよりも次の本に進みたいという誘惑を乗り越えて、「直後」の読み返して「絞り込む」ことではじめて「メイン」のステップが完了となる。

こうした「直後の絞り込み」の一手間を加えるだけで、これまでよりずっと実りのある読書体験ができるはずだ。

とはいえ、このまま放っておくと、せっかくないい感じで読み返した本の内容をすっかり忘れ、数カ月後には「読んだような、読んでないような」くらいの曖昧な状態になってしまう。

そうならないために登場するのが、第二・第三ステップの「サブ」と「サブサブ」だ。

「サブ」と「サブサブ」

「サブ」では、「メイン」の完了から1週間～最長1ヶ月以内を目安に読み返しを行う。その際、読み返すのは「メイン」で絞り込んだ箇所だけでいい。

やや時間を空けることで、記憶の中で本の内容が自然と整理される。その段階で読み返すことで、それが血肉と化すべきものなのかどうかが自然と判別できるようになる。

絞り込んだ箇所を読み返すだけなので、たいして時間もかからない。線を引いた箇所が少なければ数分で終わるし、長い本でも1冊1時間を超えることはほとんどない。

この読み返しの際にピンときた箇所は、ページの角を内側に1センチほど折り込む。折ったページの反対側のページも折り返したい時は、そちら側にさらに5ミリほど折り返せばいい。

この時、角を折るかどうかの基準に悩んだら「1年後にも必ず読み返したいか」と自分に問いかける。一瞬でも迷いが生じたなら、時間が経つとピンとこなくなる可能性が高い。

こうして最後まで読み終えたら、角を折ったページだけをめくって一気に読み返す。ここまでくれば内容も鮮明に覚えているので、時間はほとんどかからない。

この段階が「サブ」の完了であり、ここまでの工程を終えた本は「サブサブ」として扱う。そして「サブサブ」となった本は、書棚にしまってしまえばいい。

ここから先は意識的に復習する必要はない。

「サブサブ」まで終えた本は、印をつけた部分が無意識レベルで記憶されるため、日常生活の中で「あの本をいま読み直すべきだ」とピンとくるようになる。

そしたら、その直感を見逃さずに読み返そう。

本棚から取り出して角を折ってあるページをパラパラとめくれば、最初に通読した時のイメージが蘇ってくる。そして、なぜいま「ピン」ときたのかの理由も分かるはずだ。

それは本の内容が消化され、自分の血肉と化しつつある証拠だ。このタイミングで読み返すことで、その本から得た知識が、自分の中にすんなり落としこまれていく。

「やっぱりこれは大事だな」とか、「この言葉にはずいぶん影響を受けていたんだな」といった確認ができるだけでなく、最初の時には気づけなかった「深い読み」をすることができるようになる。読み返すまでの間に経験したことが、最初に読んだ時に印をつけた箇所に新たな意味を与え、同じ本なのに、最初に読んだ時とは違った姿を見せる。

その際、最初から通して読み返したくなったら、再び「メイン」として一から読みはじめればいい。理解がさらに深まり、発見や気づきが生まれるが、それだけではない。

「メイン」として最初から読み返したくなるような本は、自分の奥深くで血肉とすべき知識がたくさん詰まっている。あるいは、勇気づけられたり癒されたりする言葉が多く含まれている。そうした本は「座右の書」の候補なのだ。

「座右の書」は一度読むだけでいきなり出会えるようなものではない。

最初に読んだ時には気が付かなかった深みを、読み返した際に知ることができるような本は、叡智が込められた本である可能性が高い。事後的に「自分がいかに物事を知らなかったか」と気がつくことほど、学ぶ上で意味のあることは少ない。

ピンときた本を何度も読み返すことで、自分にとって大切な本だという確信が深まる。しかも、読み返すたびに味わい深い学びを得る。そうしたことの積み重ねが「単なる本」を「座右に置きたい書物」へと成長させるのだ。

「60%理論」

本を一読して完全に理解できればいいが、読み終えた直後に「本の内容を教えて」と言われても、実は理解も記憶もあやふやで、たいしたことは語れないのが普通だ。

だから僕は本の理解度を「メイン」で60%、「サブ」で80%、そして時間を空けて「サブサブ」として読み返すことで次第に100%に近づく、というイメージで考えている。

「メイン」として読み終えた時点ではどうせ60%くらいなのだから、あまり気張らず、線だけ引きながら読み通してしまえばいい。

ただし60%のまま放置しておくとすぐに忘れてしまうので、「サブ」や「サブサブ」として読み返すことが欠かせない。

僕はこれを「残り40%分を意識して読み返す」という意味を込めて「60%理論」と呼んでいる。

これを別の角度から見れば、「メイン」として読み終えた時に60%も理解できないような本は、面白さを感じられないから読むべきでないという意味も含まれている。

ところで、本は1冊でひとつの世界を構成していて、読書とはその世界を自分の頭の中に再現する行為だ。

だが、一冊の本を読むのに途中で中断して間を空けてしまうと、頭の中に描きかけた世界のイメージが失われてしまう。そうするとイメージを描き直す手間がかかり、その本の面白さが半減したところから再スタートしなければならなくなる。

そうならないためにも、一冊の本はできるだけ短期間に読む方がいい。

もし1日の読書時間をあまりとれないようなら、読書中の本を読まない日を作らないように心がける。1日数ページずつでも、毎日触れれば頭の中に構築された世界を壊すことなく、読み進めることができるからだ。

また、本を読み終えてから時間が経つと頭の中で作り上げたその本の世界は失われてしまう。

だから最初に「メイン」として読みはじめてから「サブサブ」に到達するまではなるべく早い方がいい。

これまでのカタ通りに読んでいけば、「サブ」として読み終え、理解度が80%まで進んだ段階で、ピンとくる箇所を最低四度は読んだことになる。短期間で繰り返し読むことで、その本の理解が深まり、記憶に深く刻まれるようになる。

この「短期間」その目安となるのが先の「最長1ヶ月以内」なのだ。

こうしておくことで、時間が経って細部を忘れてしまっても、深く刻まれた記憶を呼び出して、本の世界のイメージを再構築しやすくなる。一度「サブ」にしておけば、後は「サブサブ」として自然と100%に近づいていくのだ。

こうしたことを踏まえると、はじめは多くの本を読みたい場合であっても「メイン」は1冊、「サブ」は数冊程度に留めることが大切だ。

それ以上の本を並行して読む際は、「メイン・サブ・サブサブ」のステップをすべて継続的に行える読書時間を確保することが欠かせない。

本棚の作り方

読み終えた本を適当においておくと、どれが読み返すべき本かわからなくなり、結局、復習をしなくなってしまう。

僕も、そうした失敗を何度となく行なっては、反省して試行錯誤を重ねてきた。

その結果、これまで述べてきたような読書法を実践するためには、本を「未読本」「メイン」「サブ」「サブサブ」「座右の書」の五つに分けて、それぞれのステップにあわせた置き場を作っておくといいことに気がついた。

本の置き場は、本棚があればそれに越したことはないが、必ずしも必要ではないし、場合によっては本物の本がそこになくたって構わない。

たとえば学生時代の僕は、「未読本」と「メイン」「サブ」は机の上に、そのステップを終えた「サブサブ」は部屋の壁沿いの床に直接、倒れないように積み重ねていた。

これから読書の中心が電子書籍になっていくとすれば、本物の本棚を部屋からなくして、インターネット上に「仮想の本棚」を作ることだってできるだろう。

本の置き場をつくる目的は、それぞれの本の読了状況を、自分が一目で分かるようにしておくためなのだ。

「未読本」をひとまとめにしておくと、装丁や背表紙で本のイメージをかきたて、その時に一番読みたいと思う本を直感で選ぶことができる。この直感は「その時に一番読むべき本」を教えてくれるし、だからこそより多くを学び取れる。

「メイン」や「サブ」の置き場をつくることで、「復習をしよう」という意識を常に保つことができるようになる。

復習をするよりも新しい本に進みたい欲求の方が、普通は強い。特に読書法を切り替える最初は、なかなかその欲求に抗えないだろう。でも、この「メイン」や「サブ」をきちんと読み返せるかどうかで、読書の効果は断然変わってくる。

だから「メイン」や「サブ」は最も手近な場所に作っておく。こうすることで本が復習をしやすくし、本が溜まりすぎて復習するのが気が重くなることを防げるのだ。

もし読み返しを怠って「メイン」や「サブ」に大量の本が溜まってしまったら、それを読み返すのは諦めて、まとめて「サブサブ」に入れてしまうと気が楽になる。

そして読み返しを怠って学びを失ったことを反省して、次からは怠らないようにして、また新たな気持ちで読みはじめればいいのだ。

「メイン」や「サブ」にはなるべく本をためない方がいいのに対して、「サブサブ」には本が溜まれば溜まるほどいい。それだけ自分の血肉となった本が増えたということだからだ。

「サブサブ」に置かれた本が増えていき、ひとつの書棚を形成するくらいになると、そこに並べられた本の背表紙を眺めていくだけでも、内容をかなり思い起こすことができる。

これは瞬間的に行うことのできる復習であると同時に、やや発展した読書法でもある。

読書とは、本を開いて一文字ずつ追うことだけを指すのではない。むしろ本を開かずに、背表紙だけで中身を思い起こすことで復習となる。

これもまた、読書の一つなのだ。

先にも述べた通り、こうした読書を繰り返すうちに、やがて「サブサブ」から「座右の書」が生まれる。そして、こうして生まれた本は、文字通り自分の「座右」に、すなわち自分が座っているところから一番手の届きやすい場所においておくといい。

この「座右の書」となる置き場に一冊、二冊と増えていく本は、このやや面倒な読書法を実践することで得られる一番の宝物だ。

「小宇宙としての書棚」と、「太陽のような座右の書」

線が引かれたり、印がつけられたり、角が折られていたり、読みながら書きつけた言葉のあつたりする本が、僕の書棚には数多く並んでいる。食べたものが体の細胞に変わるように、これらの本は生きる糧として、血となり肉となって僕を形作っている。

だから、僕の書棚は、僕という存在が投影された小宇宙のようなものだ。さまざまなジャンルの本があるけれど、そのすべてがどこかでつながりあい、ひとつの小宇宙を構成している。

目には見えないけれど、それをつなげてきたのは僕だから、確かに分かる。

小宇宙である本棚には、その核となる「太陽」のような本がある。それは多くの本の繋がり「中心」に位置する本であり、その周りに並べられた衛星のような本とつながっている。

この太陽のような本だけを集めた棚がある。そこを僕は「座右の書棚」と呼んでいた。

通常の本棚とは別に、いま座っている席からいつでも手が届くところに数十冊の本が並べられている。ここにあるのが僕が読んできた数千冊の書物の中でも、とびきりの宝物といえる「座右の書」だ。

背表紙を見るだけで最初に読んだ時の心のふるえを思い出せる。本を開けば至るところに書き込みがある。何度も繰り返し読んでいたから内容はよく分かっているつもりだ。それでも、ふとした時に読み直すたびに多くの大切なことにあらためて気付かされる。

挫けそうな時、迷った時、悩んだ時、座右の書は僕が前に進む力をくれた。ふと立ち止まってこの書棚に手を伸ばせば進むべき道を指し示してもくれた。

「趣味の読書」を続けていたら、おそらく座右の書に出会うことはできなかったと思う。たとえ年に数冊ずつでも、そうした本と出会えたことで、その本が闇夜を照らすようにして僕の世界を広げてくれた。

人生を決める大きな決断をする時、新しい一歩を踏み出す時、僕の傍には必ず「座右の書」があった。先に挙げた十冊はその一部にすぎないけれど、18歳から今に至るまで十年間の読書を振り返ると、僕の人生の分岐点となった本がいくつも挙げられる。

僕は出会うべきタイミングでこれらの「座右の書」と出会い、その言葉を頼りに道を切り拓いてきた。

タイプ別読書法 「小説」編

先の十冊を本のタイプ別に「小説」「古典」「一般書籍」に分類すると、それぞれ以下のようなになる。

①小説（『竜馬がゆく』『深夜特急』『人間の絆』『希望の国のエクソダス』

②古典（『エチカ』『福翁自伝』）

③一般書籍（『自分の中に毒を持って』『ほぼ日刊イトイ新聞の本』『マイクロソフトでは出会えなかった天職』『ウェブ時代をゆく』）

こうした本のタイプによって読み方を工夫すると、より深く読めると思う。

たとえば、僕が読書をする時はペンを片手にラインを引いていくわけだけれど、小説に限っては、初めて読むときにはペンを持たずに読む。

というのも、小説はそれを読んでいることを忘れるほど物語の世界に入り込むことで、もっとも深く味わうことができるわけだけれど、線を引こうとするとそれに気を取られてしまい、物語に没入しにくくなってしまうからだ。

そもそも、それほど面白い小説は、線を引く時間があれば先を読み進めたくもなる。

小説においては、そこから知識を得ることより、作中の登場人物の思考や感情を追体験することがいちばん大切なことだと思う。

それはストーリーを知識として「読み取る」のではなく、経験として「感じる」ということだ。そして、その「感じ」がよりリアルであればあるほど、よい物語だと僕は思う。

そうした「感じ」を失わないためにも、小説をはじめて読む時にはペンを持たずに、「ピン」と来る箇所に出会ったら、最初からページの端を折ってしまうといい。

これなら文章を追うのを止めなくていいし、慣れれば無意識にできるようになる。

そして小説を読み終えてからペンを持って、端を折ったページだけを読みなおすのだ。ピンときた箇所に印をつけながら、その前後の流れも思い起こして、それを手がかりに物語世界のイメージを頭の中で再構築する。

読み返して大して意味のないページを折っていたと気づいた場合、線は引かずに折り返しを元に戻せばいい。

たったこれだけのことで、自分にとって大切な箇所が明確になるだけでなく、それらをつなげて物語のイメージを記憶に焼きつけられる。これで「メイン」の完了だ。

とはいえ「サブ」の読み返しの時点では、たとえ一週間しか空けなかったとしても、物語の細部はかなり忘れてしまっている。でも、それは当たり前のことだ。

だから、細部を忘れるのは当然と考えて、あえて線を引いた箇所だけを追って、そこから「物語全体」を思い描いてみる。

すると物語の細部が削られ、印象深かった部分だけがくっきりと浮かび上がる。それが物語全体の流れと関連付けられることで、物語世界のイメージがより明確になるのだ。

この時、なぜその箇所に自分がピンと来たのかを考えながら、別の色で線を引いていき、ピンと来た理由がわからなくなるほど曖昧であれば折った部分を元に戻す。

そして「サブ」の最後に、まだ折ってあるページだけ読み返すことで、物語世界のイメージが確固としたものとして自分の記憶に残ることになる。

イメージができたなら本から手を離して、その物語世界のイメージの中で遊んでみるのもおもしろい。本を読み終えた後でも、その世界に浸れるのは小説ならではの読み方だ。

小説は、自分では経験することのできない人生を、擬似的に味わうことができる。それは時として現実逃避と紙一重だけれど、だからこそ傷ついた心を癒してくれもする。

論理ではなくストーリーが推進力となるからこそ、感情の奥深くにまで働きかける。そして自分の頭の中で世界を再現するからこそ、決して自分が経験することのできない人生を、時として現実よりもリアルな経験として感じられる。

危険な冒険を、人間関係の葛藤を、人生の苦悩を、あるいは喜びを、日常生活の中で味わえること。それが小説を読む醍醐味であり、そうした中にこそ小説以外では受け取ることのできない学びがある。

タイプ別読書法 「古典」編

小説においては、通常、深い思索や論理はストーリーの背景に隠されている。

そうした背景を読み解いて人に説明することもおもしろいけれど、一読者としては、その物語を「感じる」ことができればそれで十分だと僕は思う。

一方で、「古典」と呼ばれる書物には、時間という荒波に耐えて残った深い思索やアイデアが含まれていて、それを正確に理解することにこそ面白味がある。

古典を一読してそれができればいいのだが、僕は「名著」と聞いて読んでみた古典の難解さに歯が立たず、おもしろさを感じられないまま放り投げるといった経験を何度もしてきた。

いま振り返れば、それはずいぶんと背伸びをした読書だった。

なぜなら古典と呼ばれる書物は、それがどんな本であれ、歴史の流れの中に存在するからこそ古典と呼ばれている。だから、その歴史的な文脈や前提知識なしに読んでも、その本質を理解するのが難しいことが多いのだ。

これは「現代の古典」と呼ばれるような数十年前の書物でも、あるいは百年・千年単位で歴史の中で残ってきた書物でも、基本的な事情は変わらない。

本質を理解できなければおもしろさを感じられないし、おもしろくなければ読み通せない。たとえ無理やり最後まで読み切っても、たいしたものが見られるわけでもない。

高校生や大学に入りたての学生が、歴史的名著を読んでいきなり理解し尽くそうとするのは、登山の初心者がエベレストに挑むようなものであって、ほとんど不可能なのだ。

でも、不可能だと言われると登りたくなるのが若さの証でもある。

僕も、そうした思いで古典を読もうと試みてきた。

そうして分かったのは、ひとつは古典という「山」には独特の登り方が必要であること。もうひとつは、それを登りきった頂上からは、古典という山以外からは眺めることのできない絶景があるということだ。

まず、読みたいと思う古典を見つけたら、その本を手にとって読み通せそうかどうかを判断する。

読み通せそうならそのまま読んでしまえばいいが、おもしろいと感じられそうになければ、臆せず古典の「解説書」にあたってみよう。

古典と呼ばれるような本には、たいていその古典について解説した本が存在する。

解説書にも、面白いものもあれば無味乾燥なものもある。時には古典の解説よりも著者の主張が前面に出ているものもある。

インターネットの情報を参考にしながら、よさそうな解説書を探して読んでみる。必要なら二冊、三冊といろいろな角度からの解説書を読んでみる。

この解説書すら読むのが難しければ、無理をせずに読むのを中断すること。それはいま読むべき本ではないということだ。

古典にピンときた理由は、言葉にはできなくても必ずある。それが読むべき本であれば、そのうち再び読んでみたいと思う時がやってくる。

古典は逃げないし、時間が経ってもその価値が失われることはない。

だから再び巡りあうことを祈りつつ、ひとまず解説書ともども「未読」の棚に積んでおけばいいのだ。

逆に、もしその解説書にグイグイ引き込まれるようなら、大きなチャンスを手に入れたようなものだ。それをベースキャンプだと考えて、じっくり頂上に登る準備をすればいい。

解説書を読んで古典への理解を深めつつ、読みたいという気持ちを高めていく。そして十分に知識と意欲が高まった時を見計らって、古典を繙けばいい。

その際、読もうとする古典が難解な書物であればあるほど、一気に読もうとしないことが大切だ。負荷が高すぎて途中で疲れてしまうことが多いのだ。

登山だってペースを守り、休憩を繰り返しながら一步ずつ登っていく。同じように、その古典を読む時間やページ数を決めて、毎日すこしずつ読み進めるのだ。

読みはじめたらピンときた箇所にはペンで線を引き、必要ならば途中でも迷わず解説書にあたる。あやふやなまま進むと、それが雪だるま式に大きくなってつまづく原因となりやすいからだ。

そうやってその日の分を読み終えたら「印をつけた部分」だけをざっと読み返して論旨を整理する。

翌日は、続きを読み始める前に「前日に印をつけた部分」を読み直してから、その日の読むべき部分に進む。実際にやってみればわかるが、前日に読み返しをしてもなお記憶はおぼろげになるものなのだ。

1時間かけて読んだ箇所でも、読み直しなら数分で済む。これだけで理解も深まるし、昨日の記憶が蘇ることでスムーズに新しいページへと入っていける。

こうして最後のページまでたどりついて、一読して満足してはたちまち雲散霧消してしまう。だから多少の時間がかかったとしても「メイン・サブ・サブサブ」の読み返しも丁寧に行う。

古典を読む際には、このように普通の本以上に注意を払うことで、その道の険しさを乗り越えて読み進めることができる、

そして、それほどの難しさを乗り越えたいと思えるほどの古典に出会えたなら、それを十分に血肉とすることができた暁には「座右の書」となる可能性が高い。

このように古典と向き合い、いくつものステップを踏んで頂上までたどりついた時、ここから見えるのは、その山と同じような高さでそびえている他の山々の姿だ。

その時、視点をすこし下げれば、いまいる場所と、遠くに見える山々が裾野でつながっていることに気がつけるはずだ。この山のつながりは古典の前後にある歴史であり、彼方に見える山々の連なりは、その歴史が生み出したいくつもの古典なのだ。

インターネットで調べたり、解説書を読んだりする中で、その古典の歴史とのつながりがつかめる。

先に「古典は歴史の流れの中に存在する」と言ったけれども、古典は、それを産み落とした母体となる古典や、それを受け継いで生まれた別の古典と、どこかでつながっている。つまり、古典はつながりあってひとつの歴史をつくっている。

それは「歴史の山脈」のようなものだ。

古典を読んでみることで、知識ではなく実感として「歴史の山脈」を味わえる。また、既に読み終えた古典を手がかりに、「歴史の山脈」をたどって次なる古典に挑むこともできる。

古典が古典たる理由は、歴史の中で何かを創造したからだ。そして、その歴史の先端に僕らが生きる「いま、ここ」がある。

一冊の古典を通じて、歴史的な創造の営みを受け取ることができれば、僕らは歴史の創造性をこの身に引き受けて、歴史の先端たる「いま、ここ」を生きることができる。

「いま、ここ」という一点に、過去の膨大な歴史が注ぎこんでいるのを、知識ではなく実感として生きられる視点。

それは、古典という山の頂にたどりついた者だけが眺められる絶景だ。

タイプ別読書法 「一般書籍」編

本を読むのであれば、いつかは古典に挑戦する方がおもしろいと僕は思う。

なぜなら、それほど壮大なスケールの冒険は、古典という「歴史の山脈」以外ではなかなか味わえるものではないからだ。

とはいえ、僕らは古典の世界で学ぶことのできる叡智だけで、日々刻々と過ぎる「いま」をやりすごせるわけではない。

同じように、小説という物語世界の中で遊んでみても、ふと我に返った時には、生きるのになかなか大変な現実世界が待ち受けている。

そのような中で、僕は本書を含めた「小説でもなく古典でもない本」を「いまを生きる」ための糧として読み続けてきた。

先に挙げた十冊の座右の書の中で一番多かったのもこの種の本だ。

これを仮に「一般書籍」と呼ぶとすれば、本書を含め、こうした小説でもなく古典でもない「一般書籍」が書店には最も多く並べられている。

こうした本はあまり身構えずに、著者と「対話」しているつもりで読むといい。

あいづちを打つように読み進め、いいなと思ったら印をつける。読んでいてアイデアをひらめいたり、著者に言いたいことが思い浮かんだら余白に書きこんでいく。

こうして一冊を読み終えると、印をつけたり書き込んだりした跡が著者との「対話の記録」になっているはずだ。

そしたら、この「対話の記録」を「メイン・サブ・サブサブ」の要領で読み返す。

これを怠ってしまうと、どれだけ素晴らしい「対話」でも、他愛のない「雑談」のように記憶から消え去ってしまう。

くどいようだけれど、そうしないためには復習が欠かせない。

この時、たくさんの印がついている本は読み返しに時間がかかる。はじめはそれを面倒だと思ってしまうかもしれないが、それは学びの多かった証拠であって、だからこそ復習が大切といえる。

一方、「ピン」とくる箇所が少なく、印をあまりつけなかった本は復習に時間がかからない。それは楽なように見えるが、実は本を選ぶのに失敗している証なのだ。

「一般書籍」は、その表紙やキャッチコピーだけ見れば、どれも面白そうに思えてくる。だが、毎日数百点の本が出版される現在、それらの中にどれだけ読むべき本があるかといえば、必ずしもそう多くはないと僕は思う。

人生は有限であり、一日のうちで読書に充てられる時間は限られている。だから復習に時間がかからないような本を「選ばない技術」は、最も重要な読書法のひとつだ。

この「選ばない技術」は、読書における「失敗しない方法」だといえる。

読書に限らず、失敗を減らすための唯一の道筋は、逆説的だけれども、挑戦して失敗を繰り返すことにある。それによつてはじめて、どうすれば失敗せずに済むかを体得できるようになるからだ。

挑戦には、失敗が必ずくっついてくる。だから、たいした失敗をしていないとすれば、ほとんど挑戦していないのと等しい。そして、挑戦しなければ何かを真に何かを学び取ることはできない。

赤ん坊だって、立ち上がって歩くために何度も、何度も転ぶのだ。それを繰り返してはじめて歩けるようになり、やがて飛んだり、跳ねたり、走ったりできるようになる。

だが、もし赤ん坊が転ぶのを恐れて立ち上がらなければ、永久に歩けないままだ。

本を選ぶのだって同じだ。失敗を恐れていては、本なんて読めやしない。

はじめは失敗を繰り返すものなのだと覚悟を決めて、ピンときた本はどんどん買って読んでいけばいい。

金を出して購入した本が無駄だと感じるのは痛いものだけれど、身銭を切って失敗することは決して無駄にはならない。むしろ、それによつて本選びの真剣さが高まるはずだ。

とはいえ、それであまりに本選びに無駄が多いと感じたら、読みたい本をメモしておき、すこし時間を空けて本当に読むべきかを考えてから購入するといい。

僕自身、気になった本はすべて、アマゾンの「ほしい物リスト」にひとまず登録し、翌日になっても買いたいと思った本だけを発注している。それ以外の本はリストに残して保留しておく。

月に何度かは書店に行くので、その途中で「ほしい物リスト」を携帯からまとめて確認し、気になったものだけを書店で手に取り、目次や本文を確認してから購入するかどうかを決めている。

こうした過程を経ることで、最初にピンと来た本の8割以上はふるい落とされる。

それでも選ぶのに失敗したと思うことはあるが、こうした「絞り込み」のステップを加えてから、本選びで失敗することが格段に減ったと思う。

以上、「小説」「古典」「一般書籍」と三つに分けて読書法を述べてきたけれど、すべての本が厳密にこの三種類に分けられるわけではない。

これまで述べてきたのを「カタ」として身につけたら、読んでいる本によって、また自分の読書スタイルにあわせて、最もよいと思う読み方を工夫していけばいい。

読書法はあくまで手段に過ぎない。そして、手段の正しさは目的に従属する。つまり、一人ひとりの読書する目的によって、人生で何を大事と考えるかによって、正しい読書法は異なる。

人の数だけ生き方があるように、読み手の数だけ読書法は存在する。

だから、ここまで「カタ」として書いてきたことですら、忠実に守ろうとする必要はないと思う。何はともあれ読書は楽しめなければはじまらない。ここまで僕が長々と述べてきた読書法から、そのヒントを少しでも見つけ出してもらえれば、それだけで十分意味があるのではないかと思う。

いつでも本を持ち歩こう

これまで述べてきたような読書法を今すぐ実践できるかということ、僕自身の経験を振り返っても、なかなかそうもいかないことが多いと思う。ふだんは本を読まない人でさえ、読書は将来役に立つと頭では考えている。でも、実践できないのだ。

読書は、学校の宿題とは違って、すぐやらなければならないものではない。放っておいても誰からも怒られない。だから、ずるずると後回しにしてしまう。

それが続くと、内心では本を読まなければと強く感じている人ほど「本を読んでいない自分」に罪悪感を抱くようになる。

小さなもやもやは、やがて大きくなり、いつしか本を読むことを重荷に感じるようになる。結果として読書から遠ざかってしまい、後ろめたさだけがいつまでも残り続ける。

これは、とんでもなくもったいない悪循環だ。

そもそも本は自分の人生をよりよくするために読むものだ。また、それ自体を楽しめるものであって、罪悪感や抱いたり重荷に感じたりするようなものでは決してない。

この悪循環を断ち切るために僕が工夫した中で最も役立ったのは、単純なことで、いつでも本を持ち歩くようにしたことだ。それも、できる限り取り出しやすい場所に。

これまで読書が習慣にならなかったとすれば、おそらく、それは読みたい時に本が手元になかったことが原因である可能性が高い。

いつでもポケットに本を入れておき、一瞬で取り出せる状況をつくっておくこと。それができれば、本は日常生活の中に組み込まれる。

たとえば、すこしでも時間があるとケータイを取り出していじる若者がたくさんいる。でも、彼ら彼女らの多くは、切実にケータイをいじりたくてそうしているわけではない。

むしろ、ケータイがポケットに入っていていつでも取り出せる状態が生まれたことで、結果として「暇があるとケータイをいじる」という習慣を作り出しているのだ。

だから、読みたいと思える本をいつでも取り出せる状況にしておけば、ちょっとした時間にケータイをいじるように読書をする習慣が生まれる。

本の長所のひとつは、ケータイと同じく、ほんのすこしの時間でも取り出して読めることだ。信号や電車の待ち時間、歯磨き・風呂・トイレの時間まで、いつでもポケットに本を入れ、一瞬で取り出せる状況をつくっておけば、自然と取り出して読めるようになる。

1分で1ページ、30秒あれば半ページ、10秒でも2、3行は読める。そして秒単位で読書する習慣が身につけば、「分単位のスキマ時間」に対する意識も変わる。たとえば、カップラーメンにお湯を注いでからの3分は、貴重な読書タイムになる。

このように「いつでも本を持ち歩く」だけで一日に生まれる秒単位・分単位の「スキマ時間」を充てられるようになる。

交差点の待ち時間にさっと本を出して読みはじめるのは、はじめは恥ずかしいかもしれない。嫌なら無理にそうする必要もない。でも、本を読む習慣がまだ身につけていない段階で、でもそれを身につけたいと強く願うならば、僕の経験上、その恥ずかしさを打ち破るのは大切だ。

学生に向けて

僕が読書の習慣を身に着けたのは学生の時だった。できるなら小さな頃にそれがマスターできていればよかったけれど、そんな贅沢を言うてはいられない。

遅まきながら時間に余裕のある学生の時に、試行錯誤を繰り返しながら、自分なりの読書の習慣と方法を身に着けておいてよかったと心から思う。仕事に追われるようになったら、目の前のことをまずこなさなければならず、読書の優先順位はかなり下がっていった。

でも、読書が習慣化していることで、仕事に追われている頃でも、時間を見つけては本を取り出して読むことで、苦しい時期を乗り越える力を得られたと思う。

読書の習慣がつけば、読む本の種類にもよるが、忙しくても週何冊かはていねいに読めるはずだ。たとえば週二冊を続ければ、年に百冊、十年で千冊。

たった一冊でも丁寧に読めば、昆虫が脱皮するように自分が生まれ変わる経験を味わうことができる。それを一年間で百回も繰り返せば、今からは想像もできないほど変化した自分に出会うことができる。それが十年続いて千冊ともなれば、もはや別人だ。

僕自身、十年前の自分を振り返れば、それが今の自分と同じ一人の人間であることが不思議に思えるほどの変化をしてきた。

そうした変化をさせてくれたのは、やはり読書という静かなる冒険の時間だった。

なにも僕は苦行を勧めているわけではない。

むしろ、ちょっとした「知恵」を活用すれば、それだけの本を楽しみながら読めるという事実と、それによって自分を変えることができるという経験を述べているだけだ。

今の生活を変えたり犠牲にしたりすることなく、自分を大きく変化させるために、僕はこれ以上の時間の使い方を知らない。

一日の時間は、万人に等しく与えられている。でも、同じだけの時間を過ごしても、それによって何を得るかは天と地ほどの隔たりが生じる。

その理由は、不平等に割り振られた天賦の才などではなく、むしろ、平等に与えられた時間をどのように使うのかにかかっていると僕は思う。

一日の中で本を読む時間を作り出すことによって、僕らは世界のことをすこし知ることができる。自分がどのような方向に進みたいのかも、すこし理解することができる。

本から得た知識は、世界という地図をほんのすこしずつだが描いてくれる。そして、自分が線を引いた箇所は、コンパスのように進むべき道を指し示してくれる。血となり肉となった座右の書は、オールを漕ぐ力を与えてくれるだろう。

どこにゴールがあるのかは分からなくても、人生という舵から手を離さずに、前に進むことをあきらめずにいられれば、襲い来る波の一つひとつを乗り越え、確実に前へと進んでいくことができる。

僕は、そうやってここまでやってきた。

世界は不条理に満ちている。自分ではどうすることもできない不幸な出来事が身に降りかかることもある。そのような人生を、それでも諦めずに進んでゆくために、読書は力強い支えとなってくれるだろう。

自分の力で船を動かせるようになると、それまで惰性で流れていた時間が、自分の手で動かせる時間へと変わる。すると日々が冒険の連続のような新鮮さに満ち溢れる。

そのためにも、これまで述べてきたような方法と知恵を活かして、自分が主体的に時間をこないこなし、人生をよく生きる一歩にしてもらえるといいなと思う。

さて、読書術についてはこれで終わりだ。リーディング・ワールドの冒険の楽しさと奥深さが、すこしでも伝わっていると嬉しい。

でも、いつまでも象牙の塔にこもっているわけにはいかない。本を読みながらも、現実世界に立ち向かっていかなければならない。次章では、読書術が「頭の使い方」だとすれば、それと対になる「体の動かし方」としての行動術について述べてみたい。

三章 踏み出せば、その一足が道となる

「一步を踏み出す」という覚悟

大学三年までは本ばかり読んでいた。他にどうすればいいのか分からなかったからだ。

ただ、哲学や文学の本を読み漁りながらも、もたげてくる疑念から目をそらすことはできなかった。本を読んでいるのはいいとしても、それ以外に何もしていない。わざわざ受験をして田舎から東京まで出てきたのに、こもって本を読むばかりでほとんどなにもしていない、と。

もやもやが自分の中に溜まっていた。なんとかしなければと思って僕が答えを求めていたのは相変わらず読書だったのだから、ちょっと笑えない。自分で考えて動き出せばベストだったのだろうが、読書以外には学ぶ術を知らなかった当時の僕は、たまたま岡本太郎の本と出会うことによって、どうすべきかにはじめて気がついた。

それは「一步を踏み出す」ということだ。

それまでの僕は目立つようなことを極力避けていた。なんだか格好悪いと思っていた。それはよく考えれば、踏み出したとしても自分が何もできるわけではないということをごまかすための言い訳に過ぎなかったのだが……。

たとえば学校で学級委員や部活のリーダーを選ぶような場面。僕はどこかでそうした役割に憧れながらも、自分にはできないと思っていた。それが時間が経つにつれて変化し、やりたくないという気持ちに変わっていた。

そういえば、小学校の時に勇気を振り絞って手を挙げて立候補した学級委員は、ほとんど誰も賛成してくれないまま落選した。いま考えれば、そうした役割を任されるべき人間では当然なかったが、あの時に味わった恥ずかしさや悔しさが、いつの間にか「一步踏み出す」ことから遠ざけていた。

そういうこともあって、人前でしゃべることは苦手だった。学級委員、ましてや生徒会のような役割なんて絶対にやらない。授業中に手を挙げることもしないし、目立つようなことは極力しない。そういう性格になっていたから、誰も僕に期待してもいなかった。そういう姿勢で僕は10代をずっと過ごしていた。

受験を終えて大学に入ってもそうしたスタイルが変わることはなかった。

たまに授業に出席しても、教室の一番後ろの席で寝ているか、あるいは授業とは関係のない本を読んでいるだけだった。一番前で真剣に授業を聞いている連中を見ては心のなかでバカにしていた。なんでこんなクソみたいな授業に真剣になれるんだ、と。

だから、そのような気持ちを抱いている人のことはよくわかる。でも、どうせ今は一人でこの本を読んでいるのだから、素直になって、自分に問いかけてみてほしいと思う。

それは、ほんとうに自分がやりたいことだろうか。自分が望んだ生き方なのだろうか。

僕は自分に問いかけた。岡本太郎の本を読みながら。そして出た結論はNOだった。僕を覆っていた鎧を一枚ずつはがして見えてきた自分。それは頼りなく、ひ弱な自分だった。

哲学や文学で身を固めたつもりになっていたけれど、象牙の塔にこもるばかりで、頭でっかちの醜悪な存在になっている気がした。

そうして気がついた。僕はそうした弱い自分と向き合う恐怖から逃げて、背を向けて、ただひたすらに自分を守っていただけなのだと。それに気がついた時に、自分のかっこ悪さに泣きそうになった。

転んだり傷ついたりしたおかげで

その時にはもう大学に入ってから丸3年が経とうとしていた。周りは既に就職活動に勤しんでいる時期だ。幸か不幸か僕は4年間で卒業しないことが決まっていたので、そういう慌ただしさとは無縁の生活を送っていた。

3年も経ったのに、大学に入学した頃よりもかっこ悪くなっているような気さえする。でも、それを引き受けることからしか前には進めない。だから、自分のかっこ悪さを引き受けて「一步踏み出す」覚悟を決めた。

この時から僕の学生生活の第二幕がはじまった。

たとえば、出会う人の広がり。それまで僕は所属していたサークル以外に友達らしい友達はいなかった。だから自分の携帯のメモリに入っていたのも数十人。でも一步踏み出すようになって1年間で、その数は10倍に増えた。

あるいは、出会った人との付き合いの深さ。「深く付き合える友人がほしい」というのは誰も望んでいることだ。誰に言えるわけでもなかったけれど、僕だって心の中では持っていた。たまたま入ったサークルが素晴らしい場所で、僕にとってはかけがえのない出会いがたくさんあった。

それで僕は十分に満足していたのだけれど、そのサークルを引退するとほとんど人と会うこともなくなった。でも「一步踏み出す」ことを意識してからは出会う人の数が飛躍的に増えた。それだけでなく、新しく出会った人も、それまでに知り合っていた人も、一步踏み出すようになってからはずっと深い付き合いができるようになった。

一步を踏み出すようになってから、僕の世界はそれまでの想像をはるかに超えるスピードで広がり、そして深くもなっていたのだ。

ごくまれに「一步を踏み出す」ことを恐れないように見える人がいる。僕はそのような人を宇宙人か何かのように見ていた。彼らはそのような性格を元々持っていて、成長するどこかのタイミングで自然とその価値を身につけたように見える。

そうしたものをまったく持ちあわせていなかった僕は、まったくのゼロからのスタートだった。だから手探りでひとつずつ経験を積んでいくしかなかった。たくさんの失敗もしたし、恥ずかしい思いもたくさんした。目には見えないけれど、心の中では血や涙がこぼれていた。

ただ、そのように転んだり起き上がったりを幾度となく経験したおかげで、どんな時に「一步を踏み出す」タイミングが訪れて、どうやってそこに踏み出すべきかの方法論のようなものはすっかり身についた。

それは受験術や英語力のように分かりやすいスキルではないけれど、僕にとっては自分の人生を切り拓く上でもっとも役に立つ技術だった。

踏み出すことを恐れる気持ちは、たぶん絶対になくならない。でも、踏み出さないと今いる場所から一步たりとも前に進むことはできない。当然、どこにもたどりつけない。

でも、その恐怖を乗り越えて踏み出すことができるようになれば、僕らは行きたい場所へ、どこにでも行くことができる。そうして進んだ場所では、きっとまた新しく進みたい場所が見つかるはずだ。

危険な道をとる

一步を踏み出すために最も大切なのは「勇気」だ。少年マンガみたいだけれど、本当のことだ。

イメージしてみてほしい。目の前に二つの選択肢がある。

ひとつは、一步たりとも前に進まず、どこにもたどりつくことのできない人生。

もうひとつは、毎日が前進であり、日々どこかにたどりついては、新しい場所を求めて旅立つ人生。

前者はこたつに入ってテレビを見ながらみかんと煎餅を食べるような日々。それはそれで悪くないのかもしれない。平凡だけれど、それなりに幸せを感じられなくもない。

でも、僕はもっとワクワクして生きたかった。だから後者を選ぶことに決めた。それは口で言うほど簡単ではない。転んでは血を流し、起き上がる気力を失いかける。

そうした人の姿を見ている分にはマンガみたいで面白いけれど、自分がマンガの主人公のように生きるのは、けっこうしんどい。途中で挫折しそうにもなる。でも、一回きりの人生を、僕は本気で生きたいと思った。だから、そうする以外の選択肢はなかった。

それを決意した瞬間を岡本太郎はこう書いている。

ある夕方、ぼくはカフェのテラスにいた。一人で座って、絶望的な気持ちで街路を見つめてみた。うすい夕陽が斜めに差し込んでいた。

「安全な道をとるか、危険な道をとるか、だ」

あれか、これか。

どうしてその時そんなことを考えたのか、いまはもう覚えていない。ただ、このときこそ己に決断を下すのだ。戦慄が体の中を通り抜ける。この瞬間に、自分自身になるのだ、なるべきだ、ぐっと総身に力を入れた。

「危険な道をとる」

一步を踏み出したいと思う時、いつだってそれは「危険な道」だと感じる。失敗するかもしれない。笑われるかもしれない。そんな恐怖を感じながらも、ぐっと総身に力を入れて危険な道をとると決意を固めるために必要なのは、勇気だ。

その勇気の有る無しが、一步を踏み出せるかどうかを決める。

僕にもこのような決意をする瞬間があった。岡本太郎のように劇的ではないし、彼ほど貫けているとも思わないけれど、それでも、その決意をする前と後では世界が変わった。

岡本太郎はこう続ける。「いのちを投げ出す気持ちで、自らに誓った。死に直面する以外の生はないのだ。その他の空しい条件は切り捨てよう。そして、運命を爆発させるのだ。戦後の日本でぼくの果たした役割、ポジションはその決意の実践だった」。

死ぬまでこの言葉を貫いた岡本太郎は、そうした天性を備えていた生粋の芸術家だった。一方、岡本太郎のような天稟を持ちあわせていない僕は、いつだって貫けるわけではない。

だから今だって僕はよく迷っている。あれか、これか。でも、迷いながらも自分に負けたくないと思って、総身に力を入れて戦ってきた。たとえば、そう、いまこの文章を書いている時だって。

そのように危険な道を選んだ先での戦いの軌跡を振り返れば、はっきりいって圧倒的に負けの方が多いように思う。戦いに勝てたと自信をもって言える経験は、すくない。でも、後悔することはない。

自分へのプライドと他者へのプライド

でも、戦わなかったら後悔していたに違いない。岡本太郎の言葉が聞こえるようだ。

「挑戦した上での不成功者と、挑戦を避けたままの不成功者とではまったく天地のへだたりがある。挑戦した不成功者には、再挑戦者としての新しい輝きが約束されるだろうが、挑戦を避けたままでオリてしまったやつには新しい人生などはない。ただただ成り行きにまかせてむなしい生涯を送るにちがいないだろう。」

その通りだ。その通りなんだけど、でも、それが凡人には果てしなく難しいんだよ、太郎さんよ。そんな愚痴のひとつも言いたくなるくらい「一步を踏み出す」ための勇気を持つのは簡単じゃない。

でも、考えてみればなぜその勇気を持ってないのだろう。そちらに進みたいという気持ちは間違いなく秘めているのに……。どうして僕らは自分でも気づかぬ間に、一步踏み出せない自分を守るために、踏み出している誰かをあざ笑うような人間になってしまうのだろう。憧れを隠して、自分の本心に嘘をつく卑しさに負けてしまうのだろう。

おそらく、それは一步を踏み出した時に笑われたり、傷つくことへの恐怖からくるのだと思う。人に対する見栄とかコンプレックスのようなものを背負うことで僕らは動けなくなってしまうのだ。

それを岡本太郎は「他に対するプライド」と呼ぶ。

「他に対して、プライドを見せるということは、他人に基準を置いて自分を考えていることだ。そんなものは本物のプライドじゃない。たとえ、他人にバカにされようが、けなされようが、笑われようが、自分がほんとうに生きている手ごたえをもつことが、プライドなんだ」。

恐怖は自分を守るための鎧をつくる。その鎧を十重にも二十重にも身にまとっている人もいる。でも、そうやって重ね着しているうちに、鎧は重くなり一歩も動けなくなる。そうやって、鎧は自分を守るものではなく、その中に自らを閉じ込める檻へと変わる。

人は誰しも脆く儂いものを心の中に抱えている。それを大切に守りながら生きている。それは悪いことではない、どころか、絶対に守り抜くべきものだ。でも、幾重にも固められた檻の中にそれを閉じ込めているうちに、いつしか自分が何を守っていたのかすら忘れてしまう。

時に人は、そのようにして切実なものを見失ってしまう。

いろんな見栄とかコンプレックスみたいなものをすべて守ろうとするから、結果として檻の中に閉じ込められる。重すぎて動けなくなる。

そんな時、僕はあらためて自分にとって大切なものだけを思い描く。肥大化した「他へのプライド」をいったん脇において、ほんとうに大切な物だけに目を凝らす。

たくさんものを背負うことはできない。だから、他のすべてを背負うことは諦めて、絶対に譲りたくないものだけを、ぎゅっと手の中にちいさく握り締めるのだ。

それは檻を開けるための鍵だ。そして、その鍵を使って自分を檻から解き放つ。

脆く儂いもの。それは生きるということだと僕は思う。それも嘘偽りなく、自分が十分に輝いて生きるということ。それこそが、僕が絶対に誰にも譲り渡したくないものだ。

「大切なのは、他に対してプライドをもつことでなく、自分自身に対してプライドをもつことなんだ」「相対的なプライドではなくて、絶対感を持つこと、それがほんとうのプライドだ」。

自分自身に対するプライド。

それはすべての人が他の誰にも絶対に譲り渡してはいけないものだと僕は信じている。

とある新学期の教室で

うんと身近な話をしよう。

たとえば新学期。生徒の一人ひとりが自己紹介したり、先生の質問に答えたりしながら時間が進む。その中の話で、ちょっと気になる人がいた。それは異性でもいいし、同性でもいい。素敵な人だな、とか、あいつと深く話したらおもしろそうだな、と心は感じている。

でも、自分から声をかけるのは恥ずかしいな。変なヤツだと思われかねないし。そう思いながらちらちら様子を探るけれど、それも誤解されたら困るから長くは続けないで、なんとなく宙を眺める。

そうしてみんなが様子見をしている教室が生まれる。でも、想像してみしてほしい。その場にいるみんながみんな、そんな気持ちを心の底では抱えている。にもかかわらず、誰も勇気を出さないから教室は静まりかえっているのだ。

そんな教室を上から見下ろしたら、吹き出してしまいそうな光景じゃないだろうか。でも、僕が大学に入って経験したのはこうした空間ばかりだった。

授業後を終えた休み時間、知り合い同士が話しはじめる。話すことそれ自体が目的の、とりたてて内容のない会話だ。自分はさほど仲いい友達もいないし、群れたくもないから席に座ってじっとしている。あるいは、トイレに行ったり、気晴らしに外を散歩しにいこうとしたり。

その時、廊下でさっき気になった人にばったり出会う。瞬間、心臓が脈打つ。声をかけてみようか、かけまいか。ほんのすこしだけ目が合うけれど、恥ずかしいので何もなかったかのごとく教室へ戻る。そして、ほんのすこしだけ後悔する。でも、すぐに忘れる。

そういったことを僕は数百回と繰り返してきた。そして、ある時に覚悟を決めるまでは、そうした機会に、ただの一度も自分から一步踏み出すことをしなかった。だから、大学の教室で友人関係が広まることはなかった。

おもしろいと感じられる授業もほとんどなく、教室に行くモチベーションはどんどん下がっていった。

いま振り返れば、もったいないことをしたと思う。それまでの数年間、僕は自分のプライドに負けて他者に対して声をかけたいという気持ちに負け続けていたのだ。

しかも、それがごく当たり前の日常になっていったため、いつしか負けているという自覚すらなくなった。

しかも僕は生来おもしろいと感じられないことには、からっきし力が出ない性格だ。結果として大学の授業にはほとんどいなくなり、人と関わるのはたったひとつのサークルだけといった状況になっていた。

それでも本だけは毎日読んでいたから、いろんなことを感じたり考えたりはしたけれど、大学も三年間が過ぎるまで僕の世界は偶然の成り行き以外で広まることはなかった。

いま僕はそのことを悔いたり嘆いたりしているわけではない。ただ、惜しいことをしたな、とは思ふ。

その頃の僕は、こうした何気ないシーンにもたくさんの可能性があるということを知らなかった。たとえば、ある時に声をかけた友人が生涯の親友になっていたり、伴侶になっていたりする可能性はありうる。

ありうる、というよりも、どちらかが勇気を持って踏み出さなければ、人と人がそのような関係になる可能性は限りなくゼロに近いのだと僕は思う。

もし僕がこの時に「危険な方をとる」という考えをすこしでも持っていたら、たとえ一歩踏み出せないとしても、反省して次に活かすことができた。そのようにして世界は、本の中だけでなく、現実においても広がっていただろう。

教室の外でも

これは教室の中に限った話ではない。街をふつうに歩いている時にだってそうした瞬間はやってくる。日常という狭い世界の中から、外に一歩を踏み出す覚悟をすれば、世界は無限の広がりを持つ。

たとえば、僕はある時にこんな決め事を自分に課した。電車の中で三回、相手と目が会ったら話しかけてみる。あるいは、町の食堂で気になった人がいたら話しかけてみる。それを覚悟して家の外に出たら、平凡な街並みが別世界になった。ドキドキが連続する非日常の空間になった。

覚悟ひとつで、同じ世界でも、景色はこれほどまでに変わるものなのだ。それは新しい発見だったが、それなりにしんどい世界に足を踏み入れるということでもあった。

だって、誰かに話しかけるなんてまったくもってしたことのない僕が、ふらっと立ち寄ったそば屋で、隣の席に座っている人や集団に「あの一」と声をかけるんだ。緊張しないわけがない。

もちろん、すべてのチャレンジがうまくいくわけじゃない。話が續かないことだってあるし、変なやつだと思われて引かれることもあるだろう。残念だがそういうケースは確かにある。一目惚れされるような容姿を持っている人は別として、残念ながら僕はそのような人間ではない。

でも、かえってそれが良かったのかもしれない。警戒されたり、緊張されたりすることは少なかった。そこから、どのようにコミュニケーションをすれば自然と打ち解けられるのかも学ぶことができた。

実際に一步を踏み出してみると、思ったより相手は素直に受け入れてくれるものだ。信じられないのなら反対の立場を想像してみしてほしい。

いきなりそば屋で隣から話しかけられたら、最初は驚くかもしれない。でも、この安全な日本で別にとって食われるわけでもないし、異常な風貌をしているわけでなければ、自分が興味を持たれたと思えば、すこし不安はあっても悪い気はしない。

相手が自分を気になっていると感じたら、こちらもすこし相手に興味がわく。それは人間として自然なことだと僕には思える。

とはいえ、大学や学生街という立地条件がこうした行為を受け入れてる素地だったのかもしれない。大学横の学生街で食事をする人間は、どこかしら接点があるものだ。見知らぬ人同士が関係を築くには、ある種の安心感がなければ難しい。実際、電車の方はまったくもってうまくいかなかった。

それに、学生で時間的なゆとりがあったからこんなチャレンジをすることができたともいえる。ピンと来たすべてに踏み出していたらキリがないので、こうした行為に慣れた後ではたいていのものは流すようになった。

でも、あの時に覚悟を持って行動を起こしたからこそ学べたものがある。失敗も含めて経験を積み、「いま勇気を出せなかった俺はなんて臆病者なんだ」と幾度も地団駄を踏んだことで、必要とあらば見ず知らずの人に自然と話しかけることができるようになった。

昔は地雷原に飛び込むような決意で踏み出していたが、今となっては歩幅ほどの小川を飛び越えるくらいの恐怖心でしかない。もちろん、相変わらずすこしの勇気は要るが、ここぞという時にそれを逃すことはもうないと思う。

シグナルと謎

とはいえ、僕だって誰彼かまわず話しかけていたわけじゃない。それじゃ変人だし、迷惑なだけの存在だ。僕が話しかけていたのは「気になる」と感じた人だけ。

それがどんな人であれ「気になる」としたら、そこには何らかの「シグナル」が発されている。前にも触れた通り、シグナルはなぜ発されているのかは、はじめの時には分から

ない。でも、気になる信号が発されているのは間違いない。だとすれば、そこには自分が反応して、解決すべき謎が存在している。

そうしたシグナルを発している存在はどこにでも転がっているわけではない。でも、僕らはふとした瞬間にそのようなシグナルが発されていることに気づく。

そのシグナルは僕に何かを伝えようとしている。だって、広い世界の中で「気になる」ものは無限にあるわけじゃない。それが言葉にはできなくても、今はまだ理解できなくても、なんらかのつながりがあるからこそシグナルとして僕らは感じ取れるのではないだろうか。

日々、僕らはたくさんシグナルを受け取っている。その中には意味のないシグナルもあれば、大きな人生の転換点ともなるシグナルもあるだろう。でも、そのどれが正しいのかなんて絶対に分からない。

だから、大切なのはその謎を解き明かすためにシグナルの方へと一歩を踏み出すことだと僕は思う。

もちろん、踏み出したからってすべての謎が解けるわけじゃない。うまくいかなくて、結局なにも起こらなかったということもあるだろう。でも、そうやってシグナルの方へ数多く踏み出しているうちに、その謎が解けることを通じて自分にはまったく知らなかった世界がひらけることがある。

だからシグナルをキャッチしたら、それは踏み出すべき時なのだ。

それをこういうふうに言い換えてもいい。シグナルとは、世界が自分に対して送っているメッセージなのだ、と。そのメッセージの内容は分からない。でもこの広い世界の中で、偶然か必然かはわからないけれど、自分に対して発されているメッセージがそこにあるのだから、僕らはそれを受け取り、大切に扱わなければならないのだと思う。

ところで、そのシグナルの相手が友人であったり、異性であったりしたとしよう。そして、そうやって踏み出した相手と長く付き合うことになったとしよう。

そうしたら、相手はどこかで恥ずかしそうに言うのではないだろうか。あの時に君が声をかけてくれてよかった、ありがとう、と。もしかしたらそんなことは忘れているかもしれないけれど、それならそれでいいのだと思う。でも、勇気がある方が踏み出すことで、互いが豊かに生きられるようになる。

そして、もし誰かが自分に踏み出してくれたのだとしたら、逆にそれに対して感謝をすればいいのだと思う。どうもありがとう、と。そうやって踏み出し、踏み出されることの繰り返しによって、人とのつながりは生まれ、育まれているのではないだろうか。

でも、踏み出す勇気がないことで、生まれるはずの出会いも失われてしまう。それは、あまりにもったいないことだ。たとえ踏み出してうまくいなくても、傷つくのは自分のささやかなプライドだけ。だとすれば、自分のためにも、そして相手のためにも、勇気を持ってシグナルの方へと踏み出すべきだと僕は思う。

師を見つける

そうしたシグナルの発し手としての「師」という存在を語らないわけにはいかない。

僕はこれまでの人生の中で読書を通じて先人に多くのことを教えてもらってきた。その一方で、学校の先生から学ぶことはとても少なかった。

その理由としては、学びたいと思える先生が少なかったというのが正直なところなのだけれど、その一方で、いま思えばそれは僕の性格に起因していたとも思う。「先生」というだけでつまらない人間に思えて、斜に構えて授業をまともに聞こうともしていなかった。

ところが、大学4年の時にある授業がおもしろいと友人から勧められ、はじめて授業に「もぐる」という経験をしたことで僕の考えは一変した。その先生には公私ともども多くを教えてもらい、その授業を通じて出会った人たちは大切な友人になった。

その講義が人気授業で抽選制だったこともあり、僕は正式に科目登録をすることのないまま、三年間、毎週欠かさず出席した。結局、その授業からは一単位ももらわなかったが、大学卒業のために履修した他のすべての授業を足したよりも、その授業ひとつから多くのことを学んだと思う。

本から学べることは多いが、生身の先生からしか学べないこともある。そうした出会いを通じて自分の世界は大きく広がり、それによって本から学ぶことも増えていく。

こうした経験を経て思うことは、どんな学校にだって一人か二人くらいは自分が尊敬できる先生はいるということ。そして、そうした先生は必ずシグナルを発している。

以前の僕は「大学の授業はクソだ」と盛んに言っていたし、今も基本的にその考え方に変わりはない。だが、だからといってすべての先生がダメと言い切るもの間違いだろう。

ひとくくりに馬鹿にするのではなく、自分がシグナルを感じる先生を探して、見つけたら一步踏み出してみる。もし、僕がそうした経験を大学生生活の当初からしていれば、おそらく大学との関わり方も、もう少し違っていたと思う。

人としては面白いんだけど授業が下手だと感じるのなら、一緒になって授業を盛り上げるくらいのつもりで接してみたらいい。そうやって積極的に参加することで、ただ受動的に授業を聞き流しているよりも、その授業から学べるものは飛躍的に増えるはずだ。

疑問に思ったことがあれば質問しにいき、もっと深く話を聞きたければ時間をつくって話をしてもらおう。時にはコーヒーやビールをご馳走になることもあるだろう。

そうやって先生と関わり深く接していく中で、「師」と呼べる存在と出会うことがある。あるいは、今まで先生だった人が、ある時に「師」と思える存在にふっと変わることがある。

そのような「師」と出会い、その人から学ぶことができれば、単なる知識を超えて多くのことを学ぶことができる。

単なる知識だけを獲得するならば、本やインターネットで代用できる。でも、このような形で「師」と出会うことでしか学び取れないものは確かに存在する。本やインターネットで情報を発信していて、「先生」の端くれでもある僕の実感として、自信を持って言える。

これは幸せな経験であり、すべての学び手が得るべきものだと思うのだけれど、ふつうに学校に通っているだけではそのような人とはなかなか出会えない。

だから「師」は自分から探しにいかなくちゃいけない。そして強く求めれば「師」には必ず出会うことができる。もし出会えていないとしたら、それは出会いたいという想いや行動が足りていないだけだ。

「気になるんだ」と「教えてください」

ある人からシグナルが送られてくる。その時、シグナルの方へ勇気を出して一步を踏み出したとしよう。

では、その時に何を話せばいいのか。その答えはない。すると、踏み出しかけた足が止まってしまう。そしてジリジリと下がってしまう。

一步踏み出すと覚悟を決めても、いつだって弱い自分が頭をもたげてくる。嫌われたらどうしよう、変なやつだと思われるんじゃないか、なんて。そして踏み出さなくていい言い訳をたくさん並べて、仕方なかったんだ、と済まそうとする自分。

ほんとうにそれでいいのか？ いいわけがない。

だから踏み出すんだ。なにを話すのかはその後で考えればいい。シグナルを感じたのは事実なのだから、そのことを素直に伝えればいいのだ。

それは、友人なら「気になるんだ」という態度で臨めばいいし、先生になら「教えてください」と言えばいい。

どんなことが気になったのか、どんなことを教えてほしいのか。それも自分の力の及ぶ限りで語ればいい。そうすれば相手は言葉を返してくれるはず。相手の口から言葉が生まれたら、それを頼りに話を深めていけばいい。

でも、恥ずかしさ、つまり「相対的なプライド」が先にきてしまうと、「気になるんだ」「教えてください」といった素直な態度がとれない。そして相手に壁を作ってしまう、せつかくの踏み出しが無駄になってしまう。

慣れないうちは一步踏み出そうとすると、自分を守る防衛本能が働いて、自然と壁を作ってしまう。失敗した時のことを考えて、自分の本心を潔く伝えることができない。でも、こちらが壁を作ってしまったら、相手もこちらに踏み出すことができない。せつかくのシグナルが通い合わなくなってしまう。

だから言葉も表情も態度もすべてをつかって、全身で「気になるんだ」「教えてください」という気持ちをストレートに伝えればいいのだ。もっと平たく言えば「あなたが好きだ」「あなたから学びたい」と相手に自分自身を投げ出してしまおうんだ。

「私はあなたが好きじゃない」「お前になんか教えたくない」という反応が返ってくると思うだろうか。そういうことはゼロじゃない。相手に自分を投げ出した分だけ、そうやって返ってきた時に心は傷つく。

でも、傷つくのは「相対的なプライド」だけじゃないか。「絶対的なプライド」はむしろ満たされるはずだ。

悔しいと思うかもしれない。なんてバカなことをしたと思うかもしれない。だとしても、それが自分の本心なのだから、それに従ったことを責めるべきではない。

伝え方がまずかったのかもしれない。あるいは受け取ったシグナルが間違っていたのかもしれない。ならば、それらを改善して、次なるシグナルに備えればいいのだ。

実際には、そうやって傷つくことは思ったよりも少ない。自分から素直に投げ出せば、相手もニコッと返してくれることがほとんどなのだ。

話しかけた相手は、きっと自分に興味を持ってくれる。そこから新しい関係性が生まれるだろう。教えてくださいと伝えた先生は、喜んで自分の知る限りのことを伝えようとしてくれるはずだ。

嘘だと思えば、まずは身近なところからやったらいい。コンビニの店員が丁寧に接客していたら「ありがとう」と目を見て言う。美味しい定食を食べたらおかみさんに「おいしかったです、ごちそうさまでした」と笑顔で言う。

相手も、間違いなく笑顔で頷き返してくれるはずだ。もしかしたら、定食屋のおばちゃんはおまけに飴玉くらいつけてくれるかもしれない。それと同じことだ。

一步踏み出すというのは決して大げさなことばかりではない。世界に対して心をひらくこと。シグナルを受け止め、そして言葉を返すこと。そうした広い意味での「コミュニケーション」をする勇気のことなのだ。

自分の心を閉ざしてしまっているのは、シグナルを受け止めることはできない。だから誰とも対話を行うことができない。それでは出会いも生まれず、学ぶこともできない。

大きなところからはじめようとしなくていい。決死の覚悟で踏み出そうとしてできないくらいなら、自分のできそうな小さな一歩から踏み出せばいい。

とにかく、踏み出すと覚悟するんだ。

少しずつ成功を重ねるにつれて、失敗する恐れは薄らいでいく。踏み出して得られるもの、つまり外部との「コミュニケーション」の喜びを知れば、踏み出すことは怖くなくなる。もっと素直に「気になるんだ」「教えてください」という言葉が言えるようになる。

「ビールの泡」理論

それでも、二人で話しはじめたら黙ってしまう、ということはあるだろう。

たとえば気になった人を誘ってバーで二人で飲み語っている時。なかなか話がうまくつながらなくて、最近起こった出来事とか、流行りの話をして場を持たせようとしてみるけれど、なんだか空回りする。本当に話したいのはこんなことじゃないのに。

同じように、何人か集まって話している時、意味のない会話ばかりが続いて虚しくなるという経験はないだろうか。こんなことばかり話していたいわけではないのだけれど、かといって他に何を話せばいいのかわからないから場の空気にあわせてみる。

でも、そんなことばかりしていたら疲れてしまう。だって、僕らはそんな表面的なコミュニケーションだけで満足できる生き物ではないのだから。

大学生だった頃のある日、僕はそれを相手に伝えた。そして新しくテーブルに運ばれてきたビールを眺めてこんなことを考えた。

ビールの泡の役割は液体の劣化を防ぐことだ。でも、僕らの会話はまだ表面的な泡の部分でしか行われていない。いちばん美味しい金色の液体を、飲み交わし合っていない。

それでビールをぐいっと一口飲んでから、僕は自分がふだんはあまり人に話さなかったことについて話しはじめた。自分の生い立ちや、どんなことを考えて今まで生きてきたのか。興味深そうに聞いてくれた相手は、その僕の話の踏まえた上で、とまどいながらも自分のことについて話してくれた。

ビールの酔いもあったのかもしれないけれど、その時ほど誰かと深く語り合えたと思ったことはなかった。

その後、僕は普段の人とのコミュニケーションを見渡してみると、ほとんどの会話が表面的な、ビールの「泡」の部分でしか話していないことに気がついた。誰もが自分の大切な部分、ビールの「液体」部分を守るために、とりたてて意味もないことばかり話している。

でも、いつしかそれが習慣になっていて、自分が泡の部分だけでコミュニケーションしていることを忘れてしまっている。心は深い対話を求めているから、どこかで寂しさは募っているのに、そうしたコミュニケーションができなくなってしまっているのだ。

ビールの泡と液体との理想的な割合は3 : 7とされているけれど、現実的に僕らが話す割合はせいぜい9 : 1くらいではないだろうか。人によっては10 : 0に限りなく近いかもしれない。でも、それでは本当に他者と深い関係性を築くことはできない。

シグナルを感じた相手を深いコミュニケーションをするためには、勇気を出して一步を踏み出し、泡を突き破ってビールの液体の部分を飲んでもらわなきゃいけない。そうでなければ、深いレベルでのコミュニケーションはなかなか生まれない。

そのためにはまず自分の泡を取り除くことからはじめないといけない。自分の一番美味しい部分を飲んでもらうことによって、相手もその美味しさに気がつく。

でも自分の大切な部分を語るのには勇気がある。ここでも持ち上げてくるのは、恥ずかしいとか、嫌われるんじゃないかといった自分を守る気持ちだ。ビールの泡が厚くなったように感じる。でも、その泡の底に自分の核があるのだから、それを避けて語り合うことはできない。それでは表面上の会話だけに終始してしまう。

泡の底まで踏み込むのは危険だ。やめておいたほうがいい。そうやって押し留める自分の声が聞こえる。でも、一方では本心がささやいている。この相手に自分のことを理解してほしい。そうしてもっと語り合いたい。

どちらを選ぶのかは、自分次第だ。

そして大切なのは、勇気。

苦いビールを子どもが飲めないように、そうした話は若いうちにはなかなか難しい。でも、すこしずつ成長するにつれてそうした会話ができるようになることで、深いコミュニケーションができるようになる。

あまりにも泡の部分ばかり話しすぎて、そもそも泡の底に何があったのかすら忘れてしまっている人がいる。自分がそのように感じるのであれば、そのことをそのまま相手に伝えればいい。それもまた、ひとつの泡より深い部分で話す行為なのだから。

泡より深いところで話す勇気。それは一步踏み出して人と出会った時に、さらに深く踏み込むために欠かせない。そして、そうやって泡を突き破って話すことが出来れば、師であれ友人であれ、あるいは親であれ、立場を超えて深く語り合うことができると思う。

そうした対話は、僕の人生において、かけがえのない光り輝く時間だった。

場所とインターネット

一步踏み出すのは人だけに限らない。たとえばある団体が気になった時。あるいはイベントが気になった時。何かが自分に対してシグナルを送っているのに気がつく。

理由をつけて見て見ぬふりをしてしまうことは簡単だ。行くのに時間がかかるとか、面倒くさいとか。でも、その場に踏み込むことで新しい世界がひらける。そして運命的な出会いを果たすかもしれない。

同じような日常が繰り返されているとシグナルが感じられなくなることがある。

僕が高校に通っている時には、シグナルなんてほとんど受け取れなかった。僕のシグナルを受け取る感度も、生命力も、鈍っていたのだと思う。のっぺりした毎日が続いていた当時の記憶は、ほとんどない。

あまり自分にはシグナルが送られてこないなと思ったら危険信号だ。外側への興味を失いつつあるのかもしれない。自分の生命力が減退しているのかもしれない。でも、そのままでは狭い世界に閉じ込められ、今の自分のまま変化することがなくなってしまう。

でも、たとえ感覚がにぶっていても、微弱な信号を感じることはあるはずだ。その一步が弱ったシグナルの感度を磨き、自分の人生を大きく変えることになるのかもしれない。

たとえば近くで講演会が催されていたとする。なかなかおもしろそうなテーマだけれど、今夜のテレビ番組も気になる。あるいは、わざわざ時間をかけたり電車賃を払ってまでここに行くのは面倒だ。

だから、気になっても理由をつけて、踏み出さない自分を正当化してしまう。もしかしたらそこで人生の転機に巡りあったかもしれないのに。

僕は何かのイベントに強いシグナルを感じて参加した時、行かない方がよかったなど後悔したことは一度もない。必ず、何かしら学び取れるものがあった。でも反対に「もしあのイベントに踏み出していなければ……」と思ったことは何度もある。

もしあの時、あの場所に踏み出していなければ、あの人と出会うことはなかった。あの出来事が起こることもなかった。ひいては、今の僕も存在しなかった……。

あるイベントに参加して、ただぼーっとしているだけでは踏み出しているとはいえない。そこはシグナルに満ち溢れた場所なのだ。質疑応答があるような会なら「絶対、最初に質問するんだ」という覚悟を持って臨みたい。すると座っているだけにもかかわらず、自分が壇上で話すのと同じくらい緊張する。

もちろん、他の人がいる中で自分の聞きたいことだけを聞いても仕方ない。それは直接講演者に聞きにいけばいい。だから講演者や他の聞き手にも学びがあるような意味のある良い質問を考えるわけだけれど、これはかなり難しい。でも、だからこそ集中力は高まる。結果として、たとえ質問できなかったとしても、そこに学びが生まれる。

講演会でメモも取らず、何も考えずにぼーっと聞いている人がとても多いけれど、いつも僕はもったいないな、と思う。わざわざシグナルが飛び交っている場所までやってきたのに、それを目の前にして放棄していることに気づいていないのだから。

インターネットという可能性

日常生活の中だけでは、そのようなシグナルを受け取れる場所や機会がないとすれば、現代にはインターネットがある。多くの若者にとってインターネットは身近な当たり前のものだと思うけれど、僕が思うにその可能性を十分に活かしている人はほとんどいない。

繰り返しになるが、インターネットの本質は「情報」を伝達する「距離」と「時間」を限りなくゼロに近づけたということにある。家にいながらにして世界中の情報に一瞬でアクセスできるというのは、ほんの20年前くらい前までは考えられなかったのだ。その価値を、どれだけの人が意識しているだろうか。

気になったことが浮かべば、それをサーチエンジンの検索ボックスに入力してエンターを押すだけ。その検索結果は、ある意味、すべてがシグナルを発しているということすらできる。

このように、インターネットの世界まで含めるとシグナルの数は飛躍的に増える。ただ、こうなると物理的にも、時間的にも、すべてのシグナルに踏み出すことはできない。だから現実にはその中からより強度の強いシグナルを選別して踏み出すことになる。

でも、そもそもほとんどの人はインターネットはただの暇つぶしであったり、情報を調べるツールにしか使っていない。意識的に踏み出すことはほとんどない。新しい場所へ踏み出すといっても、せいぜいグルメ情報ぐらいのもの。それではインターネットの可能性の一部しか使っていない。

会いたい人、行きたい場所、参加したいイベントなど。かぎりなくゼロに近いコストでシグナルを探することができるのだから、その中から強い強度を発しているシグナルがあれば、勇気を持って踏み出してみる。

これがインターネットと現実世界をつなげる、ということだ。インターネットはインターネット、現実には現実と分けてしまっていては、「距離」と「時間」をゼロにしてくれるインターネットの本質をまったく活かさない。

僕はインターネットが日本に生まれた直後からずっと関わってきた。だからこそより強く思うけれど、インターネットというツールは「自分は世の中のことを知っている」と勘違いさせやすい。そして、それで自己満足してしまう人を量産してもいる。

実際のところ、インターネットを通じて得られるのは単なる「情報」にすぎない。そして偏見や誤りが無数にある。そのことは現実世界に出てみないと分からないのだ。だからこそ、真偽を判断するためには自分の生身の体で世界に踏み出さなければならない。

インターネットの世界だけに安住してはいけない。僕らは現実の世界の中に生き、だからこそインターネットと現実を自由に往復できる「強さ」を持たなければならない。その「強さ」の核となるものは、一步踏み出す勇気なのだと思う。

もし一步踏み出す力さえあれば、日常生活では考えられない範囲のシグナルを受け取り、活かすことができる。強いシグナルを感じ取ったのであれば、それに踏み出すのにいくらかの手間がかかるのだとしても、現実の自分の体を動かしてそこに踏み出せばいい。

気になる人がいたら徹底的に調べた上でメールを送ってみる。おもしろそうなイベントがあれば参加申し込みをして出向いてみる。

その気になれば日本にいながらにして地球の裏側の情報までも知ることができる。興味がわかれば、チケットを手配してそこに行ける。一步踏み出す勇気さえあれば、僕らは世界中のすべてを自分のフィールドに変えることができる時代に生きているのだ。

逆に言えば、一步を踏み出す勇気があるかないかの違いだけで、とてつもなく大きな機会の差が生まれてしまう時代でもあるということだ。頭の中だけでわかったつもりになる人と、世界の豊かさを全身で味わえる人。それは現実にある隔たりだ。

人との出会いも、集団や場所との出会いも、もはやインターネットを抜きには考えられない時代になった。インターネットにはマイナスの面もあるが、意識してプラスの面を使いこなせば、かつての時代では考えられなかった生き方が可能になっている。

摩擦が個性を作り出す

なにかに向かって一步を踏み出す時、そこには必ず摩擦が生まれる。

踏み出す前には不安が。踏み出してからも葛藤が。そして、踏み出した後には失意や後悔が。そうした摩擦のことを考えるだけで踏み出すことに気後れしてしまう。その気持はよくわかる。

でも、僕は思うのだけれど、これまでの人生を振り返ってみれば、そのような摩擦こそが自分を形作ってきたのではないだろうか。それをやっている時にはしんどい、逃げたいと思っていた時。緊張してガチガチに震えた瞬間。絶望しかけた日。

その前にはいつだって一步を踏み出していたはずだ。踏み出していなければそのような摩擦を抱え込みはしないのだから。

一步を踏み出して起こる摩擦。それは、丸くてすべすべした個性のない石が、すこしずつ尖っていくのに似ている。一步を踏み出して摩擦を経験することによってはじめて、自分という個性が立ち上がってくるのだと僕は思う。

一步踏み出すことによって、自分のある部分が磨かれる。そしてそこが尖っていく。また別の場所に一步踏み出すことで、より先鋭的な自分らしさが現れる。そのようなことを繰り返すことではじめて「自分」というものがすこしずつ理解できるようになる。

それは、尖らせてみるまで分からないものなのだ。そして、一度それが尖ることによって、それは次の摩擦を生むためのきっかけとなる。

摩擦を恐れているのは、いつまでたっても平たい石のままだ。特徴も個性もない石にしかなれない。

だから、どこに一步を踏み出すのか。その踏み出した先でどのような摩擦を経験するのか。そのことに自覚的になることがとても大切なのだと思う。

それは「固有の自分を創る」という営みだ。

不安や葛藤や失意や後悔は、摩擦が起きた時に生じる「熱」なんだ。でも、そうした熱があるからこそ人生はおもしろいと言えるのではないだろうか。まったく摩擦が起きない、熱のない日々よりも、どれだけ苦しくてもその熱を感じていたいと僕は思う。

だから、摩擦が起こることを恐れてはいけない。むしろ、摩擦が生まれる瞬間こそチャンスであり、人生のおもしろさであると考えれば、ぐっと力を入れて踏み出すことができる。

摩擦を恐れずその一步を踏み出すことではじめて、今までとは違った自分になれる。そして一步踏み出すことによってはじめて、次なる一步を踏み出すことができる。

はじめの一步を踏み出さなければ、次の一步は絶対に踏み出せないのだ。もし摩擦を恐れて一步を踏み出さないとしたら、自分が見える景色はいまと変わらないままなのだ。

どれだけの歩幅と速度でその一步を踏み出すか。それによって人生という旅路は変わっていく。そして、一步を踏み出す速度や歩幅は、その経験を繰り返すことによってすこしずつ上達していく。

そうした歩みの果てに、自分固有の性質が育まれ、自分の人生という固有の物語が紡がれていく。

だからこそ、最初の一步を踏み出す勇気が人生を決めるのだ。そして、それはいつだって「いま、ここ」で踏み出せるかどうかにかかっている。

自分とは、いまこの瞬間を生きている自分だ。それはどうしようもなく中途半端な存在だ。その弱さやダメさを見つめるのは怖い。でも、それが自分なのだ。

ならば、そのどうしようもなく中途半端な自分、弱さやダメさを持った自分を引き受けるしかない。そして、歯を食いしばって摩擦の方へと一步踏み出すのだ。いま、ここで踏み出す一步が、自分の人生という物語を立ち上げるんだ。

「無限の可能性」へと踏み出す

一步を踏み出し続けていると、人生、どのように広がっていくものかはわからないものだ。でも、分からないからこそ、人生はおもしろいのではないだろうか。

決まりきったレールを歩くことだけを考えていたら、その先の人生が見通せてしまう。でも、見通せてしまう道なんて、すくなくとも僕は生きたいとは思わない。

せめて見通しが明るいならいいだろう。でも、この国に存在するレールは今後、どんどん狭くなっていく一方だ。そのレールを歩いているだけで未来にワクワクすることには限界があると僕は思う。

技術が進歩し、世界が狭まり、変化のスピードは早くなっている。そのスピードにおびえて一步を踏み出さなければ、一瞬で取り残されてしまう。

でも一步を踏み出す勇気さえ持てれば、インターネットという武器を活かして、人類史上でも最高の自由を得て、可能性を享受することができる。

僕自身は留学や長期のインターンを経験したことはないけれども、これだけ世界が物理的にも時間的にも小さくなった現代において、これからの若者は「日本だけ」を考えて生きられる時代ではないのだと思う。

それは単純に「留学しよう」「外国語を勉強しよう」という話ではない。世界全体の影響を受けざるをえないこの国において、しかしながら世界全体どこにでもいける自由を引き受け、その自由を活かして生きること。

海外に出ることをそんなに大きく考える必要はないのだと思う。街の定食屋で隣の人に声をかける勇気があれば、同じくらいの勇気で地球の裏側に飛ぶことだってできる時代に僕らは生きているのだ。

もちろん、僕らは日本に生まれ育ったことは事実だし、それは引き受けて生きて当然だ。でも、だからって自分の可能性を限定する必要はない。日本であろうと海外であろうと、自分の直感を信じて一步を踏み出せばいい。

そう思えば、なんだか暗く思っていた自分の未来に光が差し込んでくるのを感じないだろうか。気持ちが暖まってくるのに気が付かないだろうか。

世界には無限の可能性が存在する。つまらない大人が言うような言葉だけの「無限の可能性」じゃない。一步を踏み出す勇気さえあれば、世界中のどこにだって僕らはいけるんだ。そこには本物の「無限の可能性」がある。

だからこそ、自分が秘めている「無限の可能性」を信じて一步を踏み出そう。たとえ今どれだけ悲惨な状況に置かれていようとも、すべては、その一步からはじまると信じて。

四章 「ゲーム」と「物語」

すべての「山」はゲームである

二章と三章では「学び方」と「動き方」について述べたが、本章では、それらを活かした「道の切り拓き方」について書いてみたい。これは僕が十年間をどのような人生観を抱いて過ごしてきたか、とも言い換えられる。だから、僕の過去についても、いくらか踏み込んで語ることになるだろう。

キーワードは「ゲーム」と「物語」。

まずは、「ゲーム」から語ることにしよう。

僕が物事をゲームに喩えて語るとき、違和感を覚える人が時々いる。たとえば受験とゲームが似ているなどというのは何事だ、といったように。

でも、既に述べた通り様々なことはゲームと似ている。目標を立て、その達成をめざす。そのプロセスをゲームと考えることによって、目標達成の道筋がクリアになる。

戦争や政治や経営といった物事でも、それが良いことか悪いことかは別として、本質的にゲーム的であることに変わりはない。

たとえば、僕が携わってきたビジネス。

売上の拡大、シェアの増大、利益率の上昇……。すべては数字に置き換えられ、プレイヤー全員でその目標達成を目指す。そうした見方をすれば、ビジネスはゲーム以外の何者でもない。実際、そのような考え方を突き詰めた方が、一定期間内の目標達成をゴールとするビジネスであれば、より合理的な戦略になることが多い。

もちろん、ゲームによってルールや勝敗条件が違ふし、プレイヤーの能力によって攻略する方法も変わってくる。

だから、大切なのは、自分がどのようなルールのゲームをしているかを意識すること。ルールが違えば、クリアするための方法が変わる。必要なスキルも違ふし、そのスキルを身につけるための訓練方法だって考えなければならない。

でも、多くの人にはどんなゲームであるかということ意識しないまま挑戦しはじめる。たとえば、受験というゲーム化することが非常に重要で、かつシンプルなものでさえ、そのように考えて行動できる受験生はとても少ない。

自分の過去を振り返ってみた時、与えられたものをこなすだけでなく、自分でゲームのルールを考え、どのようにすれば最善の方法が取れるのかにどこまで気を配っていたらうか。

もしそうしていれば、ゴールまでの道筋がはっきり見えていたはずだ。でも実際のところ、その場その場で思い浮かんだアイデアばかりで勝負して、なんとかこなしてきたというケースがほとんどではないだろうか。

その行為はあまりに無防備な行為であるように思える。それは丸腰でエベレストに挑むようなものであり、振り返りにあつて当然だ。

多くの受験生を見てきたが、ゲーム的に物事を考える人はとても少ない。ゲーム的には最もシンプルな受験ですらそうであれば、その後の人生で出くわす様々なゲームは、おそらくそれ以上に場当たりの的に対処するのではないだろうか。

逆に、そのゲームの攻略法を見つければ後はそれを淡々とこなしていくだけだ。どんな高い山にだって登り切るルートがあるのと同じように、あらゆるゲームにはそれに適した攻略法がある。

攻略本を見ながらゲームをするのが嫌いだ、という人がいる。でも、そんな心配をする必要はない。僕もRPGの攻略本を見たら楽しくないと思うタイプだけれども、現実の人生の目標をゲームだと考えてつまらなくなっことは一度もない。

なぜなら、人生において挑戦するゲームは、人が作ったゲームよりもずっと難しく、変化に富んでいるからだ。そんな簡単にクリアできないし、飽きもしない。

たしかに、僕がもう一度受験を繰り返せと言われたらゲームとしてのおもしろさは感じにくいかもしれない。

でも、現実にはそんなことはしない。僕は常に新しいゲームを求めて前に進んでいる。誰だってそうだろう。だから、いつだって目の前にあるのは未知のゲームであり、その攻略法を考えたって決してすぐに出てくるものではない。

そのように複雑なゲームであるとしても、攻略法が確かに存在すると信じることによって、それを探し求める意識が働く。そして、実際にそれを求めれば、すこしずつでも明らかになっていくのだ。

そのようにして高い目標を乗り越えるための方法が明確になっていくのは興奮したし、それをこなすことで確実に目標に近づけるという瞬間は楽しい。

僕は受験にかかわりはじめて10年が経つ。ではそのゲームに飽きたのかといえば、必ずしもそんなことはない。

僕がもう一度受験をしたいという気持ちにはならないけれど、自分が受験をすることと、塾生に受験指導をすることはまったく違う。それに、塾生によっても指導すべきことはまるで変わる。だから僕は飽きることなく塾生の受験指導に挑むことができる。

思うに、僕が教育というものに惹かれる理由のひとつは、それが正しい答えのない複雑極まりないゲームだからかもしれない。どんなテレビゲームよりも難しい。

でも、だからこそ挑戦しがいがある。

ゲームをはじめ

ゲームをクリアするために最初にやらなければならないことは、ゲームに挑戦する決意を固めることだ。

あたりまえに聞こえるかもしれない。たとえば受験生はみんな挑戦すると決めているのではないか、と。

でも実際のところ、本気で挑戦しようと思覚悟を決めている人はすくない。春を過ぎ、夏を過ぎても、受験生のふりをして、受験というゲームをクリアするのだと覚悟を持っていない人が多い。

そしてようやく肌寒くなってきた頃になって追い立てられるように重い腰を上げる。仕方がない、やるか、と。だが、そんな状況では力も出ない。そもそも手遅れであることが多い。

ゲームはすでにはじまっているのに、実はゲームに参加していない。当人は参加しているつもりだけれども、それは見せかけにすぎない。そんな受験生が多いのだ。

現実には身の回りには挑戦しようと思うゲーム以外の要素がたくさんあふれている。だから、ついそちらに気を取られて、自分がゲームに参加していることを忘れてしまう。

それは受験生ばかりでない。たとえば大学生だってそうだし、社会に出て働いていても変わらないと思う。

でも、本当にそれでいいのだろうか。

自分が定めた目標もないままに日々を過ごしているうちに、時間はどんどん過ぎていってしまう。なにかに気持ちが燃えることもなく、ただぼんやりと月日を重ねていく。

長い人生の中で、そのような時期があってもいいとは思いう。でも、挑戦する決意を固めなければ、ゲームはいつまで経ってもはじまらない。目標は永遠に達成されることがない。すくなくとも、僕はそのような人生を送りたくはない。

もし何らかの目標に挑み、達成する人生を求めるのであれば、ゲームに挑戦する決意を固めなければならない。

受験は初心者向けのゲーム

僕が受験は簡単なゲームだという理由のひとつは、目標を定めることがたやすいからだ。志望校を決めるだけで、何を達成すればいいのか、すなわち必要な科目と合格点が明らかになる。しかも、基本的にはその際に考えなければならないのは自分のことだけだ。

たとえば、会社の経営はそれほど簡単なゲームではない。自分以外の事も考えなければならない。そのためには、すくなくとも自分のことくらいはある程度こなせなければ話にならない。

また、目標を決めるのも一筋縄ではいかない。その目標は会社経営上、合理的でなければならないし、共に働く人々がそれに共感したり納得する目標でなければならない。

その上で、たとえば僕が1万人の塾生を集めることを目標に掲げ、共に働く人びとが理解してくれたとしても、それで終わりではない。むしろ、ここからがはじまりだ。

目標を達成するための方法は、自分一人で決めることはできない。共に働く人々の意見を聞きながら、彼らがモチベーションを高く働けるように考えなければ、実りのあるものにはならない。どのようにして合意を形成にしていくのか。これも難しい問題だ。

1万人を集めるにはどんな方法があるだろう。ただ宣伝しても人は集まらない。では指導者を育て、よい指導をすればいいのか。でも、数千人のよい指導者を育て、維持していくのはお金もかかるし、たとえお金が潤沢にあっても、それほど簡単なことではない。

また、それだけの数の塾生を維持するためにはどうすればいいのだろう。1万人の塾生と数千人の指導者ともなると、事務作業だけでも膨大なものになる。それに、どうすればそのような人がやる気を出して一緒に頑張ってくれるのだろう。そもそも、そんなに人数が増えたらシステム化してしまい、つまらない塾になってしまうのではないか。

考えることは無限にある、複雑なゲームだ。そのようなゲームを、自分だけでなく、共に働く人や、関係者や、顧客となる人に理解してもらいながら進めるのは、受験と比べてはるかに難しい。

それでもなおクリアすべき道はどこかにあると信じることに、それが物事をゲーム的に考えるということだ。そうすることによって、目標を決め、それをどのように達成すればいいのかを考え始め、前に進むことができる。

おそらく、生きていく上で何かを達成しようと思えば複雑なゲームに飛び込まざるをえない。受験というルールが比較的シンプルなゲームは、そのための基礎力をつけるためには格好の修行場だと思う。

目標の達成へ向けて頑張ることが難しいと思っている人が多い。でも、頑張ることなんて実は難しくないんだ。だって、ゲームなんだから。

テレビゲームをクリアするのが難しいという人はいない。本当に難しいのは目標をはっきりと定めること。つまりゲームを見つけて参加することなんだ。そして、そのための方法については前章までに書いてきたので、ここでは繰り返さない。

ピンとくる情報を集めながら、その方向へ一歩ずつ前に進んでいけば、いつか自分がやりたいと思えるゲームは見つかる。それを見つけたら、挑戦する決意を固めるのだ。

ルールを知り己を知れば百戦危うからず

とはいえ、完全に明確な目標は定まらないことが多い。たとえば受験にしても、いきなり志望校をひとつに絞り込めないこともあるだろう。

それでも漠然といくつかの候補を出すことはできるはずだ。それらを目標として考えて、そのための方法を調べていくうちに、すこしずつ目標は明確になってくる。

目標が決まり、ゲームがはじまれば、それを達成するための手段を考えることができるようになる。クリアする方法を考えること、それもまたゲームの一部だ。

簡単なゲームであれば、テレビゲームのような攻略本もある。一方、難しいゲームであればそれをクリアするためのヒントをあらゆる方法を使って見つけ出す必要がある。

ただ、いずれにしても目標が決まれば、それがどのようなゲームであり、どうすればクリアできるのか。その情報を集めはじめることができる。その主な方法は読書、インターネット、そして人の3つだった。

読書は有力なツールだ。この時の読書は先に述べた「自分を立ち上げるための読書」ではなく、攻略する方法を考える情報収集だ。情報収集の読書は、自分を立ち上げるための読書と比べればずっとたやすい。

書籍の情報がすべて正しいというわけではないが、必要なヒントの詰まった本を何冊か買って読むだけでも、ひと通りのゲームのルールやクリアするための方法は把握できるはずだ。そのために実際に大きな書店まで足を運んでどのような本があるのかを見比べてみるのもいい。

どのような本を読むべきかが分からなければ、インターネットの情報も参考になる。ただ、どんなことを調べるかにもよるけれども、インターネットの情報は書籍に比べると断片的であり、かつ玉石混交だ。

だから基本的には読書を情報収集の中心に据えて、インターネットはそのためのツールとして考えるのがいいだろう。

また、同じようなゲームをした経験のある人に話を聞くのも役に立つ。そうした人を見つけるためにインターネットを使ってもいいだろう。ただ、たとえば大学受験で同じ志望校を目指すにしても、スタートする地点や環境は異なるし、性格や好みも違うから、経験者のやり方が自分にあてはまることは少ない。

むしろ、ある特定の誰かを盲信すると、どこかですこしでも疑念が生まれた時に、それまでやってきたことすべてが間違っているように思える。その先も正しい方法でやっている自信がなくなる。

だからゲームをクリアするために人の話を聞くのはいいけれど、それはあくまで参考にするだけであり、自分で考え、決めることが欠かせない。これは人に聞くときだけでなく、読書やインターネットにおいても同様だ。

人間は弱いものだから、つい何かを信じたり頼ったりしたくなる。追い詰められていればいるほどそうなりやすい。でも、絶対的に正しい何かなんて存在しない。

最終的に信じられるのは自分で積み重ねてきたものだけだ。だからあらゆる情報を集めながら、自分というフィルターを通して、信じられるものをすこしずつ蓄えて行かなければならない。

もちろん情報収集はこれだけに限らない。たとえば映画を見て何かを得られることもあるだろうし、音楽の中にヒントが隠されていることもある。ただ、僕の経験からいって読書、インターネット、人を中心とした情報収集は必ずその柱になる。

このようにして集める情報は、大きく二つに分類することができる。ひとつは戦略であり、もうひとつは戦術である。戦略は長期的な考え方や計画で、戦術とは短期的な現場での戦い方だ。

受験でいえば、合格までの道のりを考えることが戦略であり、それを実践して日々机に向かう際に必要になるのが戦術だ。そもそも戦略が間違っていると誤った方向に進むし、戦術が正しくなければ成果は上がらない。

どんなゲームでも戦略と戦術を欠かすことはできないが、これらを最初から完璧なものを作り上げることもできない。だから先の3つを基本として情報収集を重ねながら実践していく他に道はない。

ゲームへの没頭と才能

方法論ばかり研究して実践がまったく伴わない人がある。ゲームの攻略法を調べることで、あたかも自分がクリアできるかのような錯覚を持つが、実践できなければまったく意味がない。

戦略や戦術がゼロだと何をすればいいのかも分からない。そうした状況ではモチベーションが保てない。いきなり登りはじめて大失敗したら挫折してしまいかねない。だからはじめにクリアするための方法論を考える意味はあるけれど、調べ続けても実力がつくわけではない。

実践したことのない戦略や戦術は机上の空論に過ぎない。だから、大切なのはいま考えている方法は100%間違っているけれど、正しい答えなどいきなり見つからないと腹をくくり、現時点で自分がベストだと考えた戦略や戦術を実行すること。

そうして自分の誤りを見つけたらその都度改善していけば、ゲームの腕前は確実に上達していく。

ゲームの腕前を上げるのに最も大切なことはと問われたら、僕は迷わず「没頭」と答える。ゲームの上達は才能の問題ではない。才能があるからゲームがうまくなるわけではなくて、没頭して量をこなすから上達するのだ。

ゲームをクリアする方法が「質」だとすれば、やりこむのは「量」にあたる。「量」をこなすことによって「質」も改善していくのだ。「量は質に転化する」と言ってもいい。

僕がネットゲームに一番のめり込んでいた時は1日15時間以上やりこむ日々を数ヶ月間続けた。受験でも同じことをした。だからどちらにおいても方法に磨きがかかったし、結果として実力もついた。経営や仕事だって同じだ。

やれば、できる。わかりやすく言えばそういうことだ。できないのは、やっていないだけだ。その事実から目をそらしては、どんなゲームでも勝つことはできない。

「あいつは才能があるから」という言うことがあるけれど、それは言い訳にすぎない。やるか、やらないか。ゲームに必要なことは、突き詰めていけばその一点に尽きる。

一章で述べた通り現代には「学習の高速道路」が存在する。本気で上達しようとするれば、どんなゲームであれ、今までの常識では考えられない速度で上達できる時代に僕らは生きているのだ。

それでもまだ「自分には才能がない」と言い訳をするのだろうか？

もし才能について論じるとすれば、一章で挙げた将棋の方が適切だと僕は思う。

将棋のプロ棋士は人生を賭けて没頭している。多くの棋士が幼い頃から朝から晩まで将棋漬けのような生活をしている。そのレベルで、ほとんど同じレベルの努力をしても、勝者と敗者の力の差は明確に顕れる。

24時間、それも人生を賭けるレベルでのゲームにおいては確かに才能が関係してくるのかもしれない。羽生善治はそれを「高速道路の先にある大渋滞」と表現した。その大渋滞の中での勝負を志した人が、どれだけ努力してもたどりつけない場所があった時に、才能という言葉がなければ救われない。

でも、ほとんどの人は大渋滞にたどりつかないどころか、高速道路に乗ってすらいらないのではないだろうか。たとえば受験においては「大渋滞」というような状況はない。

才能という言葉は、使うとしても世界一を決めるような時だけに使うことを許されるのだと僕は思う。そこまでたどり着いていないとすれば努力が足りないに過ぎない。本気で何かに挑戦する前に才能という言い訳を持ち出すのは、自分の可能性に対する冒涇だ。

24時間すべてがゲーム

あるゲームに本気で挑戦する覚悟をすると、生きることはそのゲームをクリアすることと同義になる。すなわち、そのゲームの世界にプレイヤーとして生活のすべてを捧げるということだ。

1日の時間は24時間と限られている。それがゲームのプレイヤーである僕らにとっての「資源」であり、その資源をどのように使うのかがゲームに挑戦することだと言える。

24時間をどのように過ごすかが、そのままゲームの成果を決める。だから大切なのは、ゲームをクリアしたいのであれば、その24時間を挑戦すると決めたゲームをクリアするのにふさわしい過ごし方にあること。

24時間すべてをゲームにクリアに捧げると言っても、僕らは休憩や睡眠が必要だし、ほかにも現実的にやらなければならないことはたくさんある。誤解しないでほしいのだけれど、その目標を達成するための時間以外が無駄であるということではない。

ゲームをクリアするためには休むことも必要だ。むしろ、休憩をふくめたすべての時間が、目標達成とつながっていると考えるべきだと思う。つまり、24時間の過ごし方すべてがゲームであるということだ。

そのような覚悟を持ってゲームに挑み、没頭する。より高い目標であればあるほど、それだけ没頭しなければならない。学習の高速道路を活かして攻略する方法を考え、没頭することによって目標の達成を目指す。

「質」を高める意識を持ちながら、膨大な「量」をこなす。結果として「質」はさらに高まっていき、質と量の高まりの相乗効果によって、圧倒的な差をつけることを目指す。

そのように24時間すべてをゲームに捧げたとしても、しかし、人生において出会うゲームは必ず勝てるというわけではない。すくなくとも僕の実感としては、勝利よりも敗北の数の方が多かった。テレビゲームのように簡単にクリアできはしなかった。

たとえば1年間、毎日欠かさず勉強を頑張った受験生が必ず第一志望に受かるわけではない。どれだけ強く願ったとしても、たった1点の差で不合格となることは十分にありうる。そして、そういうケースを僕はたくさん見てきた。それが僕らの生きる現実世界だ。

そもそも最後まで挑戦できずに、何らかの事情によってゲームが途中で強制的に中断させられることさえある。そのようなものを含めて、どのようなゲームでも終わりはやってくる。そして目標は達成されるか、達成されないかのどちらかだ。

そして多くの人はこのように考えている。勝てば天国、負ければ地獄。

でも、こういう風に考えることはできないだろうか。

ゲームは、あくまでゲームに過ぎない、と。

ゲームをリセットする

たとえば、受験は人生における大きなゲームのひとつだ。

たしかに受験で得られるものは小さくない。データを見れば大学によって就職先は違う。「いい大学」に行けば自尊心は満たされるし、他人を自分を違った目で見ってくれるかもしれない。そのような大学に受ければ家族も誇らしいだろう。

でもその一方、受験というゲームの結果は一生を約束するわけではない。それどころか、受験というゲームの勝利にこだわっていては一生を台無しにしかねないと僕は思う。

世の中では「いい大学でも安心できない」ということが言われはじめてるように思える。それを受験生も敏感に感じ取っているけれど、それ以外にどうすればいいのかわからないせいで、結局のところ学歴というモノサシ以外をもつことができないでいる。

僕はたくさんの受験生を見てきた。そして、彼らが受験の勝ち負けによって自分の価値を決めていることを感じている。だが、それは僕にはあまりに悲しい自分の価値の決め方だと思う。

一人ひとりの人間は偏差値のランキングによって決まるわけではない。そんな当たり前のことを受験生は教えられていない。それどころか親も学校も塾も、教育システムも、果てはインターネットの情報まで、そのような価値観を伝えていると思う。

ゲームに勝利したなら喜びを味わったらいい。負けたら悔しがればいい。でもゲームはゲームに過ぎない。それによって人間の価値が決まるわけではない。同じように、敗北したってそれで人生が終わるわけでもない。

ゲームの成否にはさまざまな要素が関わっている。

あるゲームに挑むと決めた時点で、人それぞれスタート地点は異なる。それまで勉強した経験がほとんどない人と、小学校から塾通いしてきた人とでは、受験勉強というゲームにおける巧拙が生まれるのは当たり前だ。

一見すると同じ「偏差値30」のスタートでも、結果として伸び方が大きく違う二人がいる際には、たいていの場合、そうした潜在的な経験の違いから生まれている。

学習の高速道路があるといっても、受験においては全員が頑張っているのだから、よほどの覚悟で没頭しなければ圧倒的な伸びは難しい。現実には、望みどおりの目標まで届かないこともあるだろう。

でも人生においてゲームは続く。あきらめない限り、死ぬまでゲームは繰り返される。

日本の大学受験などという狭いゲームの結果にこだわっていたら、もっと大きなゲームに挑戦する意欲がわかない。勝利に満足した時点で、成長は止まってしまう。

これは大学受験に限らない。

ゲームなのだから、勝っても負けてもリセットする。そして、次のゲームを探しに行く。変化が激しく、何が正しいのかが分からないこの時代において、そのような考え方が生き延びていく上で必要だろう。

それは単に「そうあってほしい」と僕が願っているわけではない。現実には、そうなのだ。ひとつのゲームが終われば、ゲームのルールは変わる。いつまでの過去のゲームの結果を引きずっている人間は新しいゲームに挑戦できない。

人生ではたくさんのゲームに遭遇する。目標を立てたなら全力で挑戦すればいい。でも、そのひとつひとつの結果にこだわるよりも、自分が遊ぶことのできるゲームを探して、それを終えたならまた新しいゲームに挑めばいいのではないだろうか。

物語としての人生

挑戦すべきゲームを見つけたら、目標を達成するために全力で取り組む。そうやってゲームに没頭している時間は、僕にとって最も充実した日々だった。高校をやめて何をするでもなくただ退屈していた時と比べれば、自分が生きているという実感が持てた。

勝っても負けても、ゲームを終えたら後ろは振り返らないようにしてきた。新しいゲームを求めて前に進み、しかるべきゲームを見つけたらそのゲームに没頭してきた。

そうした目標に向かって挑戦するゲームをいくつも繰り返してきた自分の人生を振り返ってみると、ひとつの「物語」であるように思える。

小さなゲームから大きなゲームまで、たくさんあった。うまくいくこともあれば、いけないこともあった。でも、そのようにして進んできた物語を読み返せば、なかなかおもしろかったな、と思う。どんな映画やマンガにも負けることのない濃密なストーリーがあり、時間があつた。

さまざまなゲームに全力で身を投じることによって僕は多くのことを学び、身につけてきた。それは物語の主人公がさまざまな困難を経てすこしずつ成長していくのと同じだった。

また、その物語の途中では一癖も二癖もあるおもしろい連中にたくさん出会うことができた。彼らと時間を過ごすことができたのはかけがえのない経験だ。

もちろん、物語だから一筋縄ではいかない。もうダメかと諦めそうになるくらい絶望的なこともあつた。でも、後からそれを思い出すと、その場面があつたからこそ今の自分があると思う。

絶望的な瞬間はいくつもあつた。中学や高校を辞めた時には自分の人生はもう終わったと思った。初恋に敗れた時には生きている意味なんてないと本気で思った。でも、そのすべてが僕を作ってくれた。

人生はひとつの物語だと考えると、どんなひどい状況に遭遇しても、それは未来へ続く物語の前フリに過ぎないのだと思うことができる。その状況を乗り越えて、より強靱にな

った自分を想像すれば、こんなところでへこたれられないと思い、再び挑戦する意欲がわいてくる。

逆に、どんな大きなゲームに勝利しても、それがゴールではないということも分かる。あるゲームをクリアしたらその分だけ、次にはさらに難しいゲームが待っている。再び打ちのめされるかもしれない。でも、それだって物語の前フリなのだと思えば、それでも構わないという気持ちで挑戦できる。

10年前、このままずっと家でネットゲームばかりしているのかもしれないと想像して恐怖していた僕が、今こうして本の原稿を書くためにパソコンに向かっているなんて想像すらしなかった。

でも、その間に僕が経験したすべての時間、挑戦したゲームや出会った人たちのどれ一つが欠けても今の自分はなかった。それらすべてが織り重なるようにして僕の人生という物語は立ち上がってきた。どんなささやかなことでも、つながっているのだと思う。

それに出会った時には、そのゲームの意味は分からない。とても小さなことで、それが後々何かの役に立つなんて考えない。理由はないけれど、それをやりたいからやる。

思えば、僕の大学受験もそのようなことからはじまっていた気がする。

大学受験の前に僕がしていたこと

18歳になる歳の夏。高校を中退したままの僕は、これからの人生をどうしようかという焦りを抱えつつ、ぼんやりと考えていた。

同い年の高校3年生がどんな生活を送っているのかは知らなかったけれど、小説やマンガの中で知る限りでは、みんな青春を謳歌しているようだ。それに比べて僕は……。

僕は、学校に行かなくなっていて外にもほとんど出なくなっていた。行きたい場所もなかったし、知り合いに会いたくもなかった。落ちぶれた自分の姿など晒したくない。携帯も持っていなかったから、連絡できる友だちもほとんどいなかった。もちろん一緒に遊びにいける女の子がいるはずもない。

一度しかない人生において、まさに青春と呼ぶべき18歳の夏を自分は無為に消費しつつある。そのことに気がつくとう絶望的な気持ちになり、いてもたってもいられなくなった。何かしなければ。

ぱっとしない自分の人生だけれど、せめて18歳の夏というこの時に何かを起こそう。

人生をゼロからやり直すために日本を飛び出て海外に留学できないかと調べてみたが、高校中退した僕が選べる選択肢は限られていた。語学学校のようなものならあったけれど、そこに行ったからといって大したものが見られるわけでもない気がした。

若さもあって、とにかく大きなことがしたいという気持ちがあった。そして突拍子もなく思いついた。

そうだ、世界一になろう。

世界一ならなんでもいい。それでギネスブックを調べてみたが、申請は大変そうだし、意外にもどれもハードルが高かった。世界一になるのはおろか、日本一にだって僕がなれそうなことは見当たらなかった。

でも、18歳の夏なのだ。ここで何かを刻まなければ、僕の人生はなにも起こらないまま終わってしまうのではないか。

訳もなく不安がこみ上げてきて、諦めきれなくてインターネットで「日本一」というキーワードを頼りに調べていたら、ふと「富士山」という文字が見えた。

富士山か。

それに登るくらい誰にでもできるけれど、高校中退のまま引きこもっている18歳の男が夏に富士山に登るとするのは悪くないと思った。

そしてその場で決めた。富士山に登ろう。たいしたことじゃないけれど、今の僕にできる日本一といえばそれくらいのもんだろう。

富士山で感じたこと

一人で登るのはつまらない気がしたので、ネットゲームを一緒にやっていた数少ない地元友人を誘った。渋る友人を説得して、その週末にすぐ出発することに決めた。

インターネットで登り方を調べて、必要な服装を準備した。母親はあんたみたいに運動もしてない奴が登れるのかね、と訝しげに僕を眺めていた。だが、いくら引きこもって運動をしていなくても、健康な18歳の若者の体にはエネルギーが満ちている。なにより、挑戦すべき目標がそこにはあった。

夏の富士登山は、命がけで登る冬山と比べればハイキングのようなものだ。とはいえ、4000m近い山に登るのだ。途中で高山病にかかる危険性もある。せっかくの18歳の夏の挑戦を、そんなへまで台無しにしたくない。

はじめての登山なので十分な下調べをして、登頂プランも立てた上で登りはじめた。予約しておいた八合目での休憩所まで、なんの苦労もなかった。そこで食べたハンバーグの味は忘れられない。そのまま仮眠をとり、数時間後、頂上を目指して出発した。体力は消耗したけれど、拍子抜けするくらいあっけなく山頂についた。

僕は高校に入学してからはゲームばかりしていたので、その頃の約3年間の実生活の記憶はほとんどない。

でも、この時に感じた高揚感、そして山頂から眺めた「ご来光」は忘れられない。日の出ごときで感動するような性格ではないけれど、目標を決め、一步ずつ近づいていき、ゴールにたどりついた時に得られる達成感を、ひさしぶりに味わっていた。

富士山に登るくらい誰にだってできる。驚くようなことじゃない。

でもゲームを除けば何ひとつ達成することなく高校を辞めて、自尊心がズタボロになっていた僕にとって、このささやかな達成は大きな自信になった。

大学受験をしようと決めた時、迷うことなく偏差値表で一番上にある大学を目指したのは、この経験と無関係ではないと思う。この時に得た自信がなければ、受験勉強の途中で心が揺らいだ時にそのまま折れていたかもしれない。

もちろん、それは分からないけれど、でも18歳の夏に富士山に登れてよかったと心から思う。

富士登山という小さな挑戦は、他人からすればどうでもいいことかもしれない。でも、僕にとってはとても大事な一步だったのだ。この小さな一步がなければ、その後の僕の様々な挑戦もありえなかった。

成功者のエピソードを聞く時、その成功時の苦労や秘訣ばかりがクローズアップされる。僕自身、仕事柄そのようなことを話すこともある。でも、ほんとうに大事なことはそこにはないと思う。その手前の、もっと小さなことの積み重ね。そこにこそ成功譚が生まれた種がある。

いきなり大きな挑戦をしようとしても難しい。でも、どんな壮大な冒険物語だって、はじめは小さな一步からはじまるのだ。それを踏み出す勇気がなければ、その後の冒険物語は生まれることはない。

だからこそ大切なのは、目の前の一步を踏み出すこと。そして見つけた山がどんな小さなものであれ、それに全力で登ること。それを繰り返したその果てに、ようやく大きな山に挑戦する機会がやってくる。

一見するとわからないけれど、どんな偉大な人でもその道をたどっていると思う。

僕の失敗談① 疑念

とはいえ、一步踏み出して挑戦しても、それが成功するとは限らない。それが物語のおもしろいところでもあり、苦しいところでもある。

二章では塾を会社化したところまでを語った。その頃から三年以上の月日が流れた。その間に僕が経験したことを語ろう。

メディアへの露出が増えると認知度は高まり、急激に塾生は増えていった。塾生を増やすことがゲームの目的だとすれば、それは小さくとも成功と言っていい達成だった。なにせ初年度には30人にも満たなかった塾生が、3年目には300人を超えていたのだ。

その頃の僕は「3年後に塾生を1万人」にすることを目標に掲げていた。1万人の塾生を指導するには少なくとも千人の指導スタッフが必要だが、それだけの人数の大学生と受験生が集まり、ひとつの志を持てば日本の教育を変えられると信じていた。そして、このペースで行けば達成できる可能性はあると感じていた。

その一方で、僕は疑念を抱いていた。それは受験指導は本当に教育なのかという根本的な問題だった。規模が大きくなればなるほど、この疑問は膨らんでいった。

受験塾の目的は難関大学に合格させること、その一点に尽きる。塾生もそれを求めて入塾してくる。だから難関大学の合格の意味を伝え、モチベーションを高め、そこに到達することを応援することになる。

それは受験塾としては普通のことだ。でも、僕にはこの普通が正しいとは思えなくなっていた。そのような塾や予備校が無数にあることによって傷つき立ち直れなくなる若者がどれだけいるのかを実感していたからだ。

難関大学への合格を煽られ、家族からも期待された受験生は必死で勉強する。しかし難関大学の受験者数と合格者数を比べれば明らかだけれども、第一志望に合格する受験生よりも、そうでない受験生の方が圧倒的に多い。

不合格となった受験生が持たなければならない心の傷を考えると、果たして僕のやっていることが正しいのかわからなくなってきた。それに希望する大学に受かったからといって、将来が約束されるわけではない。現に僕は大学の授業があまりに無意味だと感じていたのだ。

そう思いながらも、ただひたすらに難関大学への入学を応援する。それによって「人生が変わった」と言ってくれた塾生もたくさんいた。でも、もっと広い視点で見た時に、結

局のところ僕がやっていることは「いい大学に入ればいい人生が待っている」という主張に加担しているだけではないのかと思った。

そして、受験が終われば不合格者が生まれる。そこまで第一志望への合格を励ましていた僕は、不合格となった塾生に語る言葉を持っていなかった。「その先の大学で頑張れよ」と伝えるのが精一杯だった。

塾生は増やしたかった。でも、塾生を増やす意義を僕は見いだせなくなっていた。自分のやっていることが正しいのかどうか分からなくなっていたから。

僕の失敗談② 転換

そして2011年2月。

仲間と徹底的に話し合った上で、僕らは受験塾という看板を下ろすことに決めた。自分たちが本当にやるべきだと思える新しい目的や目標に切り替えて、新しいスタートを切ることにした。これまでのゲームをやめて、新しいゲームに取り掛かったのだ。

新しい目標は、単純に塾生を増やすビジネスにするのではなく、社会を変革する教育事業を創り出すこと。「いい大学に受ければいい」という価値観と真っ向から対立する教育をして、社会に認めさせようと考えた。

その詳細についてここで述べることはしない。ただ、いま振り返れば勝ち目のない勝負だった。スタートした直後に震災が起これ、最も行動しなければならないその年の春に身動きがとれなくなった。様々な問題が同時に起きた。塾生数も激減した。

成功している間、組織の問題点は隠れて見えなくなる。でも、失敗に転じるとそれが一気に吹き出す。経営状況は悪化し、なすすべもなく組織は瞬く間に壊れていった。

結果として、7名いた社員は1年も経たないうちに僕1人になった。

塾生が減ることで事業が縮小したのもつらかった。成功から失敗のどん底へ。でも、それ以上につらかったのは、僕を信頼してくれていた仲間を裏切ることになったことだった。共に夢を見ていた仲間が去っていくことほどキツイことはない。

だが、すべての責任は無謀なゲームに挑戦した僕にあった。当然、誰にも文句を言うことはできない。その分だけ、やりきれない気持ちになった。

28歳にもなってこんな苦しみを味わうのかと思うくらいしんどかった。今が人生で一番しんどい時のはずだと願いながら耐えるほど、正直、死にそうだった。なるほど、これが事業で失敗するということか。

唯一の救いは、現場で指導にあたるアルバイトのスタッフが、それまでと変わらぬ情熱を持って塾生に接してくれていたことだった。組織は崩壊し、新しい塾生もほとんどこなかったけれど、おかげで指導はそれまで通り続けることができた。

そんな中で、ひさしぶりに足を止めることにした。

はじめて塾をひらいてから丸5年。その間、土日という概念もなく朝から晩まで会社経営に没頭してきた。すべての時間をそれだけに捧げてきた。だが、そのすべてが水の泡になった。精神的にも身体的にも休息が必要だった。そして僕はこれからどうするのかを考えた。

一巡して振り出しに戻る

起業というゲームに挑戦した僕は、一時的にはささやかながら勝利といってもいい結果を収めた。だが、その次に挑戦した新しいゲームにおいて完膚なきまでに敗北した。

状況は起業したばかりの頃と似たようなもので、5年を経て一巡して振り出しにもどったようにも見たが、もちろん5年前の僕とは違っていることもあった。

信念を持って踏み出したゲームで敗北したのは、悔しい。ゲームに負けることによって失うものの大きさも嫌というほど味わった。人からは敗北者のように扱われた。なんだか世界中がよそよそしくなった気がして、高校を中退した時みたいだな、と思った。

でも、これが単にひとつのゲームに負けたにすぎないということも分かっていた。

挑戦したゲームは、結果として自分の能力を超えていた。だが、可能性はあると信じて挑戦したことを後悔はしていなかった。むしろ疑念から目を逸らして、単純な受験塾としての拡大を目指していたら絶対に後悔しただろう。

他人からはそうは見えないのかもしれないけれど、僕は5年間で多くのことを学び、身につけていた。挑戦していなければこのようなことはなにひとつとして得られなかっただろう。

だから自分が精神的・肉体的に受けたダメージが回復するのを待てば、再びチャレンジできると信じていた。そうやって数ヶ月の間、僕は静かに力をためていた。

再び立ち上がろうとした時には、失敗に至った挑戦をはじめてからちょうど1年が経つ頃だった。

挑戦から失敗が確定するまで、振り返ればわずか八ヶ月という短い期間だった。それまで四年かけて培ってきたものは、八ヶ月の間に完全に崩れたのだった。どこかで聞いたことはあったが、何かを築くのは難しく、それを失うのは一瞬なのだ。なるほど。

それでも。

それでも、次の挑戦をしないという選択肢は、僕の人生にはなかった。

自分の内側にエネルギーが溜まってくるのを感じた僕は、新しいゲームをはじめの決意を固めた。幸いにも、これだけの大変な事態に遭いながらも会社が潰れることはなく、アルバイトの学生スタッフは自身の受け持った塾生のために指導してくれていた。

僕ひとりとなった組織でやれることには限りがあるから、残っていた一人ひとりの学生スタッフと面談して、僕がどのようなチャレンジをしたいのかを伝え、それに納得してくれた人だけに継続してもらうことに決めた。

新しく踏み出す方向性を理解してくれるスタッフが翌年も継続して働くと伝えてくれ、被災地に実家があり、その影響で退職していた社員が復帰してくれることにもなった。

大学受験のいい部分も、悪い部分も、5年間ずっと考え続けてきた。それに正面からぶつかって挑戦し、敗北してはじめてわかったことがあった。

現在の大学受験のシステムが正しいとは思わない。早晚、根本的に変わらざるをえないだろうし、そのためにできることをしたいとも思う。

ただ、現実には世の中から落ちこぼれる若者はたくさんいる。昔の僕のように。そして、彼ら彼女らに対して僕は力を貸すことができる。

受験はゲームに過ぎない。だが、たかがゲームだけれど、されどゲームでもある。そこに全力投球してはじめて身につけられることもある。大切なのは人生という物語を立ち上げること。でも、そのためには目の前のひとつひとつのゲームに全力を投じなければならない。

ならば、それを引き受けよう。そう考えてそうして僕は再び原点である受験塾という看板を1年ぶりに掲げて新しいスタートを切った。「いい大学に受ければいい」という受験塾ではなくて、人生という物語を立ち上げるための受験塾として。そのために、これまでとはすこし毛色の違うウェブサイトを用意して、公開した。

それから数ヶ月。この新しい挑戦がどのような結末を迎えるのかは分からないけれど、僕らは今まで通り通り淡々と、でも全力で塾生の指導にあたっている。また、はじめは「よくわからない」と思われていた新しいウェブサイトも、更新を続けているうちに、見に来てくれる人が増えてきた。

これまでの経験と反省を踏まえて、まったく新しい私塾をつくること。それもお金を払う塾生だけでなく、様々な若者が集まり、自分の人生という物語を立ち上げることができる私塾だ。

僕自身の物語も、また新しいステージに入ったと感じている。そして、これからどんなことが起こるのかに、なんだか起業したての頃のようにワクワクしている自分がある。

物語の登場人物がすべて

起業してからのゲームは成功と失敗の両方を経験した。そのサイクルを一巡した現時点で過去を振り返ると、たくさんの出来事があった。ゲームの将来に向けて学び、知恵を凝らし、努力した。その瞬間瞬間は楽しかったし、充実していた。

ただ、思い出すのはそうした中で出会った、僕の人生に現れた登場人物たちのことだ。ゲームには成功もあれば失敗もある。それはこれからも続いていくのだろう。でも、ゲームの途中で出会った登場人物とは、ただのビジネスのパートナーや顧客というだけでなく、信念を核にしてつながったかけがえのない仲間だった。

社員もアルバイトも含めて、これまで100人を優に超える仲間がいた。そして1000人を超える塾生が学んでくれた。彼らと出会い、過ごした時間はかけがえのないものだったと思う。

ビジネスの失敗は悲惨なことしか生まれえない。それは身を持って痛感したし、そのような状況には二度と陥りたくないと思う。

率直に言って、このような失敗を招いた僕は経営者として不十分だった。そうした中でたくさんの人に迷惑をかけ、結果として仲間を裏切ることになった。その事実は変わることはないし、言い訳をするつもりもない。もし謝れと言われれば僕は何度でも謝る。

でも、同時に信念を持ち、想いを共有した仲間と挑戦することほど面白いゲームは世の中になくとも思う。

受験というゲームも面白かったけれど、その先で出会う仲間と一緒に挑戦する冒険の日々は、それをはるかに超えて充実していた。一筋縄ではないかないゲームだからこそ、全員の力をあわせて乗り越えようとする。そこに誰かと共に生きる喜びがあるし、一人では決して立ち向かうことのできない大きな挑戦をすることもできる。

そうやって挑戦したゲームにおいて、勝利を仲間と共にわかちあうこと。それがゲームにおける最大の報酬だと僕は思う。だから僕はこうした過去を引き受けて、これからも自分のできるかぎりのことを信念に従って、仲間とともにやっていきたいと思う。

この本の原稿を書きながらよかったと思うのは、僕はここまでの過程をブログに書き残してきたことだ。

もちろん経営においては個人情報もあるし守秘義務もあるから、すべてをオープンにすることができるわけではない。でも、その時々自分が考えたこと感じたことを可能なかぎり率直にブログに書いてきたことで、いまそれを読み返すことができる。

また、先にも書いた通り僕は受験をしようと思った時からずっとインターネット上にその記録を残してきた。

そのように素直に文章にする中で、自分のことがすこしずつ分かったし、それを仲間と共有することもできた。その文章を読んで興味を持ってくれる人も少なくなかった。

なにより、そうやって自分のことを文章にすることを通じて、自分の人生が物語であるという自覚を僕は深めていった。それを積み重ねたことによって、困難が訪れても立ち向かう気力を失わないでいられたと思う。

あらためていま自分の書いてきたものを読み返すと、それは間違いなくひとつながりの物語であると確信する。勝ったり負けたりを繰り返しながら、なんとか死なずに生き残り、すこしずつ成長して前に進んできた自分。

そんなに大した人間でもないけれど、すくなくとも自分に対してそれなりの誇りを持つことはできる。そして、この物語を歩むことができてよかったなと心から思う。

いつか物語は終わりを迎える

どのような小説にもはじまりがあれば終わりがある。それと同じように、僕らの人生という物語もどこかで終わりを迎える。僕はそのことをずっと考えてきた。どうしてかは分からないけれど、7、8歳の頃から死ぬのが怖くてしかたがなかった。

ある頃まで僕は死ぬ瞬間に幸せであればいいのではないかと漠然と思っていた。読んでいた物語の終わり方はほとんどがハッピーエンドだった。僕もそのように生きることができれば幸せではないのかと考えていた。終わり良ければすべてよし。

でも、ある時に思った。死ぬ瞬間に幸せであるかどうかは分からないぞ、と。だって病気や事故でいきなり死ぬかもしれないし、頭がボケてしまうかもしれない。そもそも幸せ

が何かも分からない。幸福感に包まれるだけならドラッグで死ぬのが一番近道な気がする。でも、そんな死に方は絶対にイヤだ。

そう考えると「終わりよければ全てよし」というありふれた物語のハッピーエンドは人生には当てはまらないのではないかと思った。極論を言えば、人生の最初の99%が幸せで最後の1%が不幸なのと、ずっと苦労ばかり続けていて、最後の死ぬ瞬間だけ安らかに逝けるのと、どちらがいいのか僕には分からなかったのだ。

ゲームには成功はあるけれど、物語としての成功は何なのか、考えてもなかなか答えは出なかった。ただひとつだけ、金は生きるために必要ではあるけれども、それを持っても物語の成功とはいえないことだけは確信していた。

僕の疑念に対して、さまざまな宗教がその答えを軽々と与えてくれた。でも、現代の日本に生まれながら古くからの神様を信じられるほど、僕は素直な人間ではなかった。なにより、何かを信じれば裏切られる可能性がある。自分で血と汗を流しながら考え続けて、身を持って得たものでなければ、それを信じ抜くことはできない。

僕は哲学や文学を読みふけりながら、そのような疑問に自分なりの答えを出したいと考えていた。でも、それだけではどこかで足りないと思って、本ばかり読むのではなく現実の人生を全力で生きる中で答えを探してきたと思う。

28歳の未熟者の僕が、その最終的な答えを持っているわけではない。ただ「終わり良ければ全てよし」ではないということだけは間違いのないと思う。

では自分の人生という物語はどのように生きればいいのか。

現時点で、僕はこう考えている。

自分の人生という物語を、一冊の小説のようなものだと考えてみる。そして、その物語は一瞬一瞬の積み重ねによって成り立っている。小説を一文字ずつ読むように、僕らは自分の人生を一文字分だけ読み進めている。それは、人生とは僕が生きているのはその一文字分だけであり、「いま、ここ」を生きている自分だけだということだ。

「いま、ここ」を生きている僕は未熟者で中途半端だ。でも、そんな半端者の自分を引き受けて生きる以外に、自分という人生の物語を立ち上げることはできない。そうやって進んだ先に何が起こるのかは分からなくても、一步を踏み出し、一瞬一瞬に全力を尽くして生きることで物語は展開していく。

やがて物語は終わりを迎える。どんな長編小説であっても必ず終わりの一文字があるように、僕らの人生にもそれは必ずやってくる。

でも、僕らの人生はその最期の一文字に価値があるわけではない。最初から最後までを通して、それがどのような物語だったのか。そこにこそ物語としての価値がある。

ゲームはそれに彩りを与えてはくれるだろう。お金は豊かに生きることを助けてくれるだろう。でもゲームの勝利もお金を得ることも、物語の主題ではない。

物語の主題は、主人公がどのように生きたのか、それだけではないだろうか。

もし人生に価値があるとすれば、僕はその主人公の「生き方」にあると思う。それが僕が身を持って学んだことであり、未熟者の28歳の僕が現時点で言えることだ。

物語を読む人がいる

物語の価値。それは他の誰でもなく、自分が決めることだと思う。その物語の書き手としての自分、作者である自分ができるのは、主人公に全力を尽くさせること以外にない。

それを読んだ人がおもしろかったというかもしれない。それとも、自分はこんな人生を送りたくないと思うかもしれない。読み手がどう思うかは、人それぞれ価値観が違うのだから仕方ない。

ただ、もしその物語を読んで「いいな」と思ってくれる人がいるとすれば、それはとても素晴らしいことだと思う。そして、実際にその読み手は存在する。

有名人だけが、その人の物語を読まれるのではない。むしろ有名人であればあるほど、その表面だけが描かれて誤解されていると僕は思う。

本当の物語の読み手はもっと身近なところにいるのだ。

家族や友人をはじめ、自分の大切な人たち。それから、未だ出会っていないこれから出会う自分の人生の登場人物たち。その中には結婚相手や子どもいるだろう。

そして何より、自分という読み手がいる。

自分の人生という物語の読み手がどこかにいると考えることで、僕はいまここで生きることにエネルギーをもらえる気がする。読者のいない小説はとても悲しいけれど、必ずどこかにいるのだと思うことで書き進めるエネルギーが湧く。

「自分の物語なんて読む奴はいないよ」と思うかもしれない。「こんな自分の人生なんて」と。そのように感じている人はきっと少なくない。

でも覚えておいてほしい。

「こんな自分」だからこそ描ける物語がある。

そこからスタートするからこそ、生まれる感動がある。

どんな状況からだって、決意をした瞬間に自分の人生という物語を立ち上げることはできる。そして、そうやって綴った物語によって伝えられることこそが、あらゆることを超えて最も尊いものだと僕は思う。

だからこそ、生き様で人に何かを伝えられる人間でありたい。たとえ失敗だらけの人生だとしても、そこに何らかの価値は宿るのだ。

そう考えることでダラけてなんかいられなくなる。一度きりの人生を、本気で生きようと思えるようになる。そして、そのような人が一人でも増えることによって、後に続く人もまたその生き様を引き継いで生きられるようになる。

それが教育者の端くれとしての僕の願いだ。教育にとって知識を伝えることは二の次であり、本当に伝えるべきはその生き様だと思う。

残念だけれど、身の回りで生き様を語れる大人というのはほんとうに少ない。そうである時に、自分が一度きりの人生をどのように生きればいいのか分からなくなることもあるだろう。

どうすればいいのか。その答えはないけれど、ここまで書いてきたことは、それに挑戦してきた僕の記録であり、それへの賛否は別として、何らかの手がかりはあると思う。

自分の人生はもう終わりだ、という若者と出会うことが少なくない。でも、そんなセリフを聞いたたびに僕は笑いたくなくなってしまふ。おいおい、どれだけ人生を知ってるんだよ、と。

君の人生はいま何章目くらいだろう？

28歳の僕だって、まだ3章目がはじまったばかりくらいだと思っている。受験をはじめようと決めた18歳までを振り返れば、まだ1章もはじまっていないプロローグの段階だったと思う。

僕の人生があと何章くらいあるのかは分からない。10章だと少ないけれど、残りの人生を考えると30章はないだろうな。それは数え方にもよるだろうけれど、とにかく、健康な体で、大きな事故に遭遇しないかぎり、たぶんもうしばらくは物語は続く。

この先、どんなことが起こるのかは分からない。いま僕がこうして原稿を書いていることも、長い人生で見ればまだ物語のはじまりの方のワンシーンなのだと思う。これが後にどのような意味を持つのか。物語を読み進めれば、それが明らかになる日もやって来るだろう。

逆に、絶望的な状況だとしても、それは長い物語の前フリにすぎないのだと思う。むしろ、絶望的であればあるほど、物語においては必要なシーンなんだ。それを引き受けて乗り越えることによって、その先の物語が展開していく。

物語に危機がないわけがない。むしろ、それがなければつまらない。でも危機はいつだって物語の前フリなんだ。だからこそそれを引き受けて、そのしんどさすらも味わってあげばいい。

ひとつひとつのゲームの勝利に向けて全力をつくすけれど、それが終われば、ゲームの結果にはこだわらない。自分が生きている物語というプロセスそのものを楽しむ。

その過程で、どんなことが起こるかは分からない。泣きたくなるくらいしんどいこともあるだろうけれど、でもこんな日が待っていたのかという歓喜の時もやってくる。

すべてひっくるめて自分の人生であり、そしてその人生という物語の主役は、ほかでもない自分なのだ。

こうした考えを押し付けようとは思わない。ただ、僕はそのように考えて生きてきたし、おそらく、これからも生きていこう。

終章 自由を引き受け、個として生きる

宇宙の主人公としての自分

人生の主役は、自分だ。

こんな当たり前のことを、普通に暮らしていると忘れてしまいかねない。だって、誰も教えてくれないから。むしろ世界中が「あなたは主役じゃない。脇役にすぎないんだ」ということを叫んでいるように思える。

実際、自分が歩んできた人生はそれを裏打ちしているかのようだ。

学校のテストもぱっとしなかった。自分には何か特別な才能があると思っていたけれど、せいぜいがお山の大将に過ぎなかった。テレビや新聞で活躍している有名人と比べると、自分という存在はちっぽけでゴミのように卑小な一点に過ぎないように思える。

歳を取るにつれて小さい頃に持っていた未来にワクワクする気持ちは失われていく。いつしか自分の人生はこれくらいだろうと勝手に決めてしまい、生活は日常に埋没する。代わり映えのない世界の中で、色褪せてのっぺりとした日々を送る。

自分は普通の人間なんだ。

そんな声が聞こえてくる。

それを否定したいけれど、自分の人生のどこを探したって、それを否定できるような要素はない。結局のところ、自分は特別な存在ではないのだ。その事実打ちひしがれそうになる。

でも、それは絶対に間違っている。そんなものが自分の人生であるはずがない。

この人生は、自分にとってただ一度きりのものなのだ。誰がなんと言おうと、今現在どんなにみすぼらしい格好であろうと、この人生における主役は自分なのだ。

たしかに現実は厳しい。世の中は小さな頃に思っていた頃よりも甘くはない。でも自分にとって自分の人生ほどかけがえのないものはないことに変わりはない。それは森羅万象、この全宇宙と比しても変わらない。

だから人はだれしも全宇宙の中心であり主役であると僕は思う。

テレビに映る有名人はたしかにすごい人なのかもしれない。でも、この地球上にテレビに映る有名人なんて掃いて捨てるほどいる。そんなものは自分の人生という物語に出てくるチョイ役にすぎない。

そんな狭い世界の中で「普通」や「特別」を決めてはいけない。そもそも、この世の中に「特別の人間」なんていない。何が特別なのかを決めるのはテレビでも新聞でもなくて、この自分なんだ。もし世界に特別な存在がいるとすれば、自分をおいて他にない。

「受け取り」と「贈り返し」

自分はこの宇宙の主演だ。そのような自覚をもって世界と向きあってはじめて、自分と世界との関係を理解できる。

自分という存在がどのようにして成り立ったのかを振り返れば、自分の外側の世界と自分が触れ合うことによって少しずつ成り立ってきたはずだ。

たとえば僕らが日本語を使いこなせるようになったのは、自分で創りだしたからではなく、外側にすでにあった日本語というものを取り込んだからだ。

本を読むことも、インターネットをすることも、一步を踏み出すことも、自分の決めた目標に挑戦することも、その意味で外側の世界と触れ合うことだ。そして僕らはそのような世界との触れ合いを通じて、世界から何かを受け取っている。

一方で、そのようにして世界から何かを受け取った僕らは、反対に世界に対して何かを返すことがある。

たとえばいま僕が書いているこの文章。

これは僕が頭の中でゼロから創りだしたように思えるかもしれないけれど、それは違う。この世に生を受けたその瞬間も含めて、僕は世界から何かを受け取り続けてきた。

だから僕が書いている文章は、そうやって受け取ったものを混ぜあわせ、溶かし、そうした材料を元にして組み合わせ、別の形に作り変えているに過ぎない。

もちろん、その中には僕が人生で出会った固有の経験がたくさん含まれている。ただ人のをパクって組み合わせただけではもちろんなくて、ただ一度きりの僕の人生という独自性を通してのからこそ、その組み合わせに僕という固有の刻印を押すことができる。

だが、それを含めて僕が行うことはすべて、世界から受け取ったものを別の形で再び世界に対して贈り返しているだけだ。

人類は、おそらく、そのようにして連綿と何かを受け取り、贈り返してきた。そのような遺贈の一点として「いま、ここ」にいる自分が存在している。

さまざまな人との出会いや別れを繰り返しながら、僕らは世界と触れ合っている。それを通じて世界から何かを受け取り、別の形にして再び世界に贈り返している。

そのようなサイクルを回すことそれ自体が生きるということだと思ふ。

それではオリジナルな「創造性」なんてなくてつまらない、と思うだろうか。

でも、ゴッホが絵の具を発明したわけでもなければ、ベートーベンが音符を創り出したわけでもない。どれほどクリエイティブなアーティストも、あるいは起業家だって、あらゆる人は、世界から何かを受け取って、自分なりに組みかえて贈り返しているのだ。

世界から何かを引き受け、それを贈り返すこと。それ自体が、創造的な行いだと思ふ。このようにして新たに組み合わせられるすべての瞬間に、あらゆる点に、いつだって「創造性」が働いていると思ふ。

そうしたプレゼント交換のような行為を、僕らは生まれてから死ぬまでずっと繰り返す。そうした交換の中心にいる者、それが自分という存在なのではないだろうか。

無限にも等しい「受け取り」と「贈り返し」を続けながら、僕らは自分を変化させてきた。何も喋れなかった赤ん坊の頃から、悩み苦しみながら生きている今この瞬間まで、僕らは変わり続けている。

宇宙という壮大な物語

世界から何かを受け取り、別の形にして贈り返す。

僕には、そのようにしてこの宇宙すべてが成り立っているように思える。古き何かを受け継いだ何かが、全力をつくすことで新しき何かを創造する。

人だけでなく、あらゆる存在がそのような行いを繰り返している。そうすることで世界は生まれ変わり、歴史は書き継がれてきた。

そう考えると僕らが生きているこの宇宙という場所そのものが、ひとつの物語であるように僕には思える。この世界すべてを舞台にした壮大な物語だ。そして、その中で僕らは人類として存在し、その歴史の尖端たる「いま、ここ」を生きている。

そうした物語の中で、どれかひとつが欠けても自分という存在はありえなかった。

たとえば僕らの祖先のすべてが、そのタイミングで出会っていなければ僕らは存在していないのだ。あるいは、そもそも奇跡的な偶然で、この広い宇宙の中に地球という惑星が、その時、その場所に誕生していなければ、そうした出会いすらありえなかった。

いまこの瞬間の世界を成り立たせるために、全宇宙のなにひとつとして欠かすことができない。そして、その中にはもちろん自分という存在も含まれている。全宇宙からすればちっぽけな一点に過ぎない自分は、全宇宙にとって欠かすことのできない存在なのだ。

なにより、自分が自分として存在していなければ、そもそも宇宙なんて存在しない。当たり前だけれど、自分がいなければ、宇宙があるということすら気づかないからだ。だから、自分という存在がいなければこの全宇宙も存在しないということもできる。

それが、自分が宇宙の中心である、ということだ。

全宇宙が自分に注ぎ込んでいる。それはまた、僕らは歴史のすべてを引き受けているということでもある。しかも、その一点からは全宇宙の歴史が放出されてゆく。なぜなら、その一点がなければ未来の全宇宙の歴史は、その通りにはありえないから。

その意味で、僕らは歴史のすべてを、過去だけでなく未来まで含んだすべてを、引き受けて生きている。それが「いま、ここ」にいる自分という存在なのだ。

そんなイメージで考える時、僕は自分が自分として存在していることの奇跡を感じる。だって、僕が僕である必要性はどこにもなかった。にもかかわらず、僕は自分という意識を持ち、いろんなことを考えて生きることができる。そして、この宇宙の歴史は、良いことか悪いことかは分からないが、未来永劫、僕を抜きに語ることはできない。

そう思えば、ちっぽけな自分の存在が輝いてこないだろうか。一度きりの自分の人生という物語が、味わい深く感じられないだろうか。

世界は学びに満ちている

僕らは世界からなにかを受け取り、自分という存在を成り立たせている。そのようにして僕らの人生という物語は紡がれている。

そして、物語の中で主人公が世界から何かを受け取ることを「学ぶ」と呼ぶことはできるだろう。冒険の過程で経験したさまざまなことを、主人公は学んでいく。

覚えているだろうか。一步踏み出せばそこに非日常の冒険はある。そう考えれば、世界は学びに満ちている。気が付かないだけで、僕らの周りは学びで溢れているのだ。

そのような学びを受け取るかどうかで、自分がどのように変わるのかも決まる。

もし世界から何かを受け取ることを拒めば、つまり学ぶことを避ければ、人は今のまま変わることができない。変わることができなければ、変化のない沼の水が濁るように、心も体も澱んでいく。

生命科学において「生命の本質は動的平衡（流れ）である」という考え方がある。

人間の細胞が短い間ですべて入れ替わっているという話は、どこかで聞いたことがあるだろう。同じように、生命は一定の期間の間にすべての細胞が入れ替わるが、個体として

は同じ形を取る。そのように変化し続ける存在であることによって命ある存在として維持できる、それが動的平衡であり、そのような変化ができなくなった時に生命は失われる。

動的平衡は、生命科学だけでなく、学びにおいても同じだと僕は思う。

学ぶことによって、僕らは変わり続けることができる。そして、そのような変化を続けることによって、生命としての輝きを維持することができる。

そのために必要なのは自分が学ぶと決意するだけでいいのだ。その瞬間から、僕らの中に宇宙のすべてが注ぎ込んでくる。世界は、学びを志した瞬間に受け入れてくれる。

これは決して比喩ではない。

僕は高校をやめるまで「学び」について考えたことはなかった。たいていの子どもがそうであるように、勉強は好きではなかった。でも、世界に対して素直に心を開き、自分を変えようと決意した瞬間から、僕にとって生きることは学ぶことと同義になった。

そうやって学び続ける日々は楽しかった。いつでも未知の世界に心を踊らせて、あたらしい冒険に挑戦し、勝っても負けても何かを身につけて次の挑戦へと進んだ。

そのような日々は、自分が生まれ変わり続けているように感じた。一年前の自分とはもちろん、時には一週間前の自分とできえ、ずいぶん変わったなと感じることもあった。

もし僕が学ぶことを放り出していたままだとしたら、おそらく、ほとんど変わることなく時だけが過ぎていったのだと思う。狭くて暗い部屋に閉じこもったまま、僕の心が腐るまでに、さほどの時間はかからなかったろう。

僕は学びはじめることによって、真に生きはじめることができるようになった。それを、人間としての「生命」を取り戻したというのは、果たして言い過ぎだろうか。

学ぶとは何か

世界が学びに満ち溢れていることを、どういうわけか学校や社会は教えてくれない。

むしろ、小さい頃からわけも分からず勉強させられることによって、学ぶことへの拒否感を植えつけてしまっているように思える。

一步を踏み出し、何かに挑戦することによってはじめて学べるものがたくさんある。でも挑戦することに対して「危ない」と言ったり、失敗した時に「ほらね」と言ったりして、挑戦する心を萎えさせてしまう。

挑戦なんてアニメやマンガの中だけの話であって、自分の人生ではない。だからそんなことを考えないで大人しく生きなさい。そんな空気が充満している。

そうした中で、僕らは一步踏み出したり挑戦したりすることを恐れるようになる。そして変化を拒むようになり、学びを受け取ることができなくなる。そして代わり映えのない、恐るべき日常がやってくる。

思うに、もし僕らが人間ではなければそんなことは起こらないのだと思う。

動物は学びを拒むなんてことは考えない。挑戦を恐れるということを考えない。自分が生きたいように生きているし、世界から好きなように受け取っている。

でも、僕らは人間であるがゆえに挑戦を恐れ、学びを拒むことができってしまう。そして自分はこれくらい人間なんだ、このままでいいんだ、と思うことができってしまう。

一度そうした考えが自分の中に育つと、「自分はこれくらい人間なんだ」と思うことに酔うようになる。いまの自分に満足してしまい、変化の生まれぬ無限ループに陥る。

それは檻の中で生きるのと同じではないだろうか。生命の輝きは失われ、持っているはずの自分の可能性を押し殺してしまう。

それは人間だけが経験する、人間に生まれたがゆえの悲劇なのかもしれない。誰が閉じ込めているわけでもない。檻の鍵をかけているのは、ほかならぬ自分であるという悲劇。

この悲劇では、人は肉体的には生きていても、精神的には死んでいるのと同然だ。

精神的な死は、僕には物理的な死とかわらない悲惨な事件であると思う。いや、むしろ肉体的には生きているために味わう苦しみは大きく、その分だけ残酷かもしれない。

でも、そんな事件がこの国にはそこらじゅうで起きていないだろうか。

そのような苦しみによって生まれる涙が、一見平和そうな家の中で流されている。声にならない叫びが、平穏に見える街中で叫ばれている。

それは見ようとしなければ見えないし、聞こうとしなければ聞こえない。でも、目を凝らせば見えるし、耳をすませば確かに聞こえる。

その苦しみは、なにより、自分の心の中にある。

それを向き合うのはつらいことだけれど、そこからしか最初の一步は踏み出せない。

自由とは何か

僕らは自分の作った檻に、自分を閉じ込めてしまっている。

でも、僕らには自由がある。学びはじめようと思えば、いつでも学ぶことのできる自由が。勇気を出して一步を踏み出せば、いつでもその檻から抜け出ることができる。そして未知の世界に挑戦することができる。

僕は思うのだけれど、これほど自由な時代はかつてなかったのではないだろうか。

それが豪華かどうかは別としても、生きるために必要な衣食住に事欠くことはほとんどない。インターネットであらゆる情報にアクセスできるし、すこしお金を出せば世界中のどこにでも行くことができる。

うっかりすると忘れてしまうけれど、僕らはそんな自由な時代に生きているのだ。でも、ほとんどの人はその自由を使いこなせていないし、そもそも使おうともしていない。

たとえば「世界中のどこにでも行くことができる」というのは、現代にあってもすべての人が持っているわけではない。日本のパスポートを持っているからこそ、ほとんどの国に自由に出入国することができる。

百数十年前にこの列島に住んでいた人々が、自分の所属している藩から出ることさえ難しかったのと比べたら、その自由の増大に驚かないだろうか。

あるいは、インターネットであらゆる情報にアクセスできるという自由にしても、たとえば隣の中国ではインターネットでアクセスできる情報は制限されている。そして政治的なメッセージを自由に発信することはできず、好き勝手に喋れば捕まりかねない社会なのだ。

僕らがあたりまえのこととして考えている衣食住だって、それすら困っている人は21世紀の現代にあっても世界中にまだまだたくさんいる。それと比べれば僕らがどれだけ自由に恵まれているのか、あらためて気がつけはしないだろうか。

そもそも、僕らが自明のこととしている「自由」だって、歴史を振り返れば決して当たり前前の考え方ではなかった。

たとえば西洋の哲学史において「自由」を最初に論じたのはソクラテスであり、その考えを著したプラトンであると言えるけれど、彼らが古代ギリシアで哲学的な対話をしていた頃には奴隷制度が普通に存在していた。それは当たり前のことであって、疑うべきものではなかった。

でも、人間は歴史を積み重ね、すこしずつ成熟していった。その結果として僕らは人間は自由であることが大切だ、という考えを受け入れるようになっていった。自由に価値が置かれ、広く承認されることによって、奴隷制度のように自由を束縛するものに対して反対する人が増えていった。

その過程では多くの争いが起こったけれど、いまこの国において奴隷制度に反対する人はほとんどいないだろうし、そのような考え方が地球を覆いつつある。まだそれは完全に達成されたわけではないけれど、もはやその流れを押しとどめることはできない。

そのような積み重ねによって人類は自由を獲得してきた。その間ではたくさんの血が流されたし、命が失われもした。そして今なお、それは続けられている。

僕ら一人ひとりが手にしている自由は、こうした歴史の上に成り立っている「自由」なのだ。

自由の重荷

自分が生きていようように生きることなんて、考えられない時代が確かにあったし、今なお自由が当たり前でない国や地域はいくらでもある。そういう意味で世界はまだ発展途上だけれど、すくなくともこの国で生きている僕らには、ありあまる自由がある。

ただ、自由であるということは、一方で難しい問題をはらんでいる。

それは、自由を引き受けるためには、その自由を使いこなすことのできる力が必要だということだ。

奴隷ならば主人のいうことに従う以外の人生はありえない。だから自分で考えたり行動したりする必要はない。命令を待ち、それに従って行動すればいい。

でも自由である僕らは、その自由を引き受け、使いこなさなければならない。そうでなければ、大きすぎる自由の重さによって潰されてしまう。

たとえば、選択肢が多すぎるとどれを選べばいいのかわからなくなる。そうになると、人は選ぶことを放棄して誰かに何かを指図してもらわないといけなくなる。

「子ども」はまだ自由の重さを引き受ける力を持っていない。それが学校のカリキュラムがあり、親の言うことを聞く理由でもある。先人の知恵に従って、身に付けるべきものを身につける中で、すこしずつ僕らは無限の選択肢を前にしても生きていける力を手にすることができる。

そのようにして自由を引き受ける力を身につけることによって人は「大人」になる。

だが現実には大人になる過程で、自由の重さを引き受ける力を教えてもらえないことが多い。結果として自分で考えることも、行動することもできなくなる。悲しいことに、世の中にはそのような大人が少なくない。

でも、だからって諦めてはいけない。自由の重荷を引き受ける強さを、僕らは望めば手に入れることができる。そして、それこそが「学ぶ」ということの本質であると僕は思う。

学校は、本来はそのような「学び」を手に入れる場であるべきだと思う。自由を引き受けられるようになるような、先人の知恵の結晶がカリキュラムであるべきだし、そうした考えのもとに教えることが教育であると思う。

でも、残念ながら現実には理想通りにはいかない。意味もわからず無理やり勉強をさせられることで、学びが本来持っている輝きは見失われてしまう。子どもの心から学びたいという気持ちは消し飛び、仕方ないから勉強することになる。

そのようなことが繰り返される中で子どもは学びから逃走する。そして自由を引き受ける強さを身につけることなく、世の中に放り出されることになる。その結果、子供の頃に信じていた、持っていたはずの自分の可能性を忘れてしまうのだ。

そして変化を拒み、日常の中に埋没し、惰性で生きるようになる。自由を失い、子どもの頃にはそんなふうに絶対なりたくないと思っていた「大人」になってしまう。

でも、そんなのは大人でもなんでもなく、ただ年を重ねただけの「ガキ」に過ぎない。年をとっている分だけ、ただのガキよりもタチが悪い。そして親や先生というだけで偉そうにしている人の中には、そのようなタチの悪いガキがすくなくない。

とはいえ、そうした「タチの悪いガキ」を責めるわけにはいかない。彼らだって元々は子どもだったのだ。自分の可能性を信じて、未来にワクワクしている日々があった。でも生きていくという現実の中で押しつぶされてしまったのだ。

自由を失い、自分の可能性を信じられなくなってしまった「元・子ども」たち。彼らは自分で作った檻に自分を閉じ込める。そうした人は、自分だけでなく、他の人をも檻の中に閉じ込めようとする。

そうになってしまうと気づかないけれど、それは奴隷にも等しい。いや、本当の奴隷にだって奴隷としての尊厳がある。そうとも知らないまま奴隷として生きるのは、奴隷以下であると言わなければならないかもしれない。

知らない方が幸せだ、という考え方がある。過酷な現実を生き抜く可能性がないならば、奴隷であることに気がつかない方がいい、と。

でも、本当にそうだろうか。

僕はこの世に生を受けた以上、自分の人生を自分で引き受けたい。一度きりの人生を十分に生きたいと思う。

たとえ生涯ずっと檻の中から抜け出れないとしても、それを抜けだそうともがきたいと思う。閉じ込められているという事実から目をそらさず、現状を認識することで檻から出る方法を考えたいと思う。

そのようにもがいているうちに自由を引き受ける強さを持つチャンスは巡ってくる。檻から抜け出て、自分の足で立ち、自ら考える可能性が、檻に差し込む一条の光のように、見えるようになるだろう。その時、失われかけた生命は、再び輝きはじめる。

たとえ檻に囚われたまま生涯を終えるとしても、そこに希望があれば、生きているという実感を持つことはできる。奴隷であっても、人間としての尊厳を取り戻すことができる。

だから知らない方がいいなんてことはないと思う。知ることは大切だ。知ることで初めて、自分の可能性に気がつけるのだから。

生まれもった欲求

そのような自由を勝ち取り、一度きりの人生を十分にいきたいという欲求を、僕らは生まれた瞬間には限りなく強く持っている。

母親のお腹から出てきたばかりの時、赤ちゃんの目はまだ何も見えない状態だという。

真っ暗闇の世界に生まれた赤ちゃんは、本能的に大声で泣く。それは生きたいという叫びだ。その瞬間から赤ちゃんはすさまじい速度で世界から学びはじめる。

人間には様々な欲求があるけれど、生きるために学ぶという欲求は、その中でも飛び抜けて強いように思える。赤ちゃんは朝から晩まで休むことなく学び続ける。そしてわずかな間に自分の生きている世界のことを知り、言葉を発し、自分の足で歩きはじめる。

そのような学びへの強い欲求を、小さな子どもは誰もが強く持っている。それは食欲や睡眠欲にも負けないほどの強い欲求だ。

その欲求に対する名前を僕は知らないけれど、それをさしあたって「学欲」と呼ぶとすれば、僕らは生まれもって強い学欲を持った存在だということができる。

だが、学欲は年をとるにつれて失われていってしまう。いつしか自分で自分の学欲を押し殺すようにさえなる。

その原因は無数にある。家庭や学校ばかりではない。新聞やテレビやインターネットといったメディアがそうなのかもしれないし、政治や経済のシステムが間違っているのかもしれない。

そこにはたくさんの事情が絡んでいて、それを分析するのは僕の手にあまる難題だ。そういった難題を前に、完璧な社会なんてありえないのだから仕方ないと諦めることはたやすい。でも、僕はそうしたくない。

学欲とは世界から何かを受け取りたいという欲求である。変化への意志であり、生きることそのものなのだ。もう一步踏み込んでいえば、学欲こそが生命の本質であるといってもいい。学欲を失うということは、生きる意欲を失うということにも等しい。

学欲は、人間の尊厳として守られるべき欲求であると僕は思う。すべての人がそれを守るために全力を尽くすべきだと思うし、現に、誰もが必死で戦っているのだと思う。

人は生まれ、苦しみ、そして死ぬ。

そんな人生に意味はないと言ってしまえば、それで終わりだ。

でも、諦めかけそうになっても、諦めきれない。そういう中で、すべての人が必死に戦っているのだと思う。だから、人生の無意味さに耐え、諦めずに戦い続けること。それが人が生きるということではないだろうか。そのような営みの中に、人間のドラマある。

そのドラマの登場人物たる役割を与えられた、ちっぽけな存在である自分。そのちっぽけな自分が、どんな役割を果たすのか、どんな人生なのかは、終えてみるまで分からない。もしかしたら、終えてみたって分からないものなのかもしれない。

でも、そのちっぽけな自分の人生を引き受けることによってはじめて、全宇宙の主演としての自分の物語が始まるのだ。

人生という冒険の旅路

蓋をしていた学欲を解き放つことによって、僕らは自由になることができる。世界から学びを受け取り、自分の人生という形で世界に贈り返すことができる。

とはいえ、自由に生きるというのは決して簡単なことではない。勘違いしやすいけれど、自由というのは自分の好き勝手にしていい、ということではないからだ。

たとえば、「自由」という言葉の中には他の人の自由を奪うという可能性も含まれている。でも、自由を引き受けるのであれば、他の人の自由を侵すことは許されない。

なぜなら、他の人の自由が侵されることを許すことは、自分の自由が侵されることも同時に許すことだから。

先に述べた通り、僕らの享受している自由は人類の絶え間ない努力によって獲得され、危ういバランスの上でかろうじて成り立っている。その危うさを無視して自分だけの自由を主張する人は、いつ自分の自由が侵されてもいいと言っているに等しい。

だから、幸運にも自分にもたらされた自由に感謝し、それを本気で大切にしたいと願う人は、必然的に、他者の自由も尊重するようになる。

となれば、自分の好き勝手に生きるわけにはいかない。だから、自由に生きるということは、不自由を引き受けるという結論に行き着く。

実際、人生は不自由で、思い通りにならないことだらけだ。

特に10代20代のうちは、理想と現実のギャップが大きい。自分はこんな大きなことがしたいと思っけていても、実際にはまだまだ未熟で何事も満足になしえない。そんな中で絶望して諦めてしまうポイントは長い人生の中で何度も遭遇するだろう。

いくら未来にワクワクしても目の前の勉強がいきなり楽しく感じられるわけではない。社会に出れば金を稼がないといけないし、やりたくないと感じる面倒な仕事をこなさなければならぬこともある。そうした日々の中で苦しくなつて、生きていくのがしんどくなる時もある。

僕にだって、何度もあつたよ。

でも、そんな中でも諦めないこと。

自分の人生を十分に生きたいと願う気持ちを忘れないこと。

そうすることで、すこしずつ自由を引き受ける強さを身につけられる。そうやってはじめて誰かに依存することなく、何にも縛られることなく、自由で、自立した個人として生きることができる。

それがあつる一点を超えた時に、コップから水が溢れ出すようにして、自分以外の何かを満たそうという気持ちになる。それは恋人かもしれないし、子どもかもしれないし、親かもしれない。地域や、国家や、あるいは世界のどこかの場所なのかもしれない。

自分が生き残ることができれば、それを可能にさせてくれたものに対して何かを返そうという気持ちになる。そして、そこに喜びを見いだせるようになる。

僕は、振り返れば、そのように生きてきた。そして、そうやって生きてこられたことに対して後悔をしたことは、ただの一度もない。

18歳で人生を諦めかけていた僕に向かって、この10年間は素晴らしい冒険の日々だったと言つてやりたい。そんな気持ちでここまで原稿を書いてきた。

思い通りにならないことはたくさんあつる。でも、一人で生きているわけではないこの世界の中で、それは乗り越えなければならぬことなんだ。

人生に絶望したくなるような失敗を経験することもある。でも、それだって長い長い物語においては前フリにすぎない。

ゲームは難しいからこそ楽しいんだ。物語は波瀾万丈だからこそ面白い。

そう考えて、達成するのが難しい挑戦に、乗り越えるのが難しい試練に、でも打ち克とうするところに生きる喜びが、人間の貴さがあるのではないだろうか。

大切なのは、途中でゲーム・オーバーにならないこと。物語を勝手に終わりにさせずに、生き延びること。肉体的にはもちろん、精神的にも死なないように気をつけながら。

どんな状況であれ、あるいはどん底であればあるほど、それを乗り越えた時に得られるものは大きい。どんな経験だって、前フリとして、必ず物語の後でつながるんだ。無駄になることなんて、なにひとつとしてない。

僕の愛する映画『ショーシャンクの空に』には、囚人の主人公がこう語る場面がある。

Hope is a good thing, maybe the best of things, and no good thing ever dies.

(希望はいいものだよ。多分最高のものだ。いいものは決して滅びない)

人生で最も退屈で絶望的だった高校中退時代、偶然出会ったこの言葉が、未来を諦めかけていた僕に火をつけた。そのような、生きるための情熱に火を灯す言葉を、ほんのひとつでも本書の中から見つけ、何かを感じ取ってもらえたなら、それ以上に願うものは何もない。

あとがき

大方の読者には関係ないことではあるが、本書の成り立ちに触れておきたい。

本書の初期の原稿は2010年10月頃に書かれた。ここに収められたうち、一章、二章、三章はこの頃の原稿を元としている。

当時、ある出版社から発売することが決まっていたものの、納得できる結末まで至れないまま、本書でも触れた事業の転換に際して出版を中止することに決めた。

眠っていた原稿を取り出して、幾度かの書き直しを経て現在の形へ仕上げたのは2012年6月。事業の失敗から立ち直り、新たな挑戦に向かっていった時期だ。

ここで序章、四章、終章を書き加えると同時に、全面的な書き直しを行い、ほぼ現在の形の原稿が出来上がった。

しかし、当初出版社が想定していた万人向けのハウツー本から、僕の独断で読者対象を狭めた内容にしたことで、一般書籍としての発売は難しいという結論に至る。

考えた末に、本書の原稿はいったん脇に置き、本書の結論部分で述べた「学びへの欲求」をコンセプトにした新たな原稿を書くことにした。そして、それまで「学び」や「教育」について僕が考えてきたことを、約一ヶ月かけて一息で書き上げた。

『学欲』と名付けたその本もまた、一般書籍として流通させるには適していなかった。そこで、そのタイミングで日本でのサービスが開始されたアマゾンのKindleを通じた電子書籍として公開した。その間、本書の原稿はパソコンのフォルダ奥深くに眠っていた。

その後、2013年3月末で道伴舎（旧・道塾）を閉塾することを決めた後で、本書を公開することを思いついた。すべての業務を終え、事務所を閉めた後、数日間で最終の推敲を行なった後、現在、このあとがきを書いている。後はウェブで公開するだけだ。

実を言えば、閉塾を決めるまでは本書を公開するつもりはなかった。あまりに自分を語り過ぎていることと、その頃に読んでいた本からの影響が直截に見て取れ（一例を挙げれば「冒険」というキーワードの多用は哲学者ホワイトヘッドの『観念の冒険』に熱中していたことに由来する）、自分としては納得できるクオリティではなかったからだ。

ただ、それまでに「未完成の一冊」という前置きをした上で本書の原稿を渡していた教え子の何人かが、本書が一番胸に響いたという感想をくれていた。僕としては『学欲』に二十代で考えてきたことを詰め込んだつもりだったが、考えてみれば、本書は大学生活へと踏み出す卒塾生に渡すことを念頭に置いて書いたもので、閉塾にあたって僕が遺せるものとしては、これがベストなのかもしれないと思うようになり、公開を決めた。

本書は、公開した順でいえば僕の三番目の書籍となるが、執筆順序で言えば二作目にあたる。『受験はゲーム』『独学宣言』『学欲』の三冊が、僕が二十代に書いた書籍だ。学びをテーマとした、道塾・道伴舎時代の三部作と言ってもいいと思う。これらの作品で、二十代の僕が書けることは書き尽くしたので、書くことに関して思い残すことはない。

書籍といっても後の二作は電子書籍とウェブ上でデータを公開するだけのことであり、これまでの「出版」とはいえないかもしれない。そうしたことを承知の上で、僕が必死に書くことができたのは、やはりインターネットの力によるところが大きい。

一昔前によく語られたインターネットの特徴として、ロングテールという現象がある。ベストセラーを「恐竜の頭」に、売れないものを「恐竜の尾」としてグラフ化すると、「ほぼ無限の長い尾（ロングテール）」を持った恐竜に似た姿が現れる。保存や流通のコストがほぼゼロのインターネットだからこそ、ロングテールが成り立つ。

もちろん、僕も物書きの端くれとして多くの人に読んでもらいたいとは思っている。でも、いまの僕には万人の心に響くことなど書けない。せいぜい百人のうち一人か二人が読めばいい内容であり、実際に興味を持たれるのは一万人に一人くらいのものであろう。

でも、たとえ一万人に一人だとしても、インターネットのおかげで「ロングテール」として誰かに届く可能性がある。仮に一学年が百万人だとすれば、潜在的には毎年百人くらい興味を持つ人が現れることになる。十年ならば、千人だ。

その全員が読んでくれるわけではないとしても、そうした人たちに届く可能性があるとなれば、僕が真剣に書いて、公開する価値はあると信じられる。

正直に言って、僕は物書きとしては三流だ。『受験はゲーム』は今でも受験本としては悪くないと思っているが、一万部刷ってまだ捌ききれていない。『学欲』は百部単位だし、本書もまた似たような運命を辿るだろう。とても作家としては食っていけない。

でも、たとえ何人か、何十人かでも、読んでくれる人がいて、それを力に変えてくれる。そのように思うことができたからこそ、真剣に書き続けることができた。

真剣に書くということは、普通に考えられているほど簡単なことではない。自分の人生を載せた、相手の心に届く文章を書こうとすることは、僕の知る限り、もっともヘビーな行為のひとつだ。

そのような行為を最後まで漕ぎ着けるためには、読んでくれる人がいると信じられなければやってられない。僕は、そう信じられたおかげで、本当に書きたいことを、本当に届けたい人に向けて、書き続けることができた。

それは、しんどくはあったが、かけがえのない、そして、幸せな経験だった。

僕の文章を読んだり、入塾を通じて「人生が変わった」と言ってくれた人が少なからずいた。単に彼らが努力しただけなのだが、それでも、そう言ってくれる人のおかげで、ささやかでも自分の挑戦を肯定できたし、これからもそうあり続けようと思える。

たとえすべての人に理解されないとしても、それを分かってくれる人の顔が思い浮かべば、ただそれだけで、何かに挑戦しようという気持ちを奮い立たせるには十分だ。

僕の二十代の挑戦は、ほぼ完全に失敗したと言ふべきなのだと思う。閉塾を決めた数日後、そんなことをある人に話していたら、このように言われた。

「君は教育を諦めたのかい。それとも現在の事業を中止したのかい。現在の事業を中止しただけならば、それは仮説を検証して、その誤りが証明されただけだ。君の話聞く限り、二つか三つの仮説を検証し、誤りが証明されたのだろう。科学の実験においては仮説のほとんどは後に誤りだと証明される。でも、その証明を経なければ、次の仮説は立てられない。だから、君の経験は失敗と言ふべきではない。仮説を立て、検証することを諦めなければ、いつか正しい仮説にたどりつく時がくる」

そんなことくらい、分かってる。分かってるけれど、でも、そう言われて救われた気持ちになった。僕なりに、閉塾するというのはヘビーな経験だったからだ。

思えば、人類も壮大なる仮説の検証と、誤りの証明を繰り返してきたのだろう。

たとえば、明治維新。あの激動の時代に、最初から完全な仮説を持っていた人など、おそらく一人もいなかった。時代が動くにつれて、掲げるべき仮説も変わり続けた。その中で一見すれば無駄死にとしか思えない生涯を送った人もいた。

でも、多くの人在必死になって未来を考え、仮説を立て、検証するという実験を重ねた結果、次の時代を迎えることができた。それは、本当にヘビーな経験だったに違いない。

周りを見渡せば、あの頃のような壮大な実験が行われているようには見えない。過去に築かれたものに安住しているようにしか見えない。でも、多くの若者が肌で感じている通り、このままでは僕らが年老いるころには悲惨な事態になっているだろう。それを変えるためには、おそらく、ヘビーな実験を重ねる以外に道はないのではないかと思う。

そのような見方で、僕は僕なりに仮説を立てて挑戦したことに意義を見出している。

2013年4月の時点では、僕が立てた仮説は、あるいは、その仮説に共感して一緒になって挑戦した人は、間違っていたのかもしれない。でも、その仮説には意味があったと証明される時がやがて来る。そう信じて、僕はこれからの残りの人生を生きていく。

こうしたことを書くにつけ、僕は本当に自分勝手な人間だな、と思わざるをえない。

二十代は「人のために」、そして「人を傷つけないように」ということを優先順位の一番に置こうと努力してきた十年だった。でも、喜ぶべきことなのか悲しむべきことなのか、最終的にこうした決断を下してしまうあたり、やはり僕は根っからの自分勝手な人間らしい。

最終的に塾を畳もうと決意したのは、僕が好きではじめた塾を、僕の手で畳もうということだった。

自分で塾を閉めようと思った時、それは僕だけで作り上げたものではなく、たくさんの人が関わった会社でもあるので、会社は誰のものなのだろうかと考えました。でも、おそらく会社は誰のものでもない。だから、最初から最後まで会社の代表として、そして塾長として、一度も責任を手放さなかった僕が、自分で会社を畳む決断をすることくらいは許されるだろう。そう考えて、誰にも相談せずに独断で決めた。

思い残すことはほとんどないが、唯一あるとすれば、六年かけて見えてきた道塾・道伴舎の指導の完成形が、形にならないまま、塾生に届けられずに終わってしまうことだった。ただ、『学欲』にその完成形の輪郭は残しておいたので、それだけでも模索した日々には意味はあり、良しとすべきなのではないかと考えている。

返すがえす、自分勝手な人間だと思う。でも、どうあがいても自分勝手にしか生きられないらしい。なんとか「人のために」「誰も傷つけないように」生きたいと願っていたが、それは思っていたよりも難しかった。そのことを、十年かけてようやく理解した。

時を重ねないと分からないことが世の中にはたくさんある。そのようなことを知るために、僕らには残りの人生が残されているのだと、最近はどう思うようになった。

たとえば、僕と父との関係性。

僕が最後に父と話したのは、記憶にある限り、離婚が決まった日だった。その日、自宅で父が声をあげて泣いているのを見た。その記憶は二十年近い間、僕の記憶の底に留まっていて、時々泡のように浮かんで来ては、言葉にならないまま消えていくイメージだった。もちろん、それを誰かに話したことなど一度もなかった。

ただ、そのような父の姿を見た僕は、幼心に父親のようにはなるまいと決めていたのだと思う。一人の男としてどう生きるべきかという問題は、いつでも僕の心のうちにあった。そのような「問い」を僕は抱えて生きてきて、その結果、今の僕にたどりついた。

29歳になって思うことは、父が男泣きする姿を見ていなければ、今の僕はないということだ。そのような自分に問いかけを発する光景と、僕らは生きている中で時々遭遇する。

その問いかけに、どのように答えるべきなのかは、その時は分からない。その答えを探し求めて生きているうちに、ああ、これがその答えなのだなと突然気がつく時が来る。

そのような問いに気が付き、答えを知ることは、生きていく中でもっとも大切にすべきことのひとつなのだと思う。残念ながら、父は僕と再会することのないまま亡くなった。伝えたいと思うときには、もうその相手はこの世にいないのだ。

でも、それはそれでいいのかもしれない。勝手な考えだけれど、だからこそ、僕は今こうしてここに書いている。それもまた、僕の父が生きた証なのではないかと思う。そのような問いかけを父は僕に与えてくれていた。それに気づくのに二十年かかったが、その二十年には意味があった。

僕の二十代は自分が生きる意味を求めて彷徨い歩いていたように思う。ずいぶんとたくさんの人に迷惑をかけたり、傷つけたりしながら、たどりついた一つの答えは、このようなものだった。誰の人生にも意味なんて無いが、でも、一人ひとりが問いを引き受けて、それに答えを出して生きていくことはできる。

そう思った時に、V・E・フランクルの『夜と霧』の一節が思い出された。

「もういいかげん、生きることを意味を問うことをやめ、わたしたち自身が問いの前に立っていることを思い知るべきなのだ。生きることは日々、そして時々刻々、問いかけてくる。わたしたちはその問いに答えを迫られている。考えこんだり言辞を弄することによってではなく、ひとえに行動によって、適切な態度によって、正しい答えは出される。生きるとはつまり、生きることの問いに正しく答える義務、生きることが各人に課す課題を果たす義務、時々刻々の要請を充たす義務を引き受けることにほかならない」

敬虔なスピノジスト（スピノザ主義者）であったフランクルが、ナチスの強制収容所での生活を経て辿りついたほど、僕は切実に感じているわけではないのかもしれない。

でも、僕なりに行動を起こし、挑戦を重ね、時には苦しいこともある中で、それなりの確かさを持って語るができるようになった。

おそらく僕らは、問いを引き受けて生きているのだ。そして、そのような問いはおそらく、一人の人間の営みの中にも、家族の営みの中にも、あらゆる組織の営みの中にも、もちろん国家の営みの中にも、そして宇宙の営みの中にも、あまねく存在している。

そのように存在している問いを、自らの身に引き受けるということ。それが生きて歳を重ねるといふことなのだろう。わだかまりのあるものがあるとすれば、ケリをつけられない思い出があるとすれば、それを抱えて、答えを出すために、ケリをつけるために、未来に向けて歩みを進めていけばいいのだと思う。勝手ながら、僕はそう考えている。

最後に、気になる人もいると思うので、僕の今後について触れておこう。

僕は、しばらく引きこもります。なんてたって、引きこもるのは得意なのでね。

正直なところ、僕の本来的な性格からすれば、これまで外での活動をし過ぎた。

大学受験の時には、商学部だけは志望学部から外したほどビジネスには興味のなかった人間が、よくこれだけ働いた。人と話すよりも本を読んでもの方が好きな人間が、信じられないほどたくさん話をした。外でアクティブに活動するよりも、引きこもってゲームをしている方が得意だった人間が、ずいぶんといろんな場所を飛び回った。

性に合わないことをそれなりに頑張ってきたというのが率直な感想です。塾長という肩書きがなくなった今、素直に言ってしまえるけれど、ほんと、似合わないことをやったもんだ。いや、好きでやったことではあるのだけれどね。

だから、僕はしばらく引きこもろうと思う。最低でも一年。その先のことは、引きこもりの時期を通過してみないと分からない。

本を書くことは脱皮をするようなもので、その時々を全力を出しきって、自分が書けるだけのことを書く。そこに、その瞬間に考えてきたこと、生きてきたことのすべてが現れている一方で、書き終えた後ではその殻を脱ぎ去った別の何者かになっている。

これからやろうとしていることは、それと並べて言えば、蛹（さなぎ）になろうとしているようなものなのかもしれない、と思う。自分を取り巻く繭のような囲いを作り、しばらくその中で一人の時を重ねる。

もちろん、その繭の中で死んでしまうこともある。ご丁寧に、日本語にはそのような死に方を指す「死に籠り」という言葉まである。でも、もちろん籠るからには、そこから出ることを、それも、これまでとまったく違う形で出ることを、目指す。

昆虫が蛹になって成虫となることを、生物学ではメタモルフォーゼと呼ぶ。繭を破って出てきた時には、幼虫とは姿形のまったく違う成虫に変わっている。だが、その元になるのは、幼虫時代に蓄えた養分や経験だ。

三十代以降の僕がどのように生きるのかはまだ分からないが、後になって振り返れば、これまでの十年間は僕にとってメタモルフォーゼを行うための幼虫時代とも捉えられるのかもしれない。でも、そのような日々は、それ以上の何を望むべくもないほど、味わい深い日々だった。それを、美しい時間だったと言っても許されるようにすら思う。

いや、現実には美しくないこともたくさんあったよ。ひどいこともたくさんしたし、たくさん起こった。でも、時というフィルターをかけて通して見れば、それらのたくさん

出来事が、喜怒哀楽のひとつひとつが、光り輝いて見える。そう言い切るにはもうしばらく時が必要なものもあるけれど、早晚、すべては光の中に包まれていくと思う。

だから。

僕は十分過ぎるくらい美しい時間を味わわせてもらいました。何かの弾みで死に籠りすることになっても、僕の人生にまったく悔いはない。

でも、もし幸運にもそこから出ることができたとしたら、メタモルフォーゼを起こして、幼虫が蝶に生まれ変わるような変化を起こすことができたなら、その時はまたお付き合いください。

その時は、二十代の僕からは想像もできない日々を生きることでしょう。おそらくは、幸運にも与えられたボーナスステージに感謝しながら、僕なりにできることを精一杯やっ
ていくでしょう。

そんな日々になることを信じて、しばらくのあいだ皆さんに、そして僕の二十代に、別れを告げたいと思います。

最後まで付き合ってくれて、どうもありがとう。

心から、感謝しています。

二〇一三年四月 桜舞う季節に、父の使っていた書齋にて 馬場 祐平

本書に登場した書籍・作品一覧（登場順）

- [『走ることについて語るときに僕の語ること』](#) 村上春樹
- [『街場の大学論』](#) 内田樹
- [『竜馬がゆく』](#) 司馬遼太郎
- [『深夜特急』](#) 沢木耕太郎
- [『エチカ』](#) スピノザ
- [『異邦人』](#) カミュ
- [『人間の絆』](#) サマセット・モーム
- [『自分の中に毒を持って』](#) 岡本太郎
- [『ほぼ日刊イトイ新聞の本』](#) 糸井重里
- [『学問のすすめ』](#) 『福翁自伝』 福沢諭吉
- [『洪庵のたいまつ』](#) 司馬遼太郎
- [『ウェブ進化論』](#) 『ウェブ時代をゆく』 梅田望夫
- [『マイクロソフトでは出会えなかった天職』](#) ジョン・ウッド
- [『希望の国のエクソダス』](#) 村上龍
- [『ショーシャンクの空に』](#) (映画) 原作スティーブン・キング
- [『夜と霧』](#) V・E・フランクフル
-
- [『受験はゲーム』](#) 『学欲』 馬場祐平